

第三章 《分註法》と《疑問法》

——《仮定法》以前の Conj./Subj.——

序節 蘭・英・独語学における Conj./Subj.の問題点

Conj./Subj.の場合、その訳語に関する問題点は、蘭語学の時代においてすでに出尽くしているように思われる。それは、まず第一に、蘭語学では、現代英文法で《仮定法》、ドイツ語文法で《接続法》と呼ぶものの範囲がずっと広がったこと、第二に、その広範な用法の中から仮定推量 (Conditionalis) が蘭語学において差別化される傾向を示し、後に独逸語において分離独立すること、そして第三に、この当時 Conditionalis は、【仮定未来時】という Ind.と Subj.の時制であって、Conj./Subj.Mood ではなかったことである。

問題点①：《分註法》と《疑問法》

蘭語学の時代は、後世のように“so”・“<indien” (=if) のみの《仮定法》でなく、“schoon” (=though) も“als” (=when) も、更には“dat” (=that) をも含めて、これらすべてが、Subj.《附属法》というよりもむしろ Conj.《接続法》であった。この Conj.に関して、その多種多様な用法を熟考理解することから意識創出された誠にユニークな術語を、我々は蘭語学（特に前期）の中に見出すことができる。

和蘭語の Conj./Subj.に関する用語の中でもとりわけ注意を引かれるのは、《分註法》と《疑問法》である。そのどちらにも対応する和蘭語の術語は存在しない。加えて前者の場合は、《死語法》と併せて、何故これが Conj./Subj.の意になるのか容易に理解し難く、後者の場合は、「疑問文を作る法」である《疑問法》と誤解混同されている。

この、一種の意識とも言うべき、和蘭語の術語と対応関係を見出し得ない用語を、ここでは特に「創出術語」と呼ぶことにするが、この創出術語は他にもいくつかあり、これは原語直訳的傾向の強い明治の英・独語学とは大いに異なる蘭語学の特徴と言える。時制において単独の過去形である Imperf.が《過去之現在》と意識された例に関しては、前章で

述べた通りである。

問題点②：独逸語における Conditionalis の分離

日本において、これらの従属接続詞の中から、英語なら<if—should/could/would>、独逸語なら<wenn—würde>が担う仮定推量が Conditionalis として分離独立の傾向を示すのは、幕末から明治初年にかけてである。明治期の英語学および独逸語学における Conj./Subj. の訳語は、基本的にはほとんど幕末の蘭語学から受け継がれたものではあるのだが、しかし、この<if—should/could/would><wenn—würde>の独立という Conj./Subj. 解釈の変化に対して、明治期の英語学と独逸語学は新たな用語を考案せざるを得なかった。英語の《仮定法》、独逸語の《約束法》がそれである。しかし英語学では、Subj. の内容が 明治初年からすでに<if>にほぼ限定されたため、Konj. と Kond. をめぐって定義内容と訳語が紛糾した独逸語に比して、用語的には問題は少ない^{註1}。従って、Subj./Conj. に関して考察の対象となり得るのは、蘭語学と、特に独逸語学の分野である。

特に独逸語原典においては、表 27 (342 頁) を見ればわかるように、Kond. が一時 Konj. から分離独立する時期がある。この独立した仮定推量は、日本では専ら《約束法》——表 1 (31 頁) に拠ると、これは明治初年、仏語学の村上英俊に発する——と呼ばれたが、この Kond. の分離は明治以後の独逸語学に大きな影響を及ぼした。即ち、独逸語原典から再び Kond. が姿を消した後も、日本の独逸語学には《約束法》が温存されたのである(表 11 [107 頁])。明治の独逸語学は、Konj. に関しては原典に非忠実に、《約束法》を保持する傾向を強く示している。

問題点③：《過去未来》

蘭語学の時代、仮定推量は未来時制に属していた。現代であれば、未来時制とされるのは、英語と独逸語を例に採ると、<I shall learn><ich werde lernen> = 「未来」と<I shall have learned><ich werde gelernt haben> = 「未来完了」のふたつである。しかし、《第二未来》として「未来完了」の現れるのは、表 16 (161 頁) によれば後期蘭語学者の古関三英以後であって、前期蘭語学の時代には「未来完了」はまだなく、代わりに<Onbepaalde tijd>、あるいは<Onderstellende Toekomstige tijd>と呼ばれる時制が置かれていた。前者の意味は《不定時》で、後者のそれは【仮定未来時】である。これが<ik zou+Inf.>(=I should+Inf. ; ich würde+Inf.)という形式を持つ《過去ノ未来》で、これは、現代文法の理解を以ってすれば、現在の非現実仮定および仮定推量を表わす Conditionalis——すなわち英語の「仮定法」、ドイツ語の「接続法第 2 式」であろう。日本の蘭語学者は《不限時》《不定時》《普通時》などと呼び^{註2}、大槻玄幹の『蘭学凡』(文政 7) は、<応 料 度>という、現代人にはいささか難しい語句で以って、この時制を説明している^{註3}。要するに、当時の文法は、Conditionalis による非現実仮定推量を未来時制の一種と考えていたのであり、それを【仮定未来時】と言い、同時に【不定時】とも呼んで

いたのである。

表 15 (154 頁) を見ると、1700 年代初頭から 1800 年代前半頃までの和蘭語原典において、Ind の中に Subj. が入り込んで 4 つの未来時を形成しているのが分かる。前章で述べたように、伝統文法の時制は 5 個で、未来時制はひとつしかないのが普通であった。あの Maatschappij の *Grammatica* がそうである。

ところが、表 15 (154 頁) が始まる 1700 年代に入ると、全時制数は 8 個になる。未来時制の数が急に増えて 4 つになってしまったからである。英語で言えば <I shall learn> <I should learn> <I shall have learned> <I should have learned> で、現代であれば、<should> を用いた 2 表現は Subj. になるはずである。Weiland と Van der Pyl の時制がこれで、Conditionalis を用いた 2 時制を <voorwaardelijk toekomstige tijd> 【仮定未来時】と呼んでいる。<voorwaard> は、「前提」「条件」の意で、安政の頃 <約束> と訳された和蘭語である。

この Ind. と Subj. の入り混じった 4 つの未来時制は、1850 年代——日本の元号で言えば安政年間までは、和蘭語原典でしばしば見られるのであるが、その後、^(安政 2) 1855 年頃から <I should learn> と <I should have learned> が未来時制より脱落し、<I shall have learned> が《第二未来》として定着するようになる。

現代オランダ語の時制は 8 個 (現在・現在完了・過去・過去完了・未来 <Hij zal lopen>・未来完了 <Hij zal gelopen hebben>・過去未来 <Hij zou lopen>・過去未来完了 <Hij zou gelopen hebben>) なので、1700 年代の 4 未来のまま現代に至ったのかと思われるが、表 15 (154 頁) では 1830 年頃から現代と同じ 6 時制が始まり、8 時制が廃れた後の約半世紀の間 6 時制の時代が続き、20 世紀初頭に再び 8 時制に戻っている。《過去》と《半過去》のところでも触れたが、時制には時代の趨勢というものがあり、文法はいつの世も決して不変ではないのである。

ところが、この 4 未来の内容であるが、4 種の未来が出始めた最も初期のものである Sewel の蘭文典——これは英語で書かれているため文法用語は英語である——では、<2nd Future> の内容が、<ik zou leeren> = <I should learn> という Conditionalis になっていて、<ik zal geleerd hebben> = <I shall have learned> ではないのである。しかもこの Conditionalis は、Conj./Subj. だけでなく、Ind. にも属している。この時制を、Sewel は <Indefinite Tense> 【不定時】、または <2nd Future> 《第二未来》と呼んで、<ik zal leeren> = <I shall learn> の <Future> 《未来》の次に位置させており (^{享和 5}1708, p.18, 62, 65, 67; ^{享延 2}1749, p.15, 54, 57, 59; ^{明和 3}1766, p.26, 62, 64, 66)、中野柳圃は『四法諸時対譯』で、これを《過去ノ未来》と名づけたのである。

このように、前期蘭語学の時代は、未来時制の扱い方が現代と異なるのである。それゆえ我々は、仮定推量の Conditionalis が入り込んだ直説法の未来時制に直面して、Ind. と Subj. の扱いが間違っているとか、「未来完了」でない《第二未来》を見て、「未来完了」の理解ができていないなど、現代的な文法観を基準にした誤解をしないよう注意しなければ

ならない。

さて、この複雑な未来時制を、わが国の語学関係者はどのように呼び別けたのであろうか。Sewel の4未来は、上述の『四法諸時対譯』では、

a. Ik zal leeren. (=I shall learn)	直説法 《未来》
Als Ik leeren zal (=When I shall learn)	不限時 《未来》
	…… (現代の「未来」)
b. Ik zou leeren (=I should learn)	直説法 《過去ノ未来》
Toen Ik leeren zou (=When I should learn)	不限時 《過去ノ未来》
	…… (現代の「過去未来」)
c. Als Ik geleerd zal hebben (=When I shall have learn)	不限時 《未来ノ過去》
	…… (現代の「未来完了」)
d. Schoon Ik geleerd zou hebben (=Tho I should have learn)	《不限時ノ過去》
	…… (現代の「過去未来完了」)

と呼ばれ、混同はない^{註4}。<zullen> (=shall) を用いるものは《未来》で、それに<hebben +p.p.>を組み合わせると、この形式は当時の理解では《過去》であるから、《未来ノ過去》となる。一方、過去形の<zou>を基本にした場合、これに動詞の不定法を組み合わせると、直説法なら「過去から見て未来に起こる出来事」を表わす《過去ノ未来》で、現在の非現実仮定に用いれば《不限時》の《過去ノ未来》となる。また《過去》である<hebben +p.p.>と一緒に、過去の非現実仮定の表明に使用すれば《不限時ノ過去》となるから、《未来ノ過去》と《過去ノ未来》とは混同しようがないからである。

ところが、明治期の独逸語になると、Fut.Perf. または Fut. II である<ich werde gelernt haben>が《未来過去》なのか《過去未来》なのかという問題が生ずるのである。《過去未来》を「過(ぎ)去(った)未来」と解釈するのならまだ良い。これを、その背後に横たわるヨーロッパ語の時制に関する知識を持つことなしに、文字通りの矛盾した言葉の組み合わせと捉えると、明治期の国文典関係者が経験したような混乱に陥ることになる。表 17 (195 頁) および表 19 (208 頁) から、《未来過去》は英語 3 例・独逸語 7 例、《過去未来》は英語 0・独逸語 8 例であり、この《過去未来》という用語が専ら独文法で用いられたものであることがわかる。江戸期蘭語学の《未来ノ過去》と、明治期になってからの《未来過去》を逆転させてしまったのは、独逸語の文法書である『セーフェル氏文典直譯』(明治⁸13)であった^{註5}。

そして、この名称の問題と同時に、独逸語の<ich werde gelernt haben>は、Kond. II である<ich würde gelernt haben>とのニュアンスの相違を日本語で表現できないという、和訳上の問題をも抱え込むことになる。

以上の3点を中心に、本章の考察は行なわれることになるであろう。特に、第一の留意点であるところの、《分註法》《死語法》を始めとする Conj.に関する創出術語は、用語自体の難解性も手伝ってなかなか手が出し難い。《分註法》は、前期蘭語学における Conj. の主要な訳語である。当時の理解では、主文の Modus は直説法で、それに“接続”される「従文」（独逸語では「^{キツ}副文」）が<Bijvoegende wijs><Aanvoegende wijs>とされ、この意味を直訳して、『蘭学凡』（文政¹7）以降の後期蘭語学は、Conj.を一般に《附説法》《接続法》と訳した。

ところが、柳圃を中心とする長崎通詞のグループは、これを《分註法》という一種独特な名称で呼んでいる。なぜ彼らは、Conj.をこのような名前と呼んだのか。ここから、日本の Conj./Subj.の語学的研究が始まる。しかし、その理解の仕方は、現代の日本人には、残念ながら最早ほとんど理解不可能なものとなってしまった。なぜなら、そこにおいては、柳圃が和漢の学に深く通じていたために、我々には馴染みのない漢文の用語と、和漢文が持っている口語文にはない優れた表現要素が充分に吟味・咀嚼され、和蘭語理解に活かされているからである。

第一節 蘭語学における《分註法》と《疑問法》

1. 原語と訳語の特徴

表1 (31頁) および表2 (37頁) から、原書の蘭文典における Conj. の和蘭語名と江戸期におけるその訳語をまとめると、次のようになる。

原 語	訳 語
1. Wenschende Wyze または Optativus	希説法
2. Subjunctivus	— 附属法
3. Ondervoegelyke Wyze	
4. Byvoegende Wyze または Bijvoegende wijs	— 附説法・附接法・接続法
5. Aanvoegende wijs	
6. Toevoegende wijze	
7. ……………	分註法・分注法
8. ……………	死語法
9. ……………	未定様
10. ……………	虚構様
11. ……………	疑示法・疑問法・疑説法
12. ……………	承起法

原語のうちで最も普通に用いられているのは4.と5.である。<bijvoegen>と<aanvoegen>は、双方ともに英語の<to add>、独逸語の<anfügen>に相当し、主文に何らかの説明文を「付け足す」・「副える」ということを意味する^{註6}。

一方、訳語のなかで最も分かり易く、かつ原語の意に忠実なのは、《附説法》《附接法》《接続法》と《附属法》である。各用語の初出は、《附説法》が藤林普山『和蘭語法解』、《接続法》が、大槻玄沢を父に持つ茂禎・大槻玄幹、そして《附属法》が、幕末における仏蘭西語学の創始者・村上英俊である。三者いずれも明治の英・独・仏語学に引き継がれるが、特に《接続法》は、独逸語・仏蘭西語等における正式な文法用語として、現代に至るまで健在である。

表 24. 蘭語学における Subjunctivus の訳語の分類

年代	書名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1777(安永6以後～ (天明・寛政・享和期)	作文必要訳書須知 属文錦囊	分註法											
	九品詞名目	分註 分注											
1805 (文化2)	四法諸時対譯		死語法										
1810 (文化7)	蘭語九品集	分註											
1811 (文化8)	和蘭文学問答	分註法					希説法						
1812 (文化9)	九品詞略	分註法											
1813(文化10)	助字要訣(英?)	分註法		結法									
1814(文化11)	訂正蘭語九品集	分註法	死語法										
	和蘭文範摘要	分註法											
	六格前編												
1815(文化12)	オランダごほうげ 和蘭語法解(英?)				附説法								
1816(文化13)	蘭学梯航				Aanvoegende wijze								
	魯語文法規範(露)							承起法					
	蘭学凡					接続法							
1815～1822 (文化12～文政5)の間?	和仏蘭対譯語林	分注法											
(文政年間?)	和蘭属文錦囊抄	分註法											
(?)	繙卷得師草稿 (全集本)				附説法 附接法								
1828～29? (文政11～12?)	繙卷得師草稿 (国会図書館本)	分註法 (關係代名詞)			附説法								
(文政 ～天保?)	小関三英の断片 3葉								未定様				
1840(天保11)	英文鑑(英)									虚構様			
(安政年間?)	四格十品弁解				附説法 附接法								
1855 (安政2)	和蘭文語凡例										疑示法		
1856 (安政3)	挿訳俄蘭磨智科												
	蘭学獨案内				附説								
1857 (安政4)	和蘭文典便蒙									虚構			
	和蘭文典字類										疑問法		
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12

(表 24-1)

年代	書名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1864 (安政 1)	仏語明要 (仏)												附屬法
1866 (元治 1)	洋学須知										疑説法		
1868 (明治 1)	洋学指針(蘭学部)				附説								
1870 (明治 3)	明要附録(仏)											附屬法	約束法 (Conditionalis)

(表 24-2)

ところが蘭語学では、これら 14 種の訳語のうち、対応する和蘭語を持たないものが、半数以上の 8 種類にも上るのである。中には《分註法》《死語法》のような、見慣れない変わった用語もある。これらの用語は、いったいどのように作り出されたのであろうか。

2. 《分註法》

2.1. 中野柳圃の《分註法》

表 24 (296 頁) は、蘭語学における Conj. の訳語のみを取り出して、その使用状況を整理したものである。これを見ると、大槻玄幹『蘭学凡』(文政 7) を境に訳語が二分されることに気付く。前期蘭語学は《分註法》が主であるが、この用語を用いる諸書は、『和仏蘭対譯語林』(本木正栄)、『九品詞名目』(中野柳圃)、『訂正蘭語九品集』『和蘭文学問答』(馬場佐十郎貞由)、『和蘭属文錦囊抄』(吉雄権之助) という、一連の長崎通詞達の手になるものである(この時期『和蘭語法解』のみ訳語が異なっているのは、著者の藤林普山が、長崎通詞に師事しつつも、訳語は自ら別のものを創出したためである)。

この《分註法》とは、一体いかなる意味であろうか。中野柳圃の和蘭語研究は専ら P. Marin の仏文典と W. Sewel の蘭文典に拠っているのであるが、江戸幕府旧蔵洋書中の蘭文典では、前者における仏蘭対訳文典の用語は <Subjonctif> と <Conjonctif> (共に蘭訳は <Byvoegende Wyze>)、後者は <Wenschende Wyze> (Optativus) と <Ondervoegelyke Wyze> (Subjunctivus) である。これらにそれぞれ訳語を対応させれば、<Conjonctif> は文字通り《接続法》、<Byvoegende Wyze> は《附説法》、付け足される文のランクが一段低いという意味を含んだ <Subjonctif> と <Ondervoegelyke Wyze> は《附属法》、<Optativus> と <Wenschende Wyze> は、文化 8 年の馬場佐十郎貞由の訳にかかる『和蘭文学問答』に唯一カ所だけ出てくる《希説法》ということになるであろう。これからもわかるように、柳圃の《分註法》は原語の訳ではない。かと言って、意味的な面からの訳語とも思えないのである。

では「分註」とは一体何か。これは、実は漢学および国学における注の記述スタイルのことである。本文の中途に挿入された細字双行——即ち、小さい字体で二行書きされた註釈が「分註」と呼ばれるのである。これは、『英文鑑』『和蘭語法解』を始め、蘭語学関係の著作にも普通に見られる注釈形式である。例えば、

○諸学芸ノ勸進ヲ司レル文社先生。其諸般ノ職業中ニ於テ。我本国ノ華美ノ文法ヲ順整ニ学知セシメント欲スルノ念ヲ。其緊要中一事ニ参入シテ。以テ初ニ留地棉多ヲ発行シ。次ニ聖太幾施斯ヲ発行セリ。然シテ^(しょう) 庠校ノ教導者ニ至ルマテ。此目的ニ於テ催進スヘキ所ノ者ハ。更ニ皆全備セシメンカ為ニ。亦タ之ニ瓦鷲麻知加^{ガラムマテカ} 即并蘭語法學[訳和蘭文語凡例前編トス]ヲ附続セリ。

[括弧の此は筆者]

(大庭雪斎『和蘭文語凡例 前編(上)』序、安政^{1 8 5 5}2) 注7

における細字双行の<即ち和蘭語法学…>云々の部分が、所謂「分註」と言われるもので、
<瓦鸞麻知加> (*Grammatica*) という言葉の「意味を説明する」機能を持つ。言わばこの「分註」は、“which is called…”のような関係代名詞による関係文に相当する役割を果たしているのである^{注8}。

柳圃は P. Marin と W. Sewel の文典を主に利用したが、下の資料 68 は、Sewel (1708) の辞書中英文典に記載されている be 動詞の *Conjugatio* [動詞活用一覧表]である。

資料 68.

de Engelsche Spraakkonst.

19

Vervoeging van 't Helpwoord I Am, Ik ben.

De TOONENDE WYZE.

De Tegenwoordige tyd.

Eenvoud.

I AM Ik ben.
Thou art, Gy bent.
He is, Hy is.

Meervoud.

We are, Wy zyn.
Ye are, Gylieden zyt.
They are, Zy zyn.

De Onvolkomen verledene tyd.

Eenvoud.

I was, Ik was.
Thou wast, Gy waart.
He was, Hy was,

Meervoud.

We were, Wy waaren.
Ye were, Gylieden waart.
They were, Zy waaren.

De Volkomen verledene tyd.

Eenvoud.

I have been, Ik heb *of* ben geweest.
Thou hast been, Gy hebt *of* bent geweest.
He hath been, Hy heeft *of* is geweest.

Meervoud.

We have been, Wy hebben *of* zyn geweest.
Ye have been, Gylieden hebt *of* zyt geweest.
They have been, Zy hebben *of* zyn geweest.

De Meer als volkomen verledene tyd.

Eenvoud.

I had been, Ik had *of* was geweest.
Thou hadst been, Gy hadt *of* waart geweest.
He had been, Hy had *of* was geweest.

Meervoud.

We had been, Wy hadden *of* waaren geweest.
Ye had been, Gylieden hadt *of* waart geweest.
They had been, Zy hadden *of* waaren geweest.

De Toekomende tyd.

Eenvoud.

I shall of will be, Ik zal zyn
Thou shalt of wilt be, Gy zult zyn
He shall of will be, Hy zal zyn

Meervoud.

We shall of will be, Wy zullen zyn
Ye shall of will be, Gylieden zult zyn
They shall of will be, Zy zullen zyn

De GEBIEDENDE WYZE.

Eenvoud.

Be thou Wees gy.
Let him be, Dat hy zy.

Meervoud.

Be we of Let us be, Zynwe, *of* laat ons zyn.
Be ye, Weest *of* zyt gylieden.
Let them be, Dat zy zyn, *of* laat hen zyn.

c 2

De

20

Beknopt vertoog wégens
De WENSCHENDE of ONDERVOEGELYKEE WYZE.
De Tegenwoordige tyd.

<p style="text-align: center;"><i>Eenvoud.</i></p> <p>① <i>Tbat</i> { <i>I be,</i> <i>Tbou beeft,</i> <i>He be,</i> } <i>Dat</i> { <i>Ik zyt.</i> <i>Gy zyt.</i> <i>Hy zy.</i> }</p>	<p style="text-align: center;"><i>Meervoud.</i></p> <p><i>Tbat</i> { <i>We be,</i> <i>Ye be,</i> <i>They be,</i> } <i>Dat</i> { <i>Wy zyn.</i> <i>Gylieden zyt.</i> <i>Zy zyn.</i> }</p>
De Onvolkomen verledene tyd.	
<p style="text-align: center;"><i>Eenvoud.</i></p> <p>② <i>Tbat</i> { <i>I were,</i> <i>Tbou wert,</i> <i>He were,</i> } <i>Dat</i> { <i>Ik waar.</i> <i>Gy waart.</i> <i>Hy waare.</i> }</p>	<p style="text-align: center;"><i>Meervoud.</i></p> <p><i>Tbat</i> { <i>We were,</i> <i>Ye were,</i> <i>They were,</i> } <i>Dat</i> { <i>Wy waaren.</i> <i>Gylieden waart.</i> <i>Zy waaren.</i> }</p>
De Volkomen verledene tyd.	
<p style="text-align: center;"><i>Eenvoud.</i></p> <p>③ <i>When</i> { <i>I have been,</i> <i>Tbou haft been,</i> <i>He had been,</i> } <i>Als</i> { <i>Ik geweest ben of heb.</i> <i>Gy geweest bent of hebt.</i> <i>Hy geweest is of heeft.</i> }</p>	<p style="text-align: center;"><i>Meervoud.</i></p> <p><i>When</i> { <i>We have been,</i> <i>Ye have been,</i> <i>They have been,</i> } <i>Als</i> { <i>Wy geweest zyn of hebben.</i> <i>Gyl. geweest zyt of hebt.</i> <i>Zy geweest zyn of hebben.</i> }</p>
De Meer als volkomen verledene tyd.	
<p style="text-align: center;"><i>Eenvoud.</i></p> <p>④ <i>If</i> { <i>I had been,</i> <i>Tbou hadst been,</i> <i>He had been,</i> } <i>Zo</i> { <i>Ik geweest waare of hadde.</i> <i>Gy geweest waart of hadt.</i> <i>Hy geweest waare of hadde.</i> }</p>	<p style="text-align: center;"><i>Meervoud.</i></p> <p><i>If</i> { <i>We had been,</i> <i>Ye had been,</i> <i>They had been,</i> } <i>Zo</i> { <i>Wy geweest waaren of hadden.</i> <i>Gylieden geweest waart of hadt.</i> <i>Zy geweest waaren of hadden.</i> }</p>
De Toekomende tyd.	
<p style="text-align: center;"><i>Eenvoud.</i></p> <p>⑤ <i>When</i> { <i>I shall or will be,</i> <i>Tbou shalt or wilt be,</i> <i>He shall or will be,</i> } <i>Wanneer</i> { <i>Ik zyn of weezen zal</i> <i>Gy zyt of weezen zult.</i> <i>Hy zyn of weezen zal.</i> }</p>	<p style="text-align: center;"><i>Meervoud.</i></p> <p><i>When</i> { <i>We shall or will be,</i> <i>Ye shall or will be,</i> <i>They shall or will be,</i> } <i>Wanneer</i> { <i>Wy zyn of weezen zullen.</i> <i>Gylieden zyn of weezen zult.</i> <i>Zy zyn of weezen zullen.</i> }</p>
De Onderstellende Toekomende tyd.	
<p style="text-align: center;"><i>Eenvoud.</i></p> <p>⑥ <i>I should be,</i> <i>Ik zou zyn of weezen.</i> <i>Tbou shouldst be,</i> <i>Gy zoudt zyn of weezen.</i> <i>He should be,</i> <i>Hy zou zyn of weezen.</i></p>	<p style="text-align: center;"><i>Meervoud.</i></p> <p><i>We should be,</i> <i>Wy zouden zyn of weezen.</i> <i>Ye should be,</i> <i>Gylieden zoudt zyn of weezen.</i> <i>They should be,</i> <i>Zy zouden zyn of weezen.</i></p>

De

19 頁は<De Onbepaalde Wyze>《不定法》、<De Toonende Wyze>《直説法》、<De Gebiedende Wyze>《命令法》の、20 頁は<De Wenshende of Ondervoegelyke Wyze>【希望法または従属接続法】の活用で、ここで問題になるのは 20 頁の方である。

Sewel (1654-1720) は、名誉革命 (1688) 直後の蘭英同君連合 (1689~1702) を経験した世代のイギリス系オランダ人である。彼のこの辞書には蘭文典と英文典の両方が収載され、蘭文典は英語で、英文典は和蘭語で書かれている。和蘭語名を表示したために敢えて英文典の方を用いたが、同時収載の蘭文典では、同一動詞の活用表における話法名が、英語で<The Infinitive Mood><The Indicative Mood><The Imperative Mood>

<The Optative or Subjunctive Mood>、各時制名が<The Present Tense><The Preter-Imperfect><The Preter-Perfect><The Future><The Indefinite Tense>のよう示されている〔蘭文典の部分は本節末の写真資料参照〕。

《文註法》の各活用形の用法を、中野柳圃の用語を借りて解説すると次のようである。

①《現在》：「～ということ」という意の接続詞<that : dat>を用いて、「～であらんことを」を表わす「仮定法現在」、ドイツ語で言えば要求話法の「接続法第1式」で、和蘭語の活用<Ik zy><Gy zyt><ch Hy zy>…は、ドイツ語の<ich sei><du seiest><er sei>…と同じである。

②《過去ノ現在》および《仮令》：現在の非現実を表わす「仮定法過去」、ドイツ語の「接続法第2式」である。<that : dat>とともに用いられるということは、「～だったらいいのになあ」であろうか。英語の<I were><Thou wert><He were>と和蘭語の<Ik waar><Gy waart><Hy waare>に、ドイツ語の<ich wäre><du wärest><er wäre>を加えると、3者の語形の共通性が改めて目を引く。

③《過去》：活用は直説法の「現在完了」に同じである。

④《過去ノ過去》および《仮令》：“if : zo”とともに過去の非現実仮定を表わしている。

⑤《未来》：直説法未来と同じで、助動詞は<shall>と<zullen>である。

⑥《過去ノ未来》または《不限時》《未来ノ不定》：助動詞は<should>と<zou>で、この【仮定推量時】が《不限時》即ち《未来ノ不定》として使われると Conditionalis である。

Sewel の文典では、このように動詞の活用がただ表でのみ示されるので、我々はその意味するところを行間から読み取らなければならない。特に②に関しては、単独の過去形が現在の非現実を表わすということが、変化形の表示だけからでは理解されにくい。そのため柳圃の『四法諸時対譯』(1805)^{文化²}には、文註法《過去ノ現在》のところ、わざわざ<増 仮令 Als ik leerde>として、過去形による現在の非現実仮定の用法を付け加えられているほどである。この点、柳圃の用語には注意が必要で、《仮令》は、過去形と過去完了形だけで以って、助動詞<zou : should>を用いずに表わす非現実であるが、《不限時》・《未来ノ不定》は<zou : should>を用いる非現実仮定と不確実な推量 Conditionalis を指しているようなのである^{註9}。

さて、これら Subj.⑥時制のうち、現代では、②と④、及び⑥が Subj.とされるのであろうが^{註10}、ここには“if : zo”に留まらず、“dat : that”と“when : wanneer”が、さらに別の動詞活用表には“tho : hoewel”を含む従属節が列挙されているように、当時は非現実仮定以外のものを含む広範なものが Conj.に属している。これらの接続詞の代表が“dat”で、例えば Peyton (仏語対訳英文典：1776)^{文³}が“that : que”の句を、P. Marin (蘭語対訳仏文典：1790)^{文²}が“afin que : op dat”の、Weiland (仏語対訳蘭文典：1806)^{文³}が“dat : que”の、Maatschappij^{マートシカッペイ}の *Grammatica* (蘭文典：1822)^{文⁵}と *Ridimenta* (蘭文典：1846)^{文³}が“dat”の句を Conjunctivus として挙げている。

この“that : dat”を筆頭とする従属接続詞に導かれた従文(独逸語では《副文》)の部

分が、柳圃の言う《分註法》である。つまり柳圃は、《結ヒ詞》《連接詞》等によって導かれる《下句》を、《上句》に附された一種の注釈、即ち〈分註〉として理解したのだと考えられるのである。従文の機能は主文に附された〈分註〉に相当する——これが、《分註法》という用語の成立した所以ではなかろうか。

すべて分註法ト云モノハ 助又助代ナドヲ句ノ第二位ノトコロニ擧ゲ置クコト絶
 テナキモノナリ 何トナレバコノ法ハコノ上ニアル直説法ノ句ノ云ヒタシノ如キモノ
 ニテ モノノ落着スル第二位ノ助又助代ハ上ノ句ノモノニ到^(ママ)シアルモノ也
^(ママ)
 aenvoegende ト云ハコノ意ナルヘシ 一句ニテ落着スルモノノ類ニアラズ

(すべて《分註法》では、助動詞または動詞を文章中の第二位、つまり主語の次に置くことは決してない。何故かという、《分註法》は、先行する直説法の句の、謂わば〈云ヒタシ〉であって、句を完結・決着させるのは、この先行する〈上ノ句〉の第二位、即ち第一位の主語の次に置かれた動詞または助動詞の方だからである。〈aenvoegende〉(接続)とは、恐らくこういう意味であろう。《分註法》だけでは句は決着しないのである。)

(中野柳圃原著；西肥長崎譯詞 吉雄権之^(ママ) 介 先生口述・門人 東勢 武部游筆記『作文必要譯書須知属文錦囊』京都大学附属図書館所藏、辻 蘭室の書き入れ) 註11

柳圃の学統を汲む野呂天然の『九品詞略』は、〈文注一動詞ノ下ニ dat のツク法〉と簡潔に言い、また、柳圃の『属文錦囊^{のう}』を上のように更に発展させて伝えた柳圃の弟子・吉雄権之助は、自らの『重訂属文錦囊』で、〈Ik wenschte dat〜〉のような仮定的願望とは関係のない“dat”について、次のような説明を展開している^{註12}。

○ aenvoegende wijze

我——思^レト[○] 明敏ノ ——ガ 解剖術ヲ 初テ 發明
 ik denk, dat de [schrandere hippocrates] ontleedkunde ten eersten gevonden
 見^セト[○]
 heeft.

直説一ル一知ラズ^レト[○] カレガ カヲ 愛テ 見^カル[○]
 ik wiet niet, dat hij hem hier gezien heeft.
 分註

このように、前期蘭語学の時代の Conj.は、名詞節を導く“dat”（〜ということ）までも含み、反実仮想と仮定推量だけを扱うものではなかったため、《仮定法》のような呼び方をすることは、逆に不可能だったのである。

ところが、時代が後期蘭語学に移行すると、《分註法》に変化が現れる。《分註法》という用語は関係代名詞節を指すようになり、安政期になると、《分註法》の持つ広範な内容が仮定推量に絞られる傾向が出てくるのである。《疑問法》という問題の多い用語が考え出さ

れるのはこの時期である。

2.2 高野長英の《附説法》と《分註法》

高野長英の『繙卷得師草稿』(国会図書館本)になると、《分註法》は文字どおり専ら関係代名詞の文——長英は《文註文》と呼んでいる——に限定され、<aanvoegende wijze>《附説法》とは別物になる。

又西文ヲ解スルノ一大捷徑ノ法ハ早く本文ト註トヲ見分カツコトナリ 西文ニハ何体ノ文ナリト拘ラス悉ク分註ヲ挿ム又註ノ註アリ……此分註法ノ格ハ附説法ト一般ニシテ文末ノ活言ヨリ文註文ノ初メニ轉シ本文ノ名言ニ接スルナリ

	(マ)	コムマ		ソレハ	レ其	由	レ其	ソレハ
……其分註ヲ知ルハノ法	●	アリテ	其下ニ	welke,	aan welke,	door welke,	die,	
				所	所ノ	所	所	
ソレハ	同	其内ニ	其ニ因テ	ソレ	其所ニ	其ニテ	ソレハ	
het geen,	het welke,	waarin,	waardoor,	waar aan,	alwaar,	waarvan,	dat	
所	同	所	所	所	所ノ	所ノ		

等ノ ソレハ云々スル所ノ ト再ビ返リ読ムベキ代言アリテ 活言ハソノ章ノ最下ニアルナリ 此サエ知覚セハ本文ト分註ハ容易区別ス可キナリ [下線は原文]

(また、西洋の文を理解するのに最もてっとり早い方法は、どれが主文<本文>でどれが関係文<分註>なのかを早く見分けることである。西洋の文は、直説法(Ind.)であろうと附説法(Subj.)であろうと、とにかく<分註>をくつつけたがり、その<分註>に更にもうひとつく註>がくつついていたりする。……この《分註法》の形態<格>は《附説法》と同じで、関係文の文末にある定動詞<活言>からその関係文の頭に戻り、主文の先行名詞<名言>に接続するのである。この<分註>をどのように見分けるかという、まず ● (コンマ) があって、その次に *welke, aan welke, … dat* [以下省略] 等の関係代名詞<再ビ返リ読ムベキ代言>があり、定動詞<活言>はその文章の最後に来る。これさえ覚えてしまえば、主文と関係文<文註文>は簡単に区別できるのである)

<本文ト註>という言葉が、「先行詞に関して説明を附す」という関係文の性質を的確に表現している。定動詞後置 (<活言ハ其章ノ最下ニアル>) にも言及し、《再ヒ返リ読ムベキ代言》の説明としては充分である。この①関係文と②従属接続詞による従属文とが、前期蘭語学における《分註法》の内容である。逆に言えば、日本語は関係代名詞を持たないが、その機能を、実は「分註」という漢文の注釈スタイルが肩代わりしてきたのである。朝鮮東学党の乱と日清戦争という争乱を翌年に控えた明治⁽¹⁸⁹³⁾26年、陸軍教授・寄山元吉は、<日本人ハ國語ヲ定規トセザルガ為 will ト shall ノ義ヲ測定シ難クシテ…>^{註 13} と嘆いたが、あるいは、漢文の素養のある者は、それを<定規>として、漢文の知識をもはやほとんど持たない現代の日本人よりもずっと容易に、この関係代名詞の何たるかが理解し得たのではなかろうか。

3. 《疑問法》

3.1. 《疑問法》《疑示法》《疑説法》

3.1. 1. 「疑問文を作る法」としての《疑問法》

対応する原語を持たない Conj. の術語で、もうひとつ重要なものに、《疑問法》とその類似の用語である《疑示法》《疑説法》がある。中でも特に問題なのは《疑問法》である。何故かといえば、《疑問法》という用語には二つの用法があり、従来その区別が認識されずに混同誤解されて、これが Conj./Subj. を表わす用語だと気づかれていないからである。

蘭語学における《疑問法》とは、まず、表 1 (31 頁) に示したとおり、「疑問文を作る法」のことである。柳圃が Modus の四法にこれを加えたため、日本の蘭語学は、原書の〈四法〉に反して〈五法〉になるという「独自性」を持つことになった。高野長英『繙巻得師草稿』の《疑問法》も、全集本・国会図書館本ともに Conj. ではなく、〈事物ヲ人ニ質問スル文〉のことである。そして、国会図書館本にはこの部分はもはや無いのだが、それよりも早い時期の成立と考えられる全集本のほうでは、次のような説明がなされている。

漢ノ人ハ… [この部分、書き直しによる二重筆記]…ノ二様

疑問法二体●漢ニテハモガ | (ナドノ ●) (如何 ●) ト云様アルカ如シ 本邦ノ語ニテ | カ | (ドウ) (イカナル) ト云ノ二様アルカ如シ 和蘭ニハ漢ノ耶 | 等ニ当ルヘキ言ナシ故ニ文法ヲ以テ之ヲ示ス是レ其一体ナリ又 如何^{イカニ}ニ当ルヘキ語アリ 之ヲ文ノ始めニ置ク 此レ其第一体ナリ 尚且蘭文ニハ疑問文ニハ疑問點ヲ記シテ此文法ヲ示ス

疑問法文例				疑問點
活言	代言	代言	名言	第一体
讀 ^ヤ	汝 ^ガ	此	書 ^ヲ	
何 ^ハ	也 ^ナ	其	書	第二体
疑問代言	活言	代言	名言	
何等	奇妙 (ソヤ)			
疑問代言	名言	活言	法 ^ガ 之抑揚之此文同上	

第一体ノ法ハ直説法ニ同シテ唯其異ナル処ハ活言ヲ文ノ始めニ置クヲ以テナリ間附説法文ノ始めニ置ク接言ヲ除クモノアリコトキニハ疑問法ニ更ニ異ナル所ナシ 然レドモ此文ニハ下ニ疑問點アルコトナシ以テ區別スヘシ第二体ノ疑問法ハ直説法ト言語

表 25. 洋語文典における Modus 以外の《法》の構成

年代	書名		肯定	否定	疑問	否定疑問	受身	進行形	強調体
1632(寛永 9)	Wedderburn (羅)	Modus	affirmamus	negamus	interrogamus				
1708(宝永 5)	Sewel (蘭) (英)								
1746(延享 3)	Sewel (蘭) (英)								
1766(明和 4)	Sewel (蘭) (英)								
1776(安永 5)	Peyton (英仏対訳英文典)		affirmative phrase	negative phrase	interrogative phrase	interrogative phrase with a negative			
1790(寛政 2)	Marin (仏蘭対訳)	Conjugatie		Conjugatie van NIET					
				a) Negation Absolué	c) Interrogation Positive	b) Interrogation Négative			
1801(享和 1)	Locke (蘭語英文典)	Spraakwyze	1.stellend bevestigend	2.ontkennend	3.vragend	4.vragend en ontkennend			
1806(文化 3)	Weiland (仏語対訳蘭文典)								
1815(文化 12)	オランダごほうげ 和蘭語法解 (英?)	法	8.ベヘステゲンデ 不無法	9.ラントケンネンデ 不有法	7.疑問法 (フラーゲンデ)				
					疑問不無法	疑問不有法			
1819(文政 2)	van der Pyl (蘭語英文典)	manner	a) affirmatively	b) negatively	c) interrogatively	d) interrogation negative			
1822(文政 5)	Maatschappij (Grammatica) (蘭)								
1826(文政 9)	Bilderdijk (蘭)								
1831(天保 2)	Lulofs (蘭)								
1836(天保 7)	Wilde (蘭)								
1840(天保 11)	英文鑑 (Murray)	四法	1.謂有法	2.謂無法	3.問訊法	4.謂無問訊法			
1845(弘化 2)	Hamelberg (蘭語英文典)	vorm		ontkennend	vragend		lijdend		
1846(弘化 3)	Maatschappij (Rudimenta) (蘭)	wijs	1.bevestigend	2.ontkennend	3.vragend	4.vragend- ontkennend			
	Weiland (仏語対訳蘭文典)								
1851(嘉永 4)	Marin (蘭語対訳仏文典)								
	Hagoort (蘭)								
1852(嘉永 5)	Murray (蘭訳英文典)	wijze	1.bevestigend (affirmatively)	2.ontkennend	3.vragend	4.vragend- ontkennend			
1853(嘉永 6)	Beijer (蘭)								
	Backer (蘭)								
	Brill (蘭)								
1854(安政 1)	Beijer (蘭)	wijze			vragend				
	van der Beek (蘭語英文典)								
	Pijl / Schuld (蘭語対訳英文典)								

(表 25-1)

年代	書名		肯定	否定	疑問	否定疑問	受身	進行形	強調体
1854(安政 1)	Weiland (蘭)								
1855(安政 2)	Gerdes (蘭語英文典)	wijze		2.ontkennend	1.vragend	3.vragend-ontkennend			
	van der Maas Jr. (蘭)			2.ontkennend	1.vragend	3.vragend-ontkennend			
	Lloyd (蘭語英文典)	vorm	1.bevestigend	2.ontkennend	3.vragend	4.vragend-ontkennend	lijdend		
	Sandwijk (蘭)								
	Spijkerman (蘭)								
1856(安政 3)	Mulder (蘭)								
	Kuijper (蘭)								
1857(安政 4)	van Wees (蘭)								
1861(文久 1)	Murray (英)								
1862(文久 2)	Noel / Chapsel (仏)	Conjugué			Interrogativement				
1867(慶応 3)	江戸版英吉利文典 (The Elementary Catechisms)								
1878(明治 11)	Kaderly (獨)	Ausdrucksweise		2.verneinend	1.fragend	3.fragend-verneinend			
1884(明治 17)	ブラウン氏英文典直訳 (中西 範)	形		3.打消	4.疑問	5.打消ヲ以テノ疑問	2.受身動詞	1.連続	
	文典和解 英文指針	四体 form	1.正説体	2.負説体	3.疑問体	4.負説疑問体			
1886(明治 19)	ブラウン氏英文典釈義 (澤田重遠)	(形)		打消ノ形	疑問ノ形	打消ヲ含ム疑問ノ形			
	ブラウン氏英文典直訳 (源 紀綱)	体、形体		3.否不ノ形体	4.疑問形体	5.否不ヲ以テノ疑問ノ形体	2.受働詞	1.結合体	
	ブラウン氏英吉利文典講義 (前) (長野一枝)	体、形体		2.否絶体	3.疑問体	4.否絶ノ疑問体	1.passiveノ体 受働々詞ノ体		
1887(明治 20)	容易獨修英文典直訳 (ブラウン氏) (戸代光大)	形		3.打消ノ形	4.疑問ノ形	5.打消ヲ含ム疑問ノ形	2.受身動詞ノ形	1.複雑ノ形	
	メールソン氏英文典直訳 (平山直道)	変化		2.打消シノ変化	1.疑問ノ変化	3.疑問及ビ打消シノ変化			
	メールソン氏英文典獨学 (平井秀穂)	変化		2.打消シ様ノ変化	1.疑問法/様上ノ変化	3.打消疑問 疑問上及打消上ノ変化			
1889(明治 22)	須因頓氏大文典講義 (平井広五郎)	配合ノ特別法種		否拒	3.疑問			1.進行式様	2.急切式様
1891(明治 24)	斯因頓大文典講義 (山形 閑)	配合ノ形式	1.普通体	5.打消法 (Mode of Negative)	4.疑問の形成 疑問状	6.打消疑問ノ形		2.永續の形成	3.強勢の形成
	英文典講義	変化法			疑問体 疑問法			進行体	語勢体
1892(明治 25)	簡明英文典	form		3.negative	2.interrogative	4.negative-interrogative		1.progressive	
1894(明治 27)	初等英文典	Form of Conjugation	1.通常ノ体		4.interrogative			2.連続	3.Emphatic
	教科書獨修用新英語学	形		2.打消ノ形	1.設問法 設問ノ形	(打消シ設問)			

(表 25-2)

年代	書名		肯定	否定	疑問	否定疑問	受身	進行形	強調体
1896(明治 29)	英文典問答(全)	配合ノ四体	1.正説体	2.負説体	3.疑問体	4.負説疑問体			
1897(明治 30)	スーイントン小文典直訳 意解 (元木貞雄)	配合ノ形状			3.疑問体				
1898(明治 31)	邦語英文典 (畔柳)	形体	(1.不定)					2.連続・進行 (不完了)	
1899(明治 32)	英文典教科書 (チャムブレ)	form					2.受動形	1.連続体	
1900(明治 33)	ねすふいーるど英文典第 式獨案内 (栗野)	形	1.不定形 Indefinite		2.連続形 Continuous	3.完結形 Perfect	4.完結連続形 Perfect Continuous		
	子スフィールド氏第貳英 文典講義 (鶴田)	形	1.不定形		2.連続形	3.完結形	4.完結連続形		
	ねすふいーるど英文典第 三卷講義 (喜内)	形体	1.不完		2.連続	3.完了	4.完了連続		
	ネスフ井ルド氏英文典卷 式直訳註解 (畔田)	形体	1.不完		2.連続	3.完了	4.完了連続		
	子スフィールド氏第三英 文典講義録 (奈倉)	形	1.不定形		2.継続形 (不完成形)	3.完成形	4.完成継続		
1901(明治 34)	新編英文典問答	動詞配合四体	1.正説体	2.負説体	3.疑問体	4.負説疑問体			
	子スフィールド氏第二英 文典直訳注釈 (奈倉・葛西)	形	1.不定形		2.連続形	3.完成形	4.完成連続形		
1908(明治 41)	最新問答全書 英文典	形	1.不定形		2.連続形	3.完了形	4.完了連続形		
	中等英文典講義	形式	(1.不定形)		3.疑問形	4.否定疑問形		2.進行形	
1911(明治 44)	教科書用参考 中等英文 法通解	形 Form	1.不定の形		2.進行の形		3.進行完了		
			(2) 否定の形		(1) 疑問の形	(3) 疑問否定の形			

(表 25-3)

ノ排列ノ法異ナルコトナシト雖ドモ此文ノ初ニハ必ズ(何)ト云言ノ疑問代言アリ以テ
 辨別スヘシ

(疑問文を作るための第一体の法は、直説法と同じである。ただし、定動詞<活言>を文の最初に置くことだけが違っている。また、《附説法》の文の頭にある従属接続詞<接言>が省略され[定動詞が倒置されて文頭に来]ることがある。すると、疑問文と全く同じ形になってしまうが、ただしこの場合は、文の最後に<?>印、即ち<疑問点>がないので、これで以て区別できる。

疑問文を作る方法の第二体は、《直説法》の語順と何ら異なる所がないけれども、この文の始めには必ず「何」とか「誰」とかいう疑問詞<疑問代言>があるので、これで識別することができるのである)

定動詞の倒置、疑問詞の有無、更には《附説法》(=仮定法)における接続詞の省略によって起こる定動詞の文頭配置にまで言及がなされ、《疑問点》、即ちクエスチョン・マークがあるかどうかで《附説法》か《疑問法》かを区別するよう注意するなど、全く、現代の語学に比してもいささかも遜色のない、正確かつ懇切丁寧な説明である。長英の学んだ当時の長崎の蘭語学——即ち、シーボルトと吉雄権之助の「鳴滝塾」での教育の確かさを忍ばせて余りあるものがある。

3.1. 2. 《話法》Modus とは別の<作文四法>

ところが、当時の原書の蘭文典では、《法》(英語系)または《説話法》(独逸語系)と呼ばれる Modus としての《疑問法》は決して一般的ではないのである。表 2 (37 頁)を見ると、江戸幕府旧蔵洋書中の蘭文典の中で《疑問法》を認めているのは Bilderdijk^{文政 9}(1826) 唯一ひとりである。柳圃が専ら依拠した W. Sewel<世物爾>と P. Marin<麻林>においても、また、その次の世代がテキストとし、高野長英も上述の書(国会図書館本)にて<近頃舶来ノ勿以郎度ノ語法解>としてその名を挙げている P. Weiland の語学書でも、Modus は、1.Onbepaalde wijs(Inf.)、2.Toonende wijs ; Aantoonende wijs(Ind.)、3.Byvoegenge wijs ; Aanvoegende wijs(Subj.)、または Wenschende wijs(Optativus)、4.Gebiedende wijs(Imp.)の四法であって、《疑問法》は含まれていない。

では、《疑問法》は一体どこにあるのか。実は、この時代には2種類の「法」があり、《疑問法》は、肯定・否定・疑問・否定疑問を表す「法」に属しているのである。これは Conjugation を構成する Modus 《説話法》とは別種の「法」で、当時の文典に普通に見られるものである。この<作文法>とでもいうべき「法」をまとめたものが表 25 (305 頁)である。和蘭語ではこれは<Sprakwyze>か、または Modus と同じ<wijze><wijs>と言い、英語では<manner><form>と呼ぶ。ここにその一例を挙げると、van der Pyl^{文政 2}(1819)における<作文四法>は以下のようなものである^{註 16}。

[The verbs are conjugated]

1.affirmatively、2.negatively、3.interrogatively、4. with interrogation negative.

そして、この四法に対して、『和蘭語法解』(文化¹²)と『英文鑑』(天保¹¹)は、次のような訳語を与えている。

○『和蘭語法解』

- 1.《不無法》[notの無い言い方] 2.《不有法》[notの有る言い方]・
3.《疑問不無法》[notの無い疑問文=肯定疑問] 4.《疑問不有法》[notの有る疑問文]、

○『英文鑑』(天保¹¹)は、

- 1.《謂有法》[有りと謂う言い方] 2.《謂無法》[無しと謂う言い方]・
3.《問訊法》[質問する言い方]・ 4.《謂無問訊法》[無しと質問する言い方]

3.1.3. Subj.としての《疑問法》《疑示法》《疑説法》

しかし、表1(31頁)及び表24(296頁)に見られる大庭雪斎『和蘭文語凡例』(安政²)の《疑示法》、飯泉士讓『和蘭文典字類 前編』(安政⁴)の《疑問法》、足立梅景『英吉利文典字類』および伊東朴斎『洋学須知』(慶応²)の《疑説法》はこれではない。これらの訳語を成さしめたのは、恐らく次のような Maatschappij<文社先生>の説明である。

De aanvoegende wijze is die, waardoor iets twijfelachtig of onzeker gezegt wordt, waardoor een wensch, eene voorwaarde, toelating of aansporing wordt uitgedrukt.

<De aanvoegende wijze>は、疑わしいこと或いは不確実なことを述べる。即ち、これによって願望、前提、許容、(人の心を動かす)誘いが表現される。

(『和蘭文典 前編』作州^{箕作氏}蔵版、天保¹³)

この Maatschappij と並んでよく用いられた Weiland 文典の説明も、これと同趣である¹⁷。杉本つとむは『和蘭文典字類 前編』の考察において、

さらに<法>の<不定法・直説法・命令法・疑問法>もまったく現代のものがでそろったわけである。しかし肝心要の<接続法(附説法)>のみえないのはどうしたわけであろうか。この点は、<十品詞>のところで、<aanvoegende 疑問法>とあって、誤訳していることが判明する。(『蘭語学』II、1271頁)

としているが、誤訳ではなくて、この《疑問法》は、<De aanvoegende wijze>の<原名ヲ対譯セスシテ其命意ノ不切実ニシテ疑或ヲ帶ルニ本ヅイテ>訳出された名称なのである。

<原名を対譯>すれば、江馬元齡『四格十品弁解』(安政期頃)のように、

附説法ハ直説法ニ接続シテ其義ヲ説明スルナリ 而テ兩文法相接スルノ間必ズ ^{其ハ処} die,
^処
 其様ナ 為 故ニ ノ前ニ ノ后 若シモ時ハ 仮定雖モ ナラハ 即トキ 其時
 dat, opdat, omdat, voordat, nadat, wanneel, hoewel, indien, als, zoo, toen 等ノ接
 詞ヲ置クナリ (『蘭語学』II、1260頁)

となるはずである。この《疑問法》の訳語は明治の英・独語にも引き継がれ、山形閑譯補『斯因頓大文典講義 上下』(明治¹⁸27)には、<接続法、一名疑問法と譯することあり>(第百十、補)という訳者自身の注釈が付けられている。そして、訳者の山形自身、第百八十三節では、《接続法》ではなく、この《疑問法》の訳語を用いている。

《疑問法》は、このように、「疑問文を作る法」から Subj.へとその内容を変えた。従って、明治初年の英・独文典における《疑問法》は Subj.のことであるから、誤解しないように注意する必要がある^{注18}。

3.2. 《未定様》と《虚構様》

この《疑問法》と同様に、Conj.の<原名ヲ対譯セスシテ其命意ノ不切実ニシテ疑或ヲ帶ル>という定義内容を訳語としたものが、《未定様》と《虚構様》である。⁽¹⁸⁴⁰⁾天保11年の『英文鑑』は、《虚構様》について、<事ヲ假設シテ言ナリ豫定冀幸ノ意亦此ニ属ス>と説明している^{注19}。この<假^{カリ}設^{サダメ}>という用語は、明治期になってから現れる、その内容が次第に“if”に限定されていく《假設法》《假定法》を志向している。

⁽¹⁸¹⁹⁾明治19年『ピ子ヲ氏英文典獨学』(玉井靖三郎)は Subj.を《不定法》と呼ぶが、これも決して誤訳ではなく、《未定様》《虚構様》と同じくその意を汲んだ意識語である。⁽¹⁸²⁷⁾明治27年『獨逸文典(詞論)』(高橋金一郎)にも《不定語法》の一例があるが、これはむしろ蘭語学の《不定時》《不限時》を思わせる。

4. その他の創出術語について

4.1. 《死語法》

そして、対応原語のない訳語のうち最後に残ったのが、《死語法》と《承起法》である。表24(296頁)を見ると、中野柳圃には、Conj.に対して《分註法》以外にもうひとつの別の訳語、というよりもむしろ創出術語である《死語法》という術語がある。これは一体いかなる意味か。

柳圃は主に、動詞と形容詞の名詞化、即ち変化詞であるところの「動く詞」を動かなくさせることを《死》と呼んでいる。動詞の死語化とは、つまり「…する」という動詞を「…

すること」という意味の名詞に変えることなので、動詞の《無限法》(Inf.)である<geleerde te hebben>や<te zullen hebben>は、<無限ノ死語>である。上述の『重訂属文錦囊』には、<ik denk, dat〜> (=I think that〜; Ich denke, daß〜) や<ik wiet niet, dat〜> (=I don't know that〜; Ich weiß nicht, daß〜) のような、接続詞“dat”を用いた文章が見られたが、あるいは柳圃は、Conj.の活用表の筆頭に位置し、蘭文を読むとき頻繁に目にするこの接続詞の持つ、「…すること」という名詞節を導く機能に注目し、“dat”を従属接続詞の代表として《死語法》と呼んだのではなからうか。名詞節とは「文章の名詞化」、即ち《死語》化にほかならないからである¹⁴。

大槻玄幹が、<抑モ惟ルニ先生ノ人トナリ篤行謹慎西学ニ長スルノミナラス兼テ国学漢学ヲ既知スルコト恐クハ古今ノ訳家其右ニ出ル者ナケン>¹⁵ と評したように、和漢の教養に秀でていた柳圃は、本居宣長と荻生徂徠の学問を自らの和蘭語研究の糧としたのである。

4.2. 《承起法》

この《承起法》も、由来の全くわからない創出術語である。これは馬場左十郎の用語であるが、彼は何故このように命名したのか、その手がかりを全く残してくれていない。

中野柳圃は、冠詞のことを、漢学の用語を応用して《発声詞》《発語ノ詞》と呼んでいる²⁰。文章の最初に位置するため、ちょうど漢文の《発声詞》と同様、冠詞から文が始まることになるからであるらしい。同様に《承起》という用語を「起承転結」を手掛かりに考えると、Conj.の文章は、英語の<if>・独逸語の<wenn>のように、それが文頭に立てば「句」—— sentence は明治時代になって「文章」と訳される前は「句」と言った——を「起こし」、主文の後に続けば、その後を「承ける」という意味ではなからうか。正確な所は、現段階では残念ながら不明である。

5. 和漢文に基づいた創出術語

以上、蘭語学における Conj./ Subj.の術語を考察したが、その特徴として、創出術語の見事さということが言えると思う。原典の文法用語を直訳せず、その意味用法から創出された文法術語は、蘭語学の影響が希薄化する明治20年代後半以降（から現代に至るまで）の英・独語学にはほとんど見られなくなる現象である。柳圃の《分註法》と幕末の《疑問法》はその白眉であろう。殊に、前者の術語を創出せしめた、従文・関係文の機能の和漢文的理解はまことに素晴らしいと言わざるを得ない。かつて日本語が、関係代名詞に相当する語法を持っていたのであれば、当時の人々の方が現代よりも容易に Subj.と関係代名詞の本質を把握できたのではないかとさえ思われる。日本人が漢文から離れ、批判的になったのは、当時の事情を鑑みれば不可避的なことであつたらう。しかし、「分註」という語法を失ったことの語学的・教育的損失の大きさを、この《分註法》を始めとする前期蘭語

学の幾つもの創出術語は我々に告げているように思われる。

《分註法》というこの見事な術語は前期蘭語学を以て廃れ、明治に受け継がれることはなかった。代わりに受け継がれたのは《疑問法》である。この用語は、独逸語学では明治⁽¹⁸⁸⁴⁾17年まで（ただし明治⁽¹⁸⁹⁴⁾27年に《疑示法》がある）、英語学では明治⁽¹⁸⁸⁸⁾21年（明治20年に《疑義法》が一例見られる）まで続く。しかし、その大勢はすでに《附属法》か《接続法》に傾き、特に英語学の分野においては、明治⁽¹⁸⁸⁴⁾17年以降、Inf.をModusより外しPerf.を現在時制としたSwintonの新文法の時代に入っている。

『英文鑑』にて暗示された<假^{かり}設^{サダメ}>が正式な文法用語となって現れるのは、英語学では明治⁽¹⁸⁸⁸⁾21年、独語学では明治⁽¹⁸⁹¹⁾24年である（表10[100頁]および表11[107頁]）。このように、和蘭語学習が全国的に拡がった幕末において、明治期に使用されるSubj.に関する訳語はその基盤のほとんどが築かれた。そして、時代は明治へと向かうのである。

A Brief and compendious

leave or to be permitted. But in the Indicative they agree with the English, as *Ik kan* I can, *Ik moet* I must, *Ik mag* I may.

The Conjugations of these *Auxiliar Verbs* may be seen in my *English Grammar*: Yet is is to be noted, that they are not so Defective in Dutch as in English: for since they have not onely the *Participles* of the *Present Tense*, as *Konnende, moettende, moogende*, but also those of the *Preter-perfect tense*, as *Gekonnen, gemoeten, gemoogen*, they take to them the *Auxiliar Verb hebben*, as *Ik heb gekonnen*, I have been able; *Ik heb gemoeten*, I was or have been forced; *Ik heb gemoogen*, I had leave, or I have been permitted.

The next *Auxiliar Verb* is *Hebben* to Have; which is Conjugated thus.

The INDICATIVE MOOD.

The Present Tense.

Sing.	Plur.
<i>Ik heb</i> I have.	<i>Wy hebben</i> We have.
<i>Gy hebt</i> Thou hast.	<i>Gylieden hebt</i> Ye have.
<i>Hy heeft</i> He hath.	<i>Zy hebben</i> They have.

The Preter-Imperfect.

Sing.	Plur.
<i>Ik had</i> I had.	<i>Wy hadden</i> We had.
<i>Gy hadt</i> Thou hadst.	<i>Gylieden hadt</i> Ye had.
<i>Hy had</i> He had.	<i>Zy hadden</i> They had.

The Preter-perfect.

Sing.	Plur.
<i>Ik heb gehad</i> I have had.	<i>Wy hebben gehad</i> We have had.
<i>Gy hebt gehad</i> Thou hast had.	<i>Gylieden hebt gehad</i> Ye have had.
<i>Hy heeft gehad</i> He hath had.	<i>Zy hebben gehad</i> They have had.

The Preter pluperfect.

Sing.	Plur.
<i>Ik had gehad</i> I had had.	<i>Wy hadden gehad</i> We had had.
<i>Gy hadt gehad</i> Thou hast had.	<i>Gylieden hadt gehad</i> Ye had had.
<i>Hy had gehad</i> He had had.	<i>Zy hadden gehad</i> They had had.

The Future.

Sing.	Plur.
<i>Ik zal hebben</i> I shall have.	<i>Wy zullen hebben</i> We shall have.
<i>Gy zult hebben</i> Thou shalt have.	<i>Gylieden zult hebben</i> Ye shall have.
<i>Hy zal hebben</i> He shall have.	<i>Zy zullen hebben</i> They shall have.

The Indefinite Tense.

Sing.	Plur.
<i>Ik zou hebben</i> I should have.	<i>Wy zouden hebben</i> We should have.
<i>Gy zoudt hebben</i> Thou shouldst have.	<i>Gylieden zoudt hebben</i> Ye should have.
<i>Hy zou hebben</i> He should have.	<i>Zy zouden hebben</i> They should have.

The

Sewel, W. YDA-2998

Groot woordenboek der Nederduytsche en Engelsche taalen, waarin de rykdom derzelve in 't breede wordt voorgedraagen, de verscheydene betekenissen aangewezen, en de geslachten van alle Nederduytsche naamwoorden nauwkeuriglyk aangetoond; met byvoeginge van zeer veele uytgeleezene spreekwyzen, en een goed getal van spreekwoorden, verrykt met eene spraakkonst voor beyde de taalen, door W. Sewel. Het tweede deel. Amsterdam, by de Weduwe van Steven Swart, by de Beurs, 1708, 20.5 x 16 cm. [タイトルページ破損, 上は第二巻蘭英部分のタイトル]

1st deel: E-N. 468p.

2de: deel: N-E. 3, 680p.

3de deel. Beknopte vertoog wegens de Engelsche spraakkonst. Aan den Leezer. 90p.

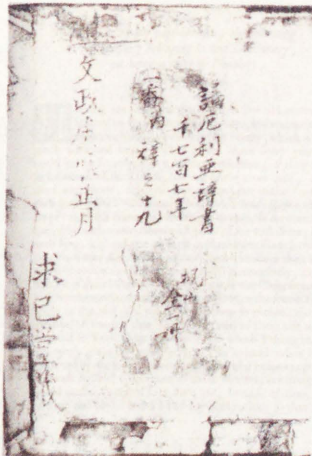
<著書箇所> <求己文庫>

「文政庚辰正月 求己堂藏」

「一番四 群之十九 語冠群書 千七百七年

風山 全一間

(75)



資料 69.

(宝永5)

1708年の W. Sewel の辞書中蘭文典における

動詞活用表 助動詞 <hebben> の例

直説法: 《現在》

《過去ノ現在》(現代の「過去」)

《真ノ過去》(現代の「現在完了」)

《未来》

《不限時》… “zou” “zoude” による仮定推量 (Conditionalis) の現在

この頁の上部に、「和蘭語の助動詞は英語のような《欽如言》ではない」という一文が見られる。

Dutch Grammar.

63

THE IMPERATIVE MOOD.

Sing.	Plur.
Heb or hebt gy Have or have thou.	Hebbenwe or laat ons hebben Have we or let us have.
Hy hebbe or laat hem hebben Let him have.	Hebt gyliden Have ye.
	Laat zy hebben Let them have.

THE OPTATIVE OR SUBJUNCTIVE MOOD.

The Present and Imperfect Tense.

Sing.	Plur.
Dat { Ik hadde Gy had Hy hadde } That { I had Thou hadst He had.	Dat { Wy hadden Gyliden haddet Zy hadden } That { We had Ye had They had.

The Preter-perfect and Preter-pluperfect Tense.

Sing.	Plur.
Dat { Ik gehad hadde Gy gehad had Hy gehad hadde } That { I had had Thou hadst had He had had.	Dat { Wy gehad hadden Gyliden gehad haddet Zy gehad hadden } That { We had had. Ye had had. They had had.

The Futur.

Sing.	Plur.
Als { Ik hebben zal Gy hebben zult Hy hebben zal } When { I shall have Thou shalt have He shall have	Als { Wy hebben zullen Gyl. hebben zult Zy hebben zullen } When { We shall have Ye shall have. They shall have.

The Second Futur.

Sing.	Plur.
Als { Ik gehad zal hebben Gy gehad zult hebben Hy gehad zal hebben } When { I shall have had Thou shalt have had He shall have had.	Als { Wy gehad zullen hebben Gyl. gehad zult hebben Zy gehad zullen hebben } When { We shall have had. Ye shall have had. They shall have had.

The Third Future.

Sing.	Plur.
Schoon { Ik gehad zou hebben Gy gehad zouden hebben Hy gehad zou hebben } Tho { I should have had Thou shouldst have had He should have had.	Schoon { Wy gehad zouden hebben Gyl. gehad zouden hebben Zy gehad zouden hebben } Tho { We should have had. Ye should have had. They should have had.

THE INFINITIVE MOOD.

Present.	Hebben to Have.	Past.	Gebad hebben to Have had.
Future.	Te zullen hebben To have hereafter.		

The Participles.

Present.	Hebbende Having.	Past.	Gebad Had.	The
----------	------------------	-------	------------	-----

資料 70. W. Sewel の辞書中蘭文典における動詞活用表

助動詞 <hebben> の例 (続)

使令法

文註法 (現代の「仮定法」):

《現在》と《過去ノ現在》(現代の「過去」)…接続詞は“dat / that”。

《真ノ過去》と《過去ノ過去》…接続詞は同じく“dat / that”。

《未来》…接続詞は“als / when”

《未来ノ過去》…原語は「第二未来」。現代の「未来完了」である。“zullen” (=shall) と組み合わせられる“p.p.+hebben / zyn”は当時の理解では《過去》であるので、《未来ノ過去》となる。接続詞は“als / when”

《不限時ノ過去》…原語は「第三未来’。“zou” “zoude” (=should) を用いた過去の仮定推量 (Conditionalis) である。接続詞は“schoon / tho”。

不定法: 3種の不定法と2種の分詞である。不定法の《現在》と《過去》には“zu”がなく、《未来》にだけ“zu”が付いている。

64

A Brief and compendious

The Conjugation of the Verb Substantive *Zyn* or *Weezen* to be; which is chiefly used to signify the *Passive*.

The INDICATIVE MOOD.

The Present Tense.

Singular.	Plural.
<i>Ik ben</i> I Am.	<i>We zyn</i> We are.
<i>Gy bent</i> or <i>zyt</i> Thou art.	<i>Gylieden zyt</i> Ye are.
<i>Hy is</i> He is.	<i>Zy zyn</i> They are.

The Preter-Imperfect.

Sing.	Plur.
<i>Ik was</i> I was.	<i>Wy waaren</i> We were.
<i>Gy waart</i> Thou wast.	<i>Gylieden waart</i> Ye were.
<i>Hy was</i> He was.	<i>Zy waaren</i> They were.

The Preter-perfect.

Sing.	Plur.
<i>Ik ben</i> or <i>heb geweest</i> I have been.	<i>Wy zyn</i> or <i>hebben geweest</i> We have been.
<i>Gy bent</i> or <i>hebt geweest</i> Thou hast been.	<i>Gylieden zyt</i> or <i>hebt geweest</i> Ye have been.
<i>Hy is</i> or <i>heeft geweest</i> He has been.	<i>Zy zyn</i> or <i>hebben geweest</i> They have been.

The Preter-plusperfect.

Sing.	Plur.
<i>Ik was</i> or <i>had geweest</i> I had been.	<i>Wy waaren</i> or <i>hadden geweest</i> We had been.
<i>Gy waart</i> or <i>hadt geweest</i> Thou hadst been.	<i>Gylieden waart</i> or <i>hadt geweest</i> Ye had been.
<i>Hy was</i> or <i>had geweest</i> He had been.	<i>Zy waaren</i> or <i>hadden geweest</i> They had been.

The Future.

Sing.	Plur.
<i>Ik zal zyn</i> or <i>weezen</i> I shall or will be.	<i>Wy zullen zyn</i> or <i>weezen</i> We shall or will be.
<i>Gy zult zyn</i> or <i>weezen</i> Thou shalt or wilt be.	<i>Gylieden zult zyn</i> or <i>weezen</i> Ye shall or will be.
<i>Hy zal zyn</i> or <i>weezen</i> He shall or will be.	<i>Zy zullen zyn</i> or <i>weezen</i> They shall or will be.

The IMPERATIVE MOOD.

Sing.	Plur.
<i>Wees gy</i> Be thou.	<i>Zyn we</i> or <i>laaten wy zyn</i> Be we or let us be.
<i>Dat hy zy</i> Let him be.	<i>Weest</i> or <i>zyt gylieden</i> Be ye.
	<i>Laatze zyn</i> Let them be.

The OPTATIVE or SUBJUNCTIVE MOOD.

The Present Tense.

Sing.	Plur.
<i>Dat</i> { <i>Ik zy</i> { That { I be.	<i>Dat</i> { <i>Wy zyn</i> } That { We be.
{ <i>Gy zyt</i> { Thou beest.	{ <i>Gylieden zyt</i> } Ye be.
{ <i>Hy zy</i> { He be.	{ <i>Zy zyn</i> } They be.

The

資料 71. W. Sewel の辞書中蘭文典における動詞活用表

助動詞〈zyn または weezen〉の例

直説法：《現在》

《過去ノ現在》(現代の「過去」)

《真ノ過去》(現代の「現在完了」)

《過去ノ過去》

《未来》

使令法：dat 節と“laaten”を用いた1・3人称への命令形が含まれている点が眼を引く。

文註法：《現在》…接続詞“dat / that”

Dutch Grammar.
The Preter-Imperfect.

65

Sing.		Plur.
Dat { Ik waar Gy waart Hy waare }	That { I were Thou wert. He were. }	Dat { Wy waaren Gyliden waart Zy waaren }
		That { We were Ye were They were. }

The Preter-perfect.

Sing.		Plur.
Dat { Ik geweest zyn or hebbe Gy geweest zyn or hebt Hy geweest zyn or heeft or hebbe }	That { I have been. Thou hast been. He hath been. }	Dat { Wy geweest zyn or hebben Gyliden geweest zyn or hebt Zy geweest zyn or hebben }
		That { We have been. Ye have been. They have been. }

The Preter-perfect.

Sing.		Plur.
Als { Ik geweest waare or hadde Gy geweest waart or hadt Hy geweest waare or hadde }	When { I had been. Thou hadst been. He had been. }	Als { Wy geweest waaren or hadden Gyliden geweest waart or hadt Zy geweest waaren or hadden }
		When { We had been. Ye had been. They had been. }

The Future.

Sing.		Plur.
Indien { Ik zyn or weezen zal. Gy zyn or weezen zult. Hy zyn or weezen zal. }	If { I shall or will be. Thou shalt or wilt be. He shall or will be. }	Indien { Wy zyn or weezen zullen. Gyl. zyn or weezen zult. Zy zyn or weezen zullen. }
		If { We shall or will be. Ye shall or will be. They shall or will be. }

The Indefinite Tense.

Sing.		Plur.
Ik zou zyn or weezen I should be. Gy zoudt zyn or weezen Thou shouldst be. Hy zoud zyn or weezen He should be.		Wy zouden zyn or weezen We should be. Gyliden zoudt zyn or weezen Ye should be. Zy zouden zyn or weezen They should be.

The INFINITIVE MOOD.

Present.	Zyn or weezen To be.
Past.	Geweest te zyn or hebben To have been.
Future.	Te zullen zyn or weezen To be hereafter.

The Participle.

Present.	Zynde or weezende Being.
Past.	Geweest zynde or hebbende Having.

The next *Auxiliary Verb* is *Worden* or *worden*, of which the proper signification is to become or grow, as *Wys worden* to Become wise, *Vet worden* to Grow fat: But it being generally used to express the *Passive*, it may be also English *to be*, as *Bemind worden* to Be beloved: Yet a clear distinction may be seen in *Ziek zyn* to Be sick, and *Ziek worden* to Grow sick; *Ik ben ziek* I am sick, *Ik wierd ziek* I grew sick.

The

資料 72. W. Sewel の辞書中蘭文典における動詞活用表

助動詞 <zyn または weezen> の例 (続)

文註法: 《過去ノ現在》(現代の「過去」) …接続詞 “dat / that “

《真ノ過去》(現代の「現在完了」) …接続詞 “dat / that “

《過去ノ過去》 …接続詞 “als / when “

《未来》 …接続詞 “indien / if

《不限時》 … “zou” “zoude” による仮定推量 (Conditionalis) の現在。

不定法: 3種の不定法 … 《現在》《過去》《未来》(zu 付)

2種の分詞 … 《現在》《過去》

Dutch Grammar.

67

to one Conjugation; besides, even that variation is not so regular, that generall Rules sufficiently can be given: for the words *Hoopen* to Hope, *koopen* to buy, *loopen* to run, sound all alike, and yet they differ mightely in the *Preter-Imperfect*, as *Ik hoopte* I hoped, *Ik kofte* I bought, *Ik liep* I ran; Likewise, *Zweeten* to Swear, *meetten* to measure, *weeten* to know, whose *Preter-Imperfect* is, *Ik zweette* or *zweettede* I did swet, *Ik mat* I measured. *Ik wist* I knew. And therefore the easiest way will be to learn those variations by a frequent and attentive reading, and dayly speaking, if one has occasion to converse with the Dutch. But I shall set down an Example of the Regular Verb *Leeren* to Learn and to teach.

The INDICATIVE MOOD.

The Present Tense.

Singular.	Plural.
<i>Ik leer</i> I learn or teach.	<i>Wy leeren</i> We learn.
<i>Gy leert</i> Thou learnst.	<i>Gylieden leert</i> Ye learn.
<i>Hy leert</i> He learns.	<i>Zy leeren</i> They learn.

The Preter-Imperfect.

Sing.	Plur.
<i>Ik leerde</i> I learned.	<i>Wy leerden</i> We learned.
<i>Gy leerde</i> Thou learnedst.	<i>Gylieden leerdet</i> Ye learned.
<i>Hy leerde</i> He learned.	<i>Zy leerden</i> They learned.

The Preter-perfect.

Sing.	Plur.
<i>Ik heb geleerd</i> I have learned.	<i>Wy hebben geleerd</i> We have learned.
<i>Gy hebt geleerd</i> Thou hast learned.	<i>Gylieden hebt geleerd</i> Ye have learned.
<i>Hy heeft geleerd</i> He hath learned.	<i>Zy hebben geleerd</i> They have learned.

The Preter-pluperfect.

Sing.	Plur.
<i>Ik had } I had</i>	<i>Wy hadden } We had</i>
<i>Gy hadt } geleerd</i> Thou hadst } learned	<i>Gylieden hadt } geleerd</i> Ye had } learned.
<i>Hy had } He had</i>	<i>Zy hadden } They had</i>

The Future.

Sing.	*Plur.
<i>Ik zal } I shall</i>	<i>Wy zullen } We shall</i>
<i>Gy zult } leeren</i> Thou shalt } learn.	<i>Gylieden zult } leeren</i> Ye shall } learn.
<i>Hy zal } He shall</i>	<i>Zy zullen } They shall</i>

The Indefinite Tense or Second Future.

Sing.	Plur.
<i>Ik zou } I should</i>	<i>Wy zouden } We should</i>
<i>Gy zoudt } leeren</i> Thou shouldst } learn.	<i>Gylieden zoudt } leeren</i> Ye should } learn.
<i>Hy zou } He should</i>	<i>Zy zouden } They should</i>

1 2

The

資料 73. W. Sewel の辞書中蘭文典における動詞活用表

規則動詞 <leeren> の例

直説法：《現在》

《過去ノ現在》(現代の「過去」)

《真ノ過去》(現代の「現在完了」)

《未来》

《不限時》または《過去ノ未来》…“zou”“zode”による仮定推量 (Conditionalis) の現在

A Brief and compendious

The IMPERATIVE MOOD.

<i>Sing.</i>		<i>Plur.</i>
<i>Leer</i> or <i>leer gy</i> Learn or learn thou.		<i>Leerenwe</i> Let us learn.
<i>Dat hy leere</i> Let him learn.		<i>Leert gylieden</i> Learn ye.
		<i>Dat zy leeren</i> Let them learn.

The OPTATIVE or SUBJUNCTIVE MOOD.

The Present Tense.

<i>Sing.</i>		<i>Plur.</i>
<i>Dat</i> { <i>Ik leere</i> That { I learn. <i>Gy leert</i> That { Thou learnest. <i>Hy leere</i> That { He learn.		<i>Dat</i> { <i>Wy leeren</i> That { We learn. <i>Gylieden leert</i> That { Ye learn. <i>Zy leeren</i> That { They learn.

The Preter-Imperfect.

<i>Sing.</i>		<i>Plur.</i>
<i>Dat</i> { <i>Ik leerde</i> That { I learned. <i>Gy leerde</i> That { Thou learnedst. <i>Hy leerde</i> That { He learned.		<i>Dat</i> { <i>Wy leerden</i> That { We learned. <i>Gylieden leerdet</i> That { Ye learned. <i>Zy leerden</i> That { They learned.

The Preter-perfect.

<i>Sing.</i>		<i>Plur.</i>
<i>Hoewel</i> { <i>Ik geleerd heb</i> Thò { I have learned. <i>Gy geleerd hebt</i> Thò { Thou hast learned. <i>Hy geleerd heeft</i> Thò { He has learned.		<i>Hoewel</i> { <i>Wy geleerd hebben</i> Thò { We have learned. <i>Gyl. geleerd hebt</i> Thò { Ye have learned. <i>Zy geleerd hebben</i> Thò { They have learned.

The Preter-pluperfect.

<i>Sing.</i>		<i>Plur.</i>
<i>Indien</i> { <i>Ik geleerd had</i> If { I had learned. <i>Gy geleerd hadt</i> If { Thou hadst learned. <i>Hy geleerd had</i> If { He had learned.		<i>Indien</i> { <i>Wy geleerd hadden</i> If { We had learned. <i>Gyl. geleerd hadt</i> If { Ye had learned. <i>Zy geleerd hadden</i> If { They had learned.

The Future.

<i>Sing.</i>		<i>Plur.</i>
<i>Als</i> { <i>Ik leeren zal</i> When { I shall learn. <i>Gy leeren zult</i> When { Thou shalt learn. <i>Hy leeren zal</i> When { He shall learn.		<i>Als</i> { <i>Wy leeren zullen</i> When { We shall learn. <i>Gyl. leeren zult</i> When { Ye shall learn. <i>Zy leeren zullen</i> When { They shall learn.

The Second Future.

<i>Sing.</i>		<i>Plur.</i>
<i>Toen</i> { <i>Ik leeren zou</i> When { I should learn. <i>Gy leeren zoudt</i> When { Thou shouldst learn. <i>Hy leeren zou</i> When { He should learn.		<i>Toen</i> { <i>Wy leeren zouden</i> When { We should learn. <i>Gyl. leeren zoudt</i> When { Ye should learn. <i>Zy leeren zouden</i> When { They should learn.

The Third Future.

<i>Sing.</i>		<i>Plur.</i>
<i>Als</i> { <i>Ik geleerd zal hebben</i> When { I shall have learned. <i>Gy geleerd zult hebben</i> When { Thou shall have learned. <i>Hy geleerd zal hebben</i> When { He shall have learned.		<i>Als</i> { <i>Wy geleerd hebben zullen</i> When { We shall have learned. <i>Gyl. geleerd hebben zult</i> When { Ye shall have learned. <i>Zy geleerd hebben zullen</i> When { They shall have learned.

The Fourth Future.

Schoon ik geleerd zou hebben Thò I should have learned, &c.

資料 74. W. Sewel の辞書中蘭文典における動詞活用表

規則動詞 <leeren> の例 (続き)

多彩な従属接続詞によって導かれた《文註法》。“zoude”による仮定推量表現 2 種を含む 4 種の未来時制が圧巻である。dat 節による「～であらんことを」が、《使令法》の箇所に見える。

使令法

文註法：(現在)

《過去ノ現在》(現代の「過去」)

《真ノ過去》(現代の「現在完了」)

《未来》…接続詞は“als / when”

《過去ノ未来不限時》(第二未来) …“zoude”による仮定推量 (Conditionalis) の現在。接続詞は“toen / when”

《未来ノ過去》(第三未来) …接続詞は“als / when”

《不限時ノ過去》(第四未来) …“zou” “zoude”による仮定推量 (Conditionalis)

Dutch Grammar.

69

The Third Future.

Sing.		Plur.
<i>Ik geleerd zal hebben</i> <i>Gy geleerd zult hebben</i> <i>Hy geleerd zal hebben</i>	When {	<i>Wy geleerd hebben zullen</i> <i>Gyl. geleerd hebben zult</i> <i>Zy geleerd hebben zullen</i>
		When {

The Fourth Future.

Schoon ik geleerd zou hebben THO I should have learned, &c.

The INFINITIVE MOOD.

Present.	<i>Leeren</i> to Learn.
Past.	<i>Geleerd hebben</i> to Have learned.
Future.	<i>Te zullen leeren</i> To learn hereafter.

The Participles.

Present.	<i>Leerende</i> Learning.
Past.	<i>Geleerd</i> Learned or learn'd, or taught.
Future.	<i>Zullende leeren</i> Being to learn hereafter.

Here follows the Passive Verb.

The INDICATIVE MOOD.

The Present Tense.

Singular.		Plural.
<i>Ik word geleerd</i> I am taught.		<i>Wy worden geleerd</i> We are taught.
<i>Gy wordt geleerd</i> Thou art taught.		<i>Gylieden wordt geleerd</i> Ye are taught.
<i>Hy wordt geleerd</i> He is taught.		<i>Zy worden geleerd</i> They are taught.

Note. If we use the Verb *Ik ben* instead of *ik word*, it generally alters the signification; for to say *Hy is geleerd*, is as much as *He is a learned man*, or *he is a Schollar*.

Sing.		Plur.
<i>Ik ben geleerd</i> I am learned or I am taught.		<i>Wy zyn geleerd</i> We are learned or taught.
<i>Gy bent geleerd</i> Thou art learned.		<i>Gylieden zyt geleerd</i> Ye are learned.
<i>Hy is geleerd</i> He is learned.		<i>Zy zyn geleerd</i> They are learned.

The Preter-Imperfect.

Sing.		Plur.
<i>Ik wierd geleerd</i> I was taught, or became learned.		<i>Wy wierden geleerd</i> We were taught.
<i>Gy wierdt geleerd</i> Thou wast taught.		<i>Gylieden wierdt geleerd</i> Ye were taught.
<i>Hy wierdt geleerd</i> He was taught.		<i>Zy wierden geleerd</i> They were taught.

The Preter-perfect.

Sing.		Plur.
<i>Ik ben</i> { <i>geleerd geweest</i> I have	} been taught.	<i>Wy zyn</i> { <i>geleerd geweest</i> We
<i>Gy bent</i> { <i>geleerd geweest</i> Thou hast		<i>Gyl. zyt</i> { <i>geleerd geweest</i> Ye
<i>Hy is</i> { <i>geleerd geweest</i> He hath		<i>Zy zyn</i> { <i>geleerd geweest</i> They
		I 3

The

資料 75. W. Sewel の辞書中蘭文典における動詞活用表

規則動詞 <leeren> の例 (続き)

《文註法》の後は、《不定法》が続く。3種の《不定法》は助動詞 <hebben> <zyn> と同じだが、《分詞》は、未来分詞が加わって3種に増えている。

能動動詞の活用の次は、受動動詞の活用が示されるが、これは中世の羅典文典の伝統である。現代の用語では「能動態」と「受動態」であるが、助動詞と過去分詞の2単語で作られる蘭・英・独語と異なり、羅典語では受動態は1語の動詞なので、受動動詞という言い方がなされ、これがそのまま踏襲されているのである。

資料 76. 同じ W. Sewel の辞書に収載された英文典の方の動詞活用表 助動詞 <have> の例

(17 頁)

直説法：《現在》
《過去ノ現在》
(現代の「過去」)

《真ノ過去》
(現代の「現在完了」)

(18 頁)

直説法：《未来》
1 種類のみ

使令法

希望法または従属接続法：《現在》と《過去の現在》
《 unlimited 》 (不定時) ... might, could, should, would による仮定推量 (Conditionalis) の現在と、付記された過去。接続詞は “that / dat” である。

(19 頁)

不定法: to 不定詞 2 種と分詞 2 種

Van de WERKWOORDEN.

Werkwoorden zyn alzo genoemd, om dat door dezelve, het zyn, de werking, of doening en tyding van iets betekend wordt: zy zyn eenige verandering onderworpen, die de Spraakkundige *Vervoeging* (Conjugatio) noemen: Doch dewyl in de manier deszelfs geen zonderling verschil is van 't Nederduytsch, zal ik den Leerling hier niet ophouden met eene beschryving van de *Getallen, Persoonen, Tyden, en Wyzen*; dewyl een Hóllander, die Engelfch wil leeren spreken, in zyne eygene taal reeds geleerd heeft, van het gene tegenwoordig is, niet te zeggen, dat het nóg geschieden zal; of het gene toekomend is, uyt te drukken door een Spreekwyze, die betekent dat het al geschied is; en daar beneven wel weet, dat *Ik, gy, hy*, op één persoon, en *Wy, gylieden, zy*, op verscheydene personen opzigt heeft: En gelyk men op het Nederduytsch de *Wenschende of Ondervoegelyke wyze* door byvoeging van de woordkens, *dat, mogt, zoud* uytdukt, zo geschied het ook in 't Engelfch. Tót welken eynde ik daarvan eenige voorbeelden zal ter neerststellen; en een begin maaken met het *Helpwoord to HAVE*, hebben.

De TOONENDE WYZE (MODUS INDICATIVUS.)

De Tegenwoordige tyd.

<i>Eenvoudig.</i>	<i>Meervoudig.</i>
<i>I HAVE</i> , Ik heb. <i>Thou hast</i> , Gy hebt. <i>He hath of has</i> , Hy heeft.	<i>We have</i> , Wy hebben. <i>Ye have</i> , Gylieden hebt. <i>They have</i> , Zy hebben.

De Onvolkomen verledene tyd.

<i>Eenvoudig.</i>	<i>Meervoudig.</i>
<i>I had</i> , Ik had. <i>Thou hadst</i> , Gy hadt. <i>He had</i> , Hy had.	<i>We had</i> , Wy hadden. <i>Ye had</i> , Gylieden hadt. <i>They had</i> , Zy hadden.

De Volkomen verledene tyd.

<i>Eenvoudig.</i>	<i>Meervoudig.</i>
<i>I have had</i> , Ik heb gehad. <i>Thou hast had</i> , Gy hebt gehad. <i>He has had</i> , Hy heeft gehad.	<i>We have had</i> , Wy hebben gehad. <i>Ye have had</i> , Gylieden hebt gehad. <i>They have had</i> , Zy hebben gehad.

<i>Eenvoud.</i>	<i>Meervoud.</i>
<i>I had had</i> , Ik had gehad. <i>Thou hast had</i> , Gy hadt gehad. <i>He had had</i> , Hy had gehad.	<i>We had had</i> , Wy hadden gehad. <i>Ye had had</i> , Gylieden hadt gehad. <i>They had had</i> , Zy hadden gehad.

De Toekomende tyd.

<i>Eenvoud.</i>	<i>Meervoud.</i>
<i>I shall of Will have</i> , Ik zal hebben. <i>Thou shalt of Wilt have</i> , Gy zult hebben. <i>He shall of Will have</i> , Hy zal hebben.	<i>We shall of Will have</i> , Wy zullen hebben. <i>Ye shall of Will have</i> , Gylieden zult hebben. <i>They shall of Will have</i> , Zy zullen hebben.

Hier staat nóg tans aan te merken, dat hoewel 't by de Engelfchen zeer gemeen is dit woordtje *will*, voor *zal of zullen* te gebruyken, het echter ook daarom zeer dikwils zyn eygene betekenis behoudt; want als men op 't Engelfch wil zeggen, *Ik wil het doen*, zo zegt men *I will do it*.

De GEBIEDENDE WYZE (MODUS IMPERATIVUS.)

<i>Eenvoud.</i>	<i>Meervoud.</i>
<i>Have of Have thou</i> , Heb of Hebt gy. <i>Let him have</i> , Laat hem hebben.	<i>Have us of Let us have</i> Hebbenwe of laat ons hebben. <i>Have ye</i> , Hebt gylieden. <i>Let them have</i> , Laatze hebben, laat hen hebben.

De WENSCHENDE of ONDERVOEGELYKE WYZE (OPTATIVUS vel SUBJUNCTIVUS.) wordt uytgedrukt door 't byvoegen van de woordtjes *That, might, could would*, als by voorbeeld.

De Tegenwoordige en Onvolkomen verledene tyd.

<i>Eenvoud.</i>	<i>Meervoud.</i>
<i>That { I had, Thou hast, He had, }</i> Dat { Ik had, Gy hadt, Hy had. }	<i>That { We had, Ye had, They had, }</i> Dat { Wy hadden, Gylieden hadt, Zy hadden. }

De Onbepaalde tyd.

<i>Eenvoud.</i>	<i>Meervoudig.</i>
<i>I might, could, should of would have,</i> <i>Thou mightst, couldst, shouldst of wouldst have,</i> <i>He might, could, should of would have,</i>	<i>Ik mogt, kon of zoud hebben.</i> <i>Gy mogt kondet of zoudt hebben.</i> <i>Hy mogt, kon of zoud hebben.</i>
	<i>We might, could, should of would have,</i> <i>Ye might, could, should of would have,</i> <i>They might, could, should of would have,</i>
	<i>Wy mogten, konden of zouden hebben.</i> <i>Gylieden mogt, kondet of zoudt hebben.</i> <i>Zy mogten, konden of zouden hebben.</i>

En zo ook in alle de andere tyden, als

<i>I might have had</i> , Ik mogt gehad hebben.	<i>I could have had</i> , Ik kon gehad hebben.
<i>I should have had</i> , Ik zou gehad hebben, enz.	

De ONBEPAALENDE WYZE (INFINITIVUS.)

<i>to Have</i> , Hebben.	<i>to Have had</i> , Gehad hebben.
	Het <i>Deelwoord.</i>
<i>Having</i> , Hebbende.	<i>Having had</i> , Hebbende gehad.

de Engelsche Spraakkonst.

De T.OONENDE WYZE.

23

Tegenwoordige tyd.

Eenvoud.

I LOVE, Ik bemin.
 Thou lovest, Gy bemint.
 He loveth óf loves, Hy bemint.

Meervoud.

We love, Wy beminnen.
 Ye love, Gylieden bemint.
 They love, Zy beminnen.

Deeze zelfde tyd wordt ook met byvoeginge van het woordtje *Do* uytgedrukt, met dit onderscheyd nochtans, dat deeze t'zamengevoegde wyze van spreken, wat krachtiger van naadruk is, gelyk ook in myn Woordenboek onder 't woord *Do* is aangewezen.

Eenvoud.

I do love, Ik bemin.
 Thou dost love, Gy bemint.
 He doth love, Hy bemint.

Meervoud.

We do love, Wy beminnen.
 Ye do love, Gelylieden bemint.
 They do love, Zy beminnen.

Onvolkomen verleden tyd.

Deeze tyd wordt ook even als de tegenwoordige op tweederley wyze uytgedrukt, aldus.

Eenvoud.

I loved óf did love, Ik beminde.
 Thou lovedst óf didst love, Gy beminde.
 He loved óf did love, Hy beminde.

Meervoud.

We loved óf did love, Wy beminden.
 Ye loved óf did love, Gylieden bemindet.
 They loved óf did love, Zy beminden.

Volkomen verleden tyd.

Eenvoud.

I have } Ik heb. }
 Thou hast } loved, Gy hebt. } bemind.
 He hath } Hy heeft. }

Meervoud.

We have } Wy hebben }
 Ye have } loved, Gylieden hebt } bemind.
 They have } Zy hebben. }

Meer als volkomen verledene tyd.

Eenvoud.

I had } Ik had }
 Thou hadst } loved, Gy hadt } bemind.
 He had } Hy had }

Meervoud.

We had } Wy hadden }
 Ye had } loved, Gylieden hadt } bemind.
 They had } Zy hadden. }

Toekomende tyd.

Eenvoud.

I shall óf will } Ik zal }
 Thou shalt óf wilt } love, Gy zult } beminnen.
 He shall óf will } Hy zal }

Meervoud.

We shall óf will } Wy zullen }
 Ye shall óf will } love, Gylieden zult } beminnen.
 They shall óf will } Zy zullen }

De GEBIEDENDE WYZE.

Eenvoud.

Love óf love thou, Bemin gy.
 Let him love, Dat hy beminne.

Meervoud.

Let us love, Beminnenwe.
 Love óf love ye, Bemint gylieden.
 Let them love, Dat zy beminnen.

De

資料 77. W. Sewel の辞書に収載された英文典の方の動詞活用表

能動動詞 <love> の例

直説法：《現在》…動詞そのものの現在のほかに、<do>によるものが載せられている。この<do>は、和蘭語にはない強調の助動詞である。

《過去ノ過去》(現代の「現在完了」)

《未来》1種類のみ

使令法

Beknopt vertoog wegens

DE WENSCHENDE OF ONDERVOEGELYKE WYZE.

Tegenwoordige en toekomstige tyd.

Eenvoud.

That { I may
Thou mayst
He may } love,

Dat { Ik beminne of mag
Gy bemint of moogt
Hy beminne of mag } beminnen.

Meervoud.

That { We may
Ye may
They may } love,

Dat { Wy beminnen of moogen
Gylieden beminnen of moogt
Zy beminnen of moogen } beminnen.

Onvolkomen verleden tyd.

Eenvoud.

That { I loved of did
Thou lovedst of didst
He loved of did } love,

Dat { Ik beminde.
Gy beminde.
Hy beminde. }

Meervoud.

That { We loved of did
Ye loved of did
They loved of did } love,

Dat { Wy beminden.
Gylieden bemindet.
Zy beminden. }

Dus kan men ook zeggen.

Eenvoud.

Tho { I might
Thou mightest
He might } love,

Schoon { Ik beminde
Gy beminde
Hy beminde } of mogt beminnen.

Meervoud.

Tho { We might
Ye might
They might } love,

Schoon { Wy beminden
Gylieden bemindet
Zy beminden } of mogten beminnen.

Volkomen verleden tyd.

Eenvoud.

Tho { I have
Thou hast
He hath } loved,

Schoon { Ik bemind heb.
Gy bemind hebt.
Hy bemind heeft. }

Meervoud.

Tho { We have
Ye have
They have } loved,

Schoon { Wy bemind hebben.
Gylieden bemind hebt.
Zy bemind hebben. }

Meer

資料 78. W. Sewel の辞書に収載された英文典の方の動詞活用表

能動動詞 <love> の例 (続)

文註法 (現代の「仮定法」): 《現在》…接続詞は“that”。Gebreklyke Helpwoord 《缺如言》(今日の「話法の助動詞」)である“may”が用いられている。ここで用いられているということは、「祈願の may」であろう。先行する <be> と <have> の活用表にはこの“may”は見られない。

《過去ノ現在》…接続詞は同じく“that”。動詞本体だけの場合に加えて、“did”と“might”を用いたものの3種類が挙げられている。“do/did”という助動詞は和蘭語にはないので、右側の和蘭語の活用形には、当然のことながら反映されていない。

《真ノ過去》…接続詞は“tho/schoon”。

de Engelsche Spraakkonst.

25

Meer als volkomen verleeden tyd.

Eenvoud.

If { I had
Thou hadst
He had } loved,Zo { Ik bemind had.
Gy bemind hadt.
Hy bemind had.

Meervoud.

If { We had
Ye had
They had } loved,Zo { Wy bemind hadden.
Gylieden bemind hadt.
Zy bemind hadden.

Toekomende tyd.

Eenvoud.

When { I shall
Thou shalt
He shall } love,Als { Ik beminnen zal.
Gy beminnen zult.
Hy beminnen zal.

Meervoud.

When { We shall
Ye shall
They shall } love,Als { Wy beminnen
zullen.
Gylieden beminnen
zult.
Zy beminnen
zullen.

Tweede Toekomende tyd.

Eenvoud.

When { I shall
Thou shalt
He shall } have loved,Als { Ik bemind zal hebben.
Gy bemind zult hebben.
Hy bemind zal hebben.

Meervoud.

When { We shall
Ye shall
They shall } have loved,Als { Wy bemind zullen hebben.
Gylieden bemind zult hebben.
Zy bemind zullen hebben.

Onderstellende toekomende tyd.

Eenvoud.

I should
Thou shouldst
He should } love,Ik zou
Gy zoudt
Hy zou } beminnen.

Meervoud.

We should
Ye should
They should } love,Wyzouden
Gylieden zoudt
Zy zouden } beminnen.

Tweede onderstellende toekomende tyd.

When I should have loved, &c. Wanneer ik bemind zoude hebben, enz.

Onder de Ondervoeglyke wyze zyn ook te rekenen deeze manieren van spreken.

I could have loved, Ik zoud hebben kunnen beminnen.

Thou couldst have loved, &c. Gy zoudt hebben kunnen beminnen, enz.

Desgelyks.

I would have loved, &c.

Ik zou bemind hebben, enz.

I might have loved, &c.

Ik had kunnen beminnen, *ef* ik mogt bemind hebben, enz.

D

De

資料 79. W. Sewel の辞書に収載された英文典の方の動詞活用表

能動動詞 <love> の例 (続)

文註法《過去ノ過去》…接続詞は“if / so”。

《未来》《第二未来》【仮定推量未来】【第二仮定推量未来】

未来時制の接続詞は“when / als · wanneer”。前2者が“shall / zullen”を用いているのに対し、後2者は“should / zoude”による Conditionalis 《仮定法》である。

ところが、これから100年以上が経過したMaatschappijの *Grammatica* (1822) になると、<zullen+Inf.> と <zullen+p.p.> は直説法に属し、《文註法》の未来時制は“zoude+Inf.” と “zoude+p.p.” だけになる。用いられる従属接続詞も減少し、“dat” ひとつだけになってしまう。*Grammatica* の動詞活用表は、第一章第一節を参照。

資料 81. P. Marin の蘭語対訳仏文典
(寛政2)における“sortir”の活用表

この単語は、和蘭語では“uitgaan”という分離動詞になる。柳川春三が、非分離動詞の《固着》に対して《離合》と呼んだところのものである。

74

V A N D E

Le 1 Prétérit.

Je sortois.
Tu sortois.
Il sortoit.
Nous sortions.
Vous sortiez.
Ils sortoient.

Le 2 Prétérit.

Je sortis.
Tu sortis.
Il sortit.
Nous sortîmes.
Vous sortîtes.
Ils sortirent.

Le Parfait.

Je suis sorti.
Tu es sorti.
Il est sorti.
Nous sommes sortis.
Vous êtes sortis.
Ils sont sortis.

Le Plusque Parfait.

J'étois sorti.
Tu étois sorti.
Il étoit sorti.
Nous étions sortis.
Vous étiez sortis.
Ils étoient sortis.

Le Futur.

Je sortirai.
Tu sortiras.
Il sortira.

De eerste voorlede Tyd.

Ik ging uit.
Gy gingt uit.
Hy ging uit.
Wy gingen uit.
Gy-lieden gingt uit.
Zy gingen uit.

Twecede voorlede Tyd.

Ik ging uit.
Gy gingt uit.
Hy ging uit.
Wy gingen uit.
Gy-lieden gingt uit.
Zy gingen uit.

De Volmaakte Tyd.

Ik ben uitgegaan.
Gy zyt uitgegaan.
Hy is uitgegaan.
Wy zyn uitgegaan.
Gy-lieden zyt uitgegaan.
Zy zyn uitgegaan.

Meer als volmaakte Tyd.

Ik waer uitgegaan.
Gy waert uitgegaan.
Hy waer uitgegaan.
Wy waeren uitgegaan.
Gy-lieden waert uitgegaan.
Zy waeren uitgegaan.

De Toekomende Tyd.

Ik zal uitgaan.
Gy zult uitgaan.
Hy zal uitgaan.

Nous

CONJUGATIE.

75

Nous sortirons.
Vous sortirez.
Ils sortiront.

Wy zullen uitgaan.
Gy-lieden zult uitgaan.
Zy zullen uitgaan.

L'IMPERATIF.

Sors.
Qu'il forte.
Sortons.
Sortez.
Qu'ils sortent.

GEBIEDENDERWYS.

Gaa uit.
Laat hy uitgaan.
Laat ons uitgaan.
Gaat uit.
Laaten zy uitgaan.

LE SUBJONCTIF.

Le Présent.

Afin que je sorte.
Afin que tu sortes.
Afin qu'il forte.
Afin que nous sortions.
Afin que vous sortiez.
Afin qu'ils sortent.

L'Imparfait.

Je sortirais.
Tu sortirais.
Il sortirait.
Nous sortirions.
Vous sortiriez.
Ils sortiraient.

L'Optatif.

Je voudrais que je sortisse.
Je voudrais que tu sortisses.
Je voudrais qu'il sortit.
Que nous sortissions.
Que vous sortissiez.
Qu'ils sortissent.

BYVOEGENDERWYS.

De Tegenwoordige Tyd.

Op dat ik uitga.
Op dat gy uitgaat.
Op dat hy uitga.
Op dat wy uitgaan.
Op dat gy-lieden uitgaat.
Op dat zy uitgaan.

De Onvolmaakte Tyd.

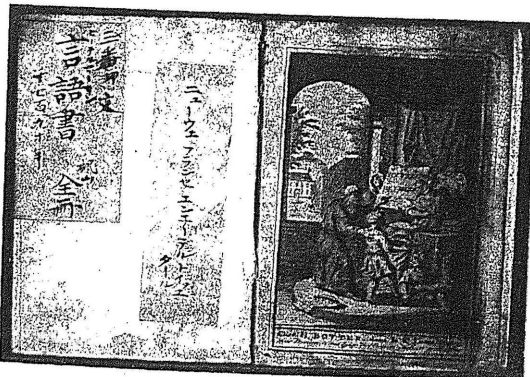
Ik zou uitgaan.
Gy zoud uitgaan.
Hy zou uitgaan.
Wy zouden uitgaan.
Gy-lieden zoud uitgaan.
Zy zouden uitgaan.

De Wenschende Tyd.

Ik wenschte dat ik uitging.
Ik wenschte dat gy uitgingt.
Ik wenschte dat hy uitging.
Ik wenschte dat wy uitgingen.
Ik wenschte dat gy-lieden uitgingt.
Ik wenschte dat zy uitgingen.

Les

Sewel に比べると、Marin の《文註法》の内容はかなりシンプルに映る。時制は3つ、用いられている従属接続詞は“afin que: op dat” “que: dat” の2種のみである。しかし、Opt.の箇所が、他の文典では普通、従属節だけの表示なのだが、ここでは主節まで付けられているので、英語の<I wish~>に相当する<Ik wenschte dat ik uitging>のニュアンスが良く分かる。



94

CONJUGAISON

CONJUGATIE.

de.

van

N'AVOIR QUE FAIRE.

NIET BEHOEVEN.

Negation Absoluë

Je n'ai que faire de parler.	<i>Ik behoef niet te spreken.</i>
Tu n'as que faire de parler.	<i>Gy behoef niet te spreken.</i>
Il n'a que faire de parler.	<i>Hy behoef niet te spreken.</i>
	<i>Nous</i>

95

Nous n'avons que faire de p.	<i>Wy behoeven niet te spreken.</i>
Vous n'avez que faire de p.	<i>Gyl. behoef niet te spreken.</i>
Ils n'ont que faire de parler.	<i>Zy behoeven niet te spreken.</i>

Interrogation Négative.

N'ai je que faire de parler?	<i>Behoef ik niet te spreken?</i>
N'as-tu que faire de parler?	<i>Behoefst gy niet te spreken?</i>
N'a-t-il que faire de parler?	<i>Behoefst hy niet te spreken?</i>
N'avons-nous que faire de p.?	<i>Behoeven wy niet te spreken?</i>
N'avez-vous que faire de p.?	<i>Behoefst gy-l. niet te spreken?</i>
N'ont-ils que faire de par.?	<i>Behoeven zy niet te spreken?</i>

Interrogation Positive.

Qu'ai-je à faire de parler?	<i>Wat behoef ik te spreken?</i>
Qu'as-tu à faire de parler?	<i>Wat behoefst gy te spreken?</i>
Q'a-t-il à faire de parler?	<i>Wat behoefst hy te spreken?</i>
Qu'avons-nous à faire de p.?	<i>Wat behoeven wy te spreken?</i>
Qu'avez-vous à faire de p.?	<i>Wat behoefst gy-l. te spreken?</i>
Qu'ont-ils à faire de parler?	<i>Wat behoeven zy te spreken?</i>

Jen'avois que faire de parler.	<i>Ik behoefde niet te spreken.</i>
--------------------------------	-------------------------------------

Je n'ai eu que faire de par.	<i>Ik heb niet behoeven te spreken.</i>
Je n'aurai que faire de par.	<i>Ik zal niet behoeven te spreken.</i>
Je n'aurais que faire de par.	<i>Ik zou niet behoeven te spreken.</i>
N'ayant que faire de parler.	<i>Niet behoevende te spreken.</i>

資料 82. Marin (1790) の〈作文四法〉

ただしここには〈肯定文〉が欠落しているので、〈否定〉〈否定疑問〉〈肯定疑問〉の三法の作り方しか示されていない。続いて、《半過去》《過去》《未来》【仮定推量未来】の各時制と現在分詞を使って、否定文が作られている。

Volmaakt verledene tijd.

Ik ben geweest,
Gij zijt geweest,
Hij is geweest,
Wij zijn geweest,
Gij zijt geweest,
Zij zijn geweest.

Meer dan volmaakt verledene tijd.

Ik was geweest,
Gij waart geweest,
Hij was geweest,
Wij waren geweest,
Gij waart geweest,
Zij waren geweest.

Eerste toekomstige tijd.

Ik zal zijn,
Gij zult zijn,
Hij zal zijn,
Wij zullen zijn,
Gij zult zijn,
Zij zullen zijn,

Tweede toekomstige tijd.

Ik zal geweest zijn,
Gij zult geweest zijn,
Hij zal geweest zijn,
Wij zullen geweest zijn,
Gij zult geweest zijn,
Zij zullen geweest zijn,

De voorwaardelijke tijd.

Ik zou zijn,
Gij zoudt zijn,

Hij zou zijn,
Wij zouden zijn,
Gij zoudt zijn,
Zij zouden zijn,

Perfect tense.

I have been.
Thou hast been.
He has been.
We have been.
You have been.
They have been.

Pluperfect tense.

I had been.
Thou hadst been.
He had been.
We had been.
You had been.
They had been.

First future tense.

I shall or will be.
Thou shalt or wilt be.
He shall or will be.
We shall or will be.
You shall or will be.
They shall or will be.

Second future tense.

I shall have been.
Thou wilt have been.
He will have been.
We shall have been.
You will have been.
They will have been.

The conditional tense.

I should, or would be.
Thou shouldst, or wouldst be.
He should, or would be.
We should, or would be.
You should, or would be.
They should, or would be.

De tweede voorwaardelijke tijd.

Ik zou geweest zijn,
Gij zoudt geweest zijn,
Hij zou geweest zijn,
Wij zouden geweest zijn,
Gij zoudt geweest zijn,
Zij zouden geweest zijn,

De gebiedende wijs.

Zijt, of weest,
Laat hem zijn,
Laat ons zijn,
Zijt, of weest,
Laat hen zijn,

De aanvoegende wijs.

De tegenwoordige tijd.

Dat ik zij,
Dat gij zijt,
Dat hij zij,
Dat wij zijn,
Dat gij zijt,
Dat zij zijn,

Onvolm. verl. tijd.

Dat ik ware,
Dat gij waret,
Dat hij ware,
Dat wij waren,
Dat gij waret,
Dat zij waren,

De volm. verl. tijd.

Dat ik zij geweest,
Dat gij zijt geweest,
Dat hij zij geweest,
Dat wij zijn geweest,
Dat gij zijt geweest,
Dat zij zijn geweest,

The second conditional tense.

I should have been.
Thou wouldst have been.
He would have been.
We should have been.
You would have been.
They would have been.

The imperative mood.

Be.
Let him be.
Let us be.
Be,
Let them be.

*The subjunctive mood.**The present tense.*

That I be.
That thou be.
That he be.
That we be.
That you be.
That they be.

Imperfect tense.

That I were.
That thou were.
That he were.
That we were.
That you were.
That they were.

Perfect tense.

That I have been.
That thou have been.
That he have been.
That we have been.
That you have been.
That they have been.

資料 83. R. van der Pyl (1819) の時制 ^{又 2}

ふたつの未来時とふたつの仮定時が、《附説法》(=Subj.)
ではなくて、直説法の方に属している。

《附説法》の従属接続詞は“dat”(英 that; 独 daß)ひとつ
しか見えない。

A
PRACTICAL GRAMMAR
OF THE
DUTCH LANGUAGE,

CONTAINING:
AN EXPLANATION OF THE DIFFERENT
PARTS OF SPEECH; ALL THE RULES
OF SYNTAX, AND A GREAT NUM-
BER OF PRACTICAL EXERCISES.

BY
R. VAN DER PYL,
TEACHER OF LANGUAGES, AND AUTHOR OF
SEVERAL GRAMMATICAL WORKS.

ROTTERDAM,
PRINTED FOR ARBON AND KRAP.
1819.

資料 84.

R. van der Pyl (1819) ^(文政2) の同じ文典に収載されている〈作文四法〉

4種の Mood と 6種の時制による動詞活用表が終わったあと、

argues to possess. 115
Verbs are conjugated in four different manners, viz: affirmatively, negatively, interrogatively and with an interrogation negative.

と言って、以下の活用表が示される。〈肯定文〉を省いて、〈否定〉〈肯定疑問〉〈否定疑問〉の3種がある。

116 *A practical Grammar of the Dutch Language.*

When the verbs are conjugated negatively, the negative adverb *niet*, not, is added.

Present tense,

of the verb *hebben*, to have.

<i>Ik heb niet,</i>	I have not.
<i>Gij hebt niet,</i>	Thou hast not.
<i>Hij heeft niet,</i>	He has not.
<i>Wij hebben niet,</i>	We have not.
<i>Gij hebt niet,</i>	You have not.
<i>Zij hebben niet,</i>	They have not.

Present tense,

of *zijn*, to be

<i>Ik ben niet,</i>	I am not.
<i>Gij zijt niet,</i>	Thou art not.
<i>Hij is niet,</i>	He is not.
<i>Wij zijn niet,</i>	We are not.
<i>Gij zijt niet,</i>	You are not.
<i>Zij zijn niet,</i>	They are not.

Interrogatively.

Present tense,

of the verb to have, *hebben*.

<i>Heb ik?</i>	Have I?
<i>Hebt gij?</i>	Hast thou?
<i>Heeft hij?</i>	Has he?
<i>Hebben wij?</i>	Have we?
<i>Hebt gij?</i>	Have you?
<i>Hebben zij?</i>	Have they?

Present tense,

of the verb to be, *zijn*.

<i>Ben ik?</i>	Am I?
<i>Zijt gij?</i>	Art thou?

A practical Grammar of the Dutch Language. 117

<i>Is hij?</i>	Is he?
<i>Zijn wij?</i>	Are we?
<i>Zijt gij?</i>	Are you?
<i>Zijn zij?</i>	Are they?

With an interrogation negative.

Present tense.

<i>Heb ik niet?</i>	Have I not?
<i>Hebt gij niet?</i>	Hast thou not?
<i>Heeft hij niet?</i>	Has he not?
<i>Hebben wij niet?</i>	Have we not?
<i>Hebt gij niet?</i>	Have you not?
<i>Hebben zij niet?</i>	Have they not?

Present tense,

of to be, *zijn*.

<i>Ben ik niet?</i>	Am I not?
<i>Zijt gij niet?</i>	Art thou not?
<i>Is hij niet?</i>	Is he not?
<i>Zijn wij niet?</i>	Are we not?
<i>Zijt gij niet?</i>	Are you not?
<i>Zijn zij niet?</i>	Are they not?

Perfect tense.

<i>Ben ik niet geweest?</i>	Have I not been?
<i>Zijt gij niet geweest?</i>	Hast thou not been?
<i>Is hij niet geweest?</i>	Has he not been?
<i>Zijn wij niet geweest?</i>	Have we not been?
<i>Zijt gij niet geweest?</i>	Have you not been?
<i>Zijn zij niet geweest?</i>	Have they not been?

NIEUWE
ENGELSCH E SPRAAKKUNST



DOOR
H. E. LLOYD.

NAAR DEN NEGENDEN DRUK
VOOR NEDERLANDSCHEN BEWERKT

DOOR
D. DOMHOFF, Hzn.

BEZORIEN DOOR
D^r. M. P. LINDO,

LEERAAR DER EERSTE ELASSUS BIJ DE KONINKLIJKE AKADEMIE
VOOR DE REE- EN LANDMAGT.

VIJFDE DRUK.

TE ADRESSEN, BIJ
J. P. THIEME.
1855.

OVER HET WERKWOORD.

215

a.) BEVESTIGENDE VORM.
Indicative mood.
Present tense.

<i>I dine.</i>	Ik eet.
<i>Thou dinest.</i>	Gij eet.
<i>He dines.</i>	Hij eet.
<i>We dine.</i>	Wij eten.
<i>You dine.</i>	Gij eet.
<i>They dine.</i>	Zij eten.

b.) ONTKENNENDE VORM.
Indicative mood.
Present tense.

<i>I dō not dine.</i>	Ik eet niet.
<i>Thou dōst not dine.</i>	Gij eet niet.
<i>He dōes not dine.</i>	Hij eet niet.
<i>We dō not dine.</i>	Wij eten niet.
<i>You do not dine.</i>	Gij eet niet.
<i>They do not dine.</i>	Zij eten niet.

Imperfect tense.

c.) VRAGENDE VORM.

219

Indicative mood.
Present tense.

<i>Do I dine?</i>	Eet ik?
<i>Dost thou dine?</i>	Eet gij?
<i>Does he dine?</i>	Eet hij?
<i>Do we dine?</i>	Eten wij?
<i>Do you dine?</i>	Eet gij?
<i>Do they dine?</i>	Eten zij.

Imperfect tense.

wordt nu niet gebruikt.

d.) VRAGEND ONTKENNENDE VORM.

221

Indicative mood.
Present tense.

222 <i>Do I not dine?</i>	Eet ik niet?
<i>Dost thou not dine?</i>	Eet gij niet?
<i>Does he not dine?</i>	Eet hij niet?
<i>Do we not dine?</i>	Eten wij niet?
<i>Do you not dine?</i>	Eet gij niet?
<i>Do they not dine?</i>	Eten zij niet?

Imperfect tense.

Did I not dine? At ik niet?

資料 85. H. E. Lloyd (1855) の蘭語英文典

日本では蘭語学が最盛期を迎えた安政期に書かれた英文典である。4種の〈作文四法〉が出揃っている。上から順に〈肯定〉〈否定〉〈疑問〉〈否定疑問〉。

ルナレ今二三ノ例ヲ左ニ示ス

婦人ト死ス 現在

昨日死ス一婦人

直説法正体

直説法変体

此ニ法ハ俱ニ直説法ノ体ナリ然ルニ此ヲ以テ一章ヲナスト
能ヒ人此文ヲ見テ此婦人死スルハ何故カ其死ヲ知ルト
能ヒ其死ノ因ヲ起厚スル所ヲ知ラズ是レ附説法ノ起厚

為^代彼^代勞^名療^名嬰^名ルカ

附説法

此ノ如ク直説法ニ附説法連体ノ其死スル所以始メテ分
明ニ至ルナリ然ラテ附説法ハ直説法ノ反對ニ名言ノ

最下ニメ文ノ終リニ在ル活言ヨリ直チニ上ニ飛躍ノ接言ニ至リ
直説法ノ文意ニ交リ其餘義ヲ申明スルモノナリ此文
体ニテハ活言文ノ始メニ必ズ在ルヲナレ以テ直説法ト區別
ス可シ之ニ加フルニ文ノ始メニ直説法ノ餘義ヲ申明スル接

言アリ則チ *om dat* *dewijl* *op dat* *ten einde*

terwijl *naardien* 等ナリ○以上ニ体其法ヲ異ニス

ト至ル西文連環メ一小段落ヲナスト知ルヘシ
故ニ若シ夫レ此文ニ此婦人ノ勞^名療^名ヲ患ル所ヲ主トシ

言ント欲セハ之ヲ擧レテ附説法ヲ上トシ直説法ヲ下トス
ルヲアリ此時ニハ直説法中ノ語ヲレク其所在ヲ擧ル

資料 86. 高野長英『繙巻得師草稿』 《附説法》の説明箇所

この前に、「主語+動詞」の直説法<正体>と、倒置を起こして「動詞+主語」となる場合の<変体>が説明されている。続く《附説法》の説明は、動詞が文の最後にあることから始まり、幾つかの従属接続詞を挙げて、直説法と附説法は<法を異にすと雖も両文連関して一小段落をなす>と結論づけられている。

總テ附説法ハ直説法ノ反對ニシテ 名言ノ最下ニシテ文ノ終リニ在ル
活言ヨリ直チニ上ニ飛躍シテ接言ニ至リ直説法ノ文意ニ交リ 其餘義
ヲ申明スルモノナリ コノ文体ニテハ活言文ノ始メニハ必ズ在ルコト
ナシ 以テ直説法ヲ區別ス可シ 之ニ加フルニ文ノ始メニ直説法ノ餘
義ヲ申明スル接言アリ 即チ *om dat*, *dewijl*, *op dat*, *ten einde*,
terwijl, *naardien* 等ナリ○以上ニ体其法ヲ異ニスト雖モ両文連関シテ
一小段落ヲナスト知ルヘシ



他活言ナリト常ニカノ名言ヲ要スルナリ。是ヲ知ラレトスルニ
 先ツハルモノ語典ニ執テ求ムヘシ此中ニハ印シアル
 ハ自活言ナリトハ印シアルハ他活言ナリト又西文ヲ
 解スルノ一大捷徑ノ法ハ早ク本文ト註トヲ見分ツコトナリ
 西文ニハ何体ノ文ナリト拘ラス悉ク分註ヲ挿ム又註ノ註アリ
 註アリ假令ハ上ニ出タス此ニ再ヒ挙テ其ニ文註入
 レルトキハ先ツ本文ハ為一婦人勞瘵嬰。死セリ彼カ昨日ト
 云語ナルニ此婦ノ年齢産業出処行状ホ未メ詳カナ
 ラス又死スル状痛苦アリヤ眠ルカ如クナリヤ詳カナラス
 是ヲ以テ是ヲ審ニスルニハ一婦人下ノ所ノ言ヲ入レテ分註
 トス タトエバ^{ソレハ}所ニ二十三歳ノ齡アリテニ活過シニ某国生レ貞節ナル等トナス 此分註法ノ格ハ附説法ト
 節ナルホトナス此分註法ノ格ハ附説法ト一般ニシテ文末ノ
 活言ヨリ文註文ノ初メニ轉シ本文ノ名言ニ接スルナリ
 但シ是ハ上ニモ説ク如ク一婦人ノ一種ノ附屬名言ナリト
 知ルベシ又是死スル状ヲ審ニスルニハ之ヲ本文ノ昨日ノ
 上ニ各クヲ注トス タトエハ精神変易ナク諸事之身後
 ニ齋親族枕ノ眠ルカ如クホト註スルナリ故ニ本文ハ
 僅カニ十言ナルモ分註ヲ加ルヲ以テ數十言トナル則チ
 為一婦人其所ニ二十三歳ノ齡ニテ生業活過レ稟
 國産レ而メ貞節ナル勞瘵嬰死スル精神變易ナク

資料 87. 高野長英『繙卷得師草稿』 《分註法》の説明箇所

長英の《分註法》は、関係代名詞を用いて注釈を本文中に挟み込む方法のことである。

又西文ヲ解スルノ一大捷徑ノ法ハ早ク本文ト註トヲ見分ツコトナリ 西文ニハ何体ノ文
 ナリト拘ラス悉ク分註ヲ挿ム又註ノ註アリ 假令ハ上ニ出タス此ニ再ヒ挙テ其ニ文註入
 レルトキハ 先ツ本文ハ<為一婦人勞瘵嬰。死セリ彼カ昨日>ト云語ナルニ 此婦ノ年
 齡産業出処行状等今夕詳カナラス 又死スル状痛苦アリヤ眠ルカ如クナリヤ詳カナラス
 是ヲ以テ是ヲ審ニスルニハ一婦人下ノ所ノ言ヲ入レテ分註トス タトエバ^{ソレハ}所ニ二十三歳ノ齡アリテニ活過シニ某国生レ貞節ナル等トナス 此分註法ノ格ハ附説法ト
 一般ニシテ文末ノ活言ヨリ文註文ノ初メニ轉シ本文ノ名言ニ接スルナリ……

資料 88.

高野長英『繙卷得師草稿』
《分註法》の説明箇所(続き)

関係代名詞のことは<ソレハ
云所々スル所ノト再ビ反リ読
ムベキ代言>と呼ばれ、動詞
は文の最後にあると言われて
いる。文は当時にあつては縦
書きが当たり前であるから、
「最後」ではなく<最下>と
なっている。
この後あと二葉で、この草稿
は中断される。

枕シテ眠ルカ如ク昨日ト見タ長キ章ヲ去初学ノ向ハ
 難キ文トナル故ニ先ツ其分註ヲ除キテ早ク死セリ
 彼ノ体ト用トヲ見タスモ要トス哉ノ如ク後以テ本
 文ヨリ分註ニ及フトキハ高キ如ク登ラ向方ヲ見ルカ如ク
 一月瞻然タルヲ得ヘシ其分註ヲ知ルハノ法アリテ
 其下ニ *Melle, ain, Melle, deir, Melle, die*
let jany, let Melle, Maccin, Mardolore,
Mair, äen, Mhaine, Mardkan, dat ノ
 ソレハ云所々スル所ノト再ビ反リ讀ムベキ代言ヲテ治言
 其章ノ最下ニ在ルナリ 此サ工知覺セバ本文ト分註ハ容

四法
 如蘭ノ文法四法アリ一ヲ直説法ト云フニテ附説法ト
 云ヒ三ヲ使令法ト云ヒ四ヲ疑問法ト云フ直説法ハ直テ
 ニ事物ヲ説明スルニ我ヨリ事ル附説法ハ獨立シテ
 文ヲナエテ得ズ常ニ必ズ直説法ヲ獨テ其義始メテ
 分明ニ至ル又直説法ノ文之ヲ得テ其文意ヲ補足セテ
 アリ便ニ是レ互ニ相離ルルヲ能ハルカ故ニ我名アリ使令
 法ハ人ニ向テ事ヲ命スル事ニ用ニ疑問法ハ事物ヲ人
 ニ質問スル文ナリ故ニ使令法ト疑問法ハサテ直説
 法ト云ヒ三ノ一ニ我名アリニテ事ト云ヒ四ノ一ニ我名アリニテ

長英の四法は、《直説法》《附説法》《使令法》《疑問法》
である。普通の四法は、《疑問法》の代わりに《不定法》
があるのだが、長英の四法にはそれがない。しかも、こ
の《疑問法》は文字通り<物事ヲ人ニ質問スル文>のこ
とで、安政期の文典のように Conj./Subj.のことでない点
が特異である。

第二節 英語学における《假定法》と《接続法》

1. 英語における《假定法》

本章序節にて述べたように、明治時代の英語の Subj. に関しては、訳語の紛糾は極めて少ない。182 冊という調査数の割には、意外なほど用語のばらつきが見られないからである。

明治における最も重要な現象は、《接続法》から《假定法》への転換である。表 8 (86 頁) より、英語の Subj. の訳語は以下のようにまとめることができる。

Subjunctive

1. 虚構様		
2. 疑問法	3. 疑惑法	4. 疑義法
5. 附説法	6. 附属法	
7. 接続法	8. 接合法	9. 接説法
10. 不定法		
11. 約束法		
12. 假定法	13. 仮設法	14. 仮説法

これらのうち、明治になってからの初出用語は 8, 9, 12, 13, 14 のみである。8. と 9. は《接続法》と同趣であるから、結局、全く新しい用語は《假定法》系のみということになる。その初出は、明治⁽¹⁸⁸⁸⁾21年『スキントン氏ニューランゲージレッスンズ直譯』(石川録太郎)である。が、明治⁽¹⁸⁹⁰⁾23年までは幕末の蘭語学からの用語である《疑問法》《接続法》と仏語学系の《附属法》が併用されている。24年以降は《接続法》でほぼ統一され、その時代が15年ほど続く。そして、明治⁽¹⁹⁰⁶⁾39年『英文典ダイヤグラム』以後《假定法》と交替し、現代に至っている。

この《假定法》初出の年である明治⁽¹⁸⁸⁸⁾21年を以て、《疑問法》という興味深い術語が終焉を迎える。替わった《接続法》も、蘭語学からの継承ではあるが、それは江戸系の『蘭学凡』のみの用語であり、蘭語学における主流であった《附説法》は江戸時代の幕引きとともに捨て去られたのであった(これは独逸語においても同様である)。

明治⁽¹⁸⁸⁶⁾19年『ピ子ヲ氏英文典獨学 全』(玉井靖三郎訳)に、ひとつだけ《不定法》という

表 26. 英語原典における Mood の構成

年号	著者	Infinitive	Indicative	Imperative	Optative	Potential	Conjunctive Subjunctive	Conditional	Infinitive	Participle
4c.	Donatus					m o d u s なし				
5c.	Priscianus		1.叙事法 明示法	2.命令法	3.祈願法		4.仮定法		5.不定法	
1325?	思弁文典		1.Ind.	2.Imp.	3.Opt.		4.Conj.		5.Inf.	
1527	Lily-Colet (羅英; 初版)		1.Ind.	2.Imp.	3.Opt.		4.Conj.		5.Inf.	
1549	Lily-Colet		1.Ind.	2.Imp.	3.Opt.	4.Pot.	5.Subj.		6.Inf.	
1586	Bullokar		1.Ind.	2.Imp.	3.Opt.		4.Conj.		5.Inf.	
1594	P.Gr.		m o o d なし							
1617	Hume		言及はあるが術語なし							
1621	Gill		1.Ind.	2.Imp.		3.Pot.			4.Inf.	
1634	Butler		1.Ind.	2.Imp.		.0.0.0.0.0.....3.Pot.			4.Inf.	
1640	B. Jonson		m o o d なし							
1654	Wharton		1.Ind.	2.Imp.		3.Pot.			4.Inf.	
1688	Miege		1.Ind.	2.Imp.			3.Subj.		4.Inf.	
1690	Clare		1.Ind.	2.Imp.			3.Conj.		4.Inf.	
1693	Aickin		1.Ind.	2.Imp.	4.Opt		3.Subj.		5.Inf.	
1708	Sewel (蘭語英文典)	1.Toonend ^e Wyze		2.Gebiedend ^e Wyze			3.Wenschend ^e Wyze		4.Onbepaald ^e Wyze	
1735	Collyer		m o o d なし							
1745	Kirkby	1.Inf	3.Ind Declarative	2.Imp.		4.Pot.				
1754	Gough		m o o d なし							
1761	White		1.Ind.	8.Imp.		4.Pot.	2.Subj.		9.Inf.	10.Part.
					3.Elective		5.Determinative	6.Obligative	7.Compulsive	
1762	Priestly		1.Ind.	2.Imp.		(Pot.)	3.Subj.		4.Inf.	
1771	Fennig		1.Ind.	4.Imp.		3.Pot.	2.Subj.		5.Inf.	

(表 26-1)

年号	著者	Infinitive	Indicative	Imperative	Optativus	Potential	Conjunctive Subjunctive	Conditional	Infinitive	Participle
1776	Peyton		1.Ind.	2.Imp.		3.Pot.	4. 1 st Cond.	2 nd Cond.(?)	5.Inf.	
1777	Harrison		1.Ind.	2.Imp.			3.Subj.		4.Inf.	
1784	Webster	1.Inf.	2.Ind.	3.Imp.		4.Pot.	5.Subj.			
1795	Murray		1.Ind.	2.Imp.		3.Pot.	4.Subj.		5.Inf.	
1801	Locke (蘭語英文典)	Aantoonend ^e Wyze		Gebiedend ^e Wyze			Byvoegend ^e Wyze		.Onbepaald ^e Wyze	
1815 (文化12)	オランダごほうび 和蘭語法解(英?)		1.直説法	5.使令法		2.許可法	3.附説法	4.第二附説法	6.不定法	
								7.疑問法	8.不無法	9.不有法
1845	Hamelberg (蘭語英文典)	1.Inf. Onbepaald ^e wijs	2.Ind. Aantoonend ^e wijs	4.Imp. Gebiedend ^e wijs		5.Pot. Mogelijkheid	6.Subj. Aanvoegend ^e wijs	3.Conditional Voorwaardelijk		
1852	Murray (蘭語英文典)		1.Ind. Aantoonend ^e wijze	2.Imp. Gebiedend ^e wijze		3.Pot. Vermogend ^e wijze	4.Subj. Aanvoegend ^e wijze		5.Inf. Onbepaald ^e wijze	
1854	Beek(蘭語英文典)	1.Inf. Onbepaald ^e wijs	2.Ind. Aantoonend ^e wijs	3.Imp. Gebiedend ^e wijs			4.Subj. Byvoegend ^e wijs			
1855	Gerdes (蘭語英文典)	1.Inf. Onbepaald ^e wijs	2.Ind. Aantoonend ^e wijs	3.Imp. Gebiedend ^e wijs			4.Subj. Conj. Aanvoegend ^e wijze			
	Lloyd(蘭語英文典)	1.Inf. Onbepaald ^e wijs	2.Ind. Aantoonend ^e wijs	3.Imp. Gebiedend ^e wijs			4.Subj. Aanvoegend ^e wijs			
1861	Murray		1.Ind.	2.Imp.		3.Pot.	4.Subj.		5.Inf.	
1867 (慶応3)	Quackenbos		1.Ind.	4.Imp.		2.Pot.	3.Subj.		5.Inf.	
	江戸版英吉利文典 (The Elementary Catechisms)		1.Ind.			2.Pot.	3.Subj.			
1869 (明治2)	ピ子ヲ氏原板英文 典 (慶応義塾版)		1.Ind.	4.Imp.		2.Pot.	3.Subj.		5.Inf.	6.Part.
1876 (明治9)	Swinton		1.Ind.	4.Imp.		2.Pot.	3.Subj.		5.Inf.	
1891 (明治24)	Sweet	Ind. fact·mood		Imp.			Subj. thought·mood			

(表 26-2)

訳語が見えるが、これが決して Inf. の誤りでないことはすでに述べたとおりである（第一章第二節 2.1. [92 頁]）

表8 (86 頁) を見ると、《仮定法》初出の年である明治⁽¹⁸⁸⁸⁾21年以降でこの術語が現れるのは、明治⁽¹⁸⁹⁷⁾30年の『スーイントン小文典直譯意解』（元木貞雄）と⁽¹⁹⁰⁰⁾33年の『子スフィールド氏第三英文典講義録』（奈倉次郎）の二例しかない。しかし、《接続法》と訳されてはいても、その内実がすでに仮定であることは次の奈倉の言にもよく示されている。

Subjunctive (接続法) と呼はるる所以は其の通例或は他の文に接続せしめられて孤立すること幾となきが故なり。

[構註]是を形よりすれば原名の如く接続法と云ふを当れりとすれども、その意味より考ふる時は常に假定の意味を以て假定法と称するなり。

（『子スフィールド氏第三英文典講義録』 Vol. II、61 頁）

この《仮定法》を以って、英語学においても結局意識の名称が選ばれたことになる。この意味で、明治⁽¹⁹⁰⁶⁾39年『英文典ダイヤグラム』は決定的であった。

英語では数が少ないが、この《仮定法》と同じ意味で用いられたのが、明治⁽¹⁸⁸³⁾26年『英語教授書』に一例だけ現れる《約束法》である。著者である寄山元吉は独逸語を専門とする人で、この用語は、実は専ら独逸語で用いられたものなのである。しかし、これはなかなか含むところの多い用語で、寄山が日本人として《約束法》の内容と用語それ自体についてどのように考えていたかは次節に譲るが、以下の説明にその一端が窺い知れよう。

資料 89.

約 束 法

should, would ハ亦約束法ニ用ユ約束法トハ(甲)事項ノ成否(乙)ノ事項ニ歸因スル語ノ用法ヲ云ヒ其言語ハ實際ト相反スルモノナリ例ヘバ日本語ニテ(私ハ金ガアルナラ此家ヲ買ヒマスガ)ト云フハ實際金ガナ井カラ買ヒ能ハメ意ヲ喪スルモノニシテ即チ約束法ト云フモノナリ而シテ約束法ハ現在ト過去ノ二種トス其現在ニハ常ニ半過去ノ働詞ヲ用ユルヲ例トス。

I should buy this book if I should have money. {私ハ金ガアルナラ此本ヲ買ヒマスガ (金ガナイカラ買フコト出ル来ス.)

He would have paid a visit to you if he would have had time. {彼ノ人ハ暇ガアツタナラバ汝ヲ訪問シタマヘシヨウガ (暇ガナイカラ訪問シマセン.)

should have 及ビ would have ニ代フルニ had ヲ用
should be 及ビ would be ニ代フルニ were ヲ用
ユルコト多シ例ヘバ I should buy this book, if I had

money. He would walk, if he were (would be) not ill. ノ如シ。約束法ニハ通常 if ナ用ユレドモ往々亦之ヲ省略スルコトアリ然ルモハ動詞ノ位置變更スルヲ以テ注意ス可シ。

Had I money, I should buy this book.
Were not he ill, he would walk.

(92 頁)

<其現在ニハ常ニ半過去ノ動詞ヲ用ユル>とは、前節で見た通り《半過去》とは現代の過去形のことであるから、現在の反実仮想を表わすには動詞の過去形を用いるという意味で、“should”と”would、並びに“if I were”と“if I had”を指している。ここで寄山は、Subj.の時制を「現在」と「過去」のふたつであると言っているが、現代から見るとまことに当然の事柄も、当時の人たちにとってはそうではなく、明治⁽¹⁸⁹⁴⁾27年、菅沼岩蔵は<Subjunctive Moodノ部分ハ其ノ実用甚タ少ク且ツ諸家ノ説色々ニシテ一定セズ> (『初等英文典』125 頁) と言い、人によって Subj.の時制の数が異なることを嘆いている。例えば Pinneo は、直説法と許可法の時制はすべて Subj.でも使えろと言い、更には、寄山が Subj.の「現在」であるとした“If I were”を特別扱いし、これを Subj.の<Suppositional Tense>としている²¹。

蘭語学で《文註法》と言い《疑問法》と呼ばれたものは、非現実仮定は勿論、認容から“wannear” (=when) や“als” (=when) や“dat” (=that) までを含んでおり、かなり幅広い内容を表現するところのものであったがために《仮定法》と呼ぶことができなかつたのとは逆に、Subj.の語形変化をほとんど失った英語においては、Subj.の内容が“if”にはほぼ限定されたため、《附属法》や《接続法》が捨てられて、その名称が《仮定法》に移行するのは、明治期にあっては必然であったと言えるであろう。

英語のように Pot.と Subj.の活用が《直説法》と変わらない場合、江戸期の人が和蘭語に向けたような、文法習得に注ぎ込む力はその分だけ軽減される。その代わり“if”を用いて表現されるところの<其言語ガ実際ト相反スルモノ>に関して注意すべきは、むしろその和訳の仕方であって、寄山が最も心を砕いたのは、まさにこの点であった。ここに見られる<私ハ金ガアルナラ此本ヲ買ヒマスガ(金ガナイカラ買フコトガ出来ヌ)>のような訳文は、当時の文法書では、英語のみならず独逸語においても、まず見ることのできないものである²²。

英語の Subj.に関する訳語で明治期に創造されたものは、結局、《仮定法》のみである。Subj.の術語は、前章で取り上げた Perf. (I have had) と Imperf. (I had) の例からは想像もつかないほどの統一性を見せている。あまりにも訳語のまとまりが良いので、原書では一体どうなっているのかと思い、調査したものが表 26 (334 頁) である。驚いたことに、Kirkby⁽¹⁷⁴⁵⁾を除き、ひとつの Mood に複数の用語が存在しない。表 27 (342 頁) と比較

するとよく分かるが、独逸語が羅典語の術語を自国語に翻訳して用語のばらつきを生ぜしめているのに対し、英語では羅典語をそのまま用いているのである。<Conjunctive>に代わる<Subjunctive>の登場は 1549 年の Lily-Colet で、以来これが主流となる。英語は、文法事項それ自体の定義・解釈に関しては<英米人ハ反テ文法書毎ニ説明ヲ異ニスルガ如キ弊>^{註 23}があるほどだったが、こと文法用語に関しては羅典語主義を採ったのである。実際 L. Murray は<若い人たちの頭を混乱させるようなことを一切避けようとする態度>を取り、<新しい品詞や文法用語や術語は Dr. Johnson の保守的発言をひいてしりぞけ>ている^{註 24}。独逸語の J. Grimm と父 Heyse^{ハイゼ}もまた、この点では羅典語主義者で、子供の時に頭に刻みつけられた羅典語の術語は他言語にも使用でき、いたずらな変更は生徒に混乱を与えるとの理由で、文法術語の独逸語化が<主な仕事>となった当時の文法家を批判している^{註 25}。

2. Conditional tense と Conditional mood

英文典においては、Subj.が“if”を扱っているため、Cond.はごく希にしか現れない。それでも存在しないわけではなく、以下のような訳語を見出すことができる。

Conditional

- | | | |
|--------|--------|--------|
| 1. 假設法 | 2. 假定法 | 3. 約束体 |
| 4. 設若体 | 5. 條件法 | |

酒巻貞一郎は、⁽¹⁸⁹⁷⁾明治 30 年に、<接続法と可能法とを合せて條件法 conditional mood となして論ずる文法家あり 又接続法は現在過去の二時制を有すと論ずるもの或は直説法と同様に六時制を有すべきものなりと論ずるものあり 彼此論議一定せず> (『英文法神髓』、146 頁) と言ったが、ここに現れた Conditional は、「もし～だったら～だろうに」という非現実仮定の結論部、即ち「～だろうに」の方のみを指すもので、時制としての Cond. と話法としてのそれと 2 種類がある。

前者の場合注意すべきは、これが Subj.ではなく、直説法の時制として現れるという点である。これは、前節で考察した蘭語学の未来時制と同じ現象である。前期蘭語学の 4 未来は、現代では Subj.に属する Conditionalis を、Subj.だけでなく直説法の未来時制としても持っていた。しかし表 15 (154 頁)を見ると、現代では 6 時制しか持たない英語と独逸語においても、和蘭語の未来時制が専らふたつになった^(安政 2)1855 年以降でもまだ、和蘭語と同様な未来の細分化が試られた時期があったことに気づかされるのである。

⁽¹⁸⁹⁴⁾明治 27 年『教科書獨修用新英語学』(内村達三郎編)では、<単ニ其時ヲ示ス>《単純時》の<First Conditional>《第一假設法》が“I should have”で、一方“I should have had”である<Second Conditional>《第二假設法》は、<一ノ働詞ガ其働作事変ヲ示ス

ニ 必ズ之ト其既ニ起リ或ハ将ニ起ラントスル時ヲ較ブ可キ他ノ働作事変アリテ之ニ対シテ云フ>《複合時》の一種として、直説法の中で扱われている時制である(89 及び 93 頁)。しかもこの《假設法》は仮定文の結論部のことであって、“If” のことではないのである。前述の寄山の《約束法》は、条件部と結論部を合わせて《約束法》として説明されていたが、本書では “If I had” と “If I had had” は《接続法》として扱われているので、仮定を表わす一文のうち、「もし～だったら」の条件部が《接続法》、「～だろうに」の結論部が直説法《假設法》時ということになる。

明治⁽¹⁸⁸⁸⁾31年『英語学大全』の直説法の時制も、《現在》《過去》《完了現在》《完了過去》《未来》《完了未来》の次に、<Conditional>《約束》と<Conditional Perfect>《完了約束》が置かれている。この《約束》という用語がいかにも理解されにくいものであったかということは、次節で、独逸語学者としての寄山の箇所でも詳述するが、前者の “I should have” にはく(若シ云々シタラバ)持ツデセウ>、後者の “I should have had” にはく(若シ云々シタラバ)持タデセウ>という対訳和語が付けられ、ここから、この《約束》という時制が結論部の部分を指していることが分かる。本書の条件部は《接続法》で、《接続法》と直説法《約束》時とを合わせて、<若シ斯々ノコトアラバ斯々スベシ>という《設若体》あるいは《約束体》が構成されるのである。

ところが、斎藤秀三郎の『英文法初歩』(明治⁽¹⁸⁹³⁾33)では、Conditional は Tense ではなくて Mood である。条件部が<働詞ノ假定ヲ現ハス形ニシテ附属文(Dependent Clause)中ニ用フルモノ>である《附属法》(=Subj.)であるのに対し、斎藤の<Conditional Mood>、即ち《條件法》は、<條件文(Conditional Sentence)ノ條件若シ想像ノ假定ニシテ其働詞ガ Subjunctive Past ナルトキハ其本分(Principal Clause)ノ働詞ニハ條件法(Conditional Mood)即チ “would”、“should” 等ノ助動詞ヲ附シタル形ヲ用フ。而シテ Conditional Mood ノ働詞ハ其附属文ニアル條件備ハリテ後始メテ為サントスル動作ヲ假定スルモノナリ>(153 頁) というものである²⁶。ここでは、「もし～だったら」の条件部が《附属法》、「～だろうに」の結論部が《條件法》と呼ばれ、現代の感覚からすると非常にややこしいことになってしまっている。これは、あの「変化する定動詞」という矛盾した表現を思い出させるが、しかし、日本語の問題から言えば、「もし～だったら」の部分をこそ《條件法》と受け取りかねないのではないだろうか。事実、蘭語学においては、Optativus は “zo”・“als” 等に導かれた従属節の方であった。さもなければ、寄山のように文全体を《約束法》として説明するほうがより合理的であろう。

《假定法》という用語の本格的な出発点となった『英文典ダイヤグラム』(明治⁽¹⁸⁹⁹⁾39)もまた、《假定法》とは別に《條件法》を持つが、これも斎藤と同じ Conditional Mood で、<目的希望條件疑等ヲ表ハシ if ニ依テ導ビカレ>る《假定法》を従えて、<Subjunctive Mood ノ結果ヲ表ハス條件法>である。

表 26 (334 頁) を見ても、英語の Mood は基本的に Cond. を持たない。何故かと言えば、仮定文の結論部は《直説法》か《許可法》とするのが普通だからである。仮定文の前半と

後半で Mood が異なるというのは仏文法を思い出させるが、実際『英語学大全』の著者は仏蘭西語で書かれた英文典を訳出し、一方『教科書獨修用新英語学』の編者が用いたのは、独逸語で書かれた英文典である。表 15 (154 頁) に示したように、Tense としての Conditional は蘭文典では珍しくなく、また著名なドイツ人の英語学者 Mätzner (1880) の Tense には、<1.Konditional> (=I should love) と <2.Konditional> (=I should have loved) が見られるので (表 18-6 [207 頁])、明治の英文典における数少ない Conditional Tense は、あるいは、このような外国語で書かれた英文典に依拠するのも知れない。

しかも、仮定文の条件部と結論部の Mood については、当時の英米人文法家の間で見解が異なっていたために、英語自身が定見を持っていなかったのである。

主節を述べる所の假設法を主句に用ゆる場合に就いて英米国の文典家中其説を異にする所あり Swinton, Brown の如き米国文法家は斯の如き句を可能法と称すと雖 Bain, Abbott, Nesfield の如き米国文典家は単に之を假設法の一作用に過ぎずと為す 即ち英国文典家は現今可能法なるものを認めず凡て條件的の意を有するものは假設法と為すなり この法簡便なるが如しと雖我国に於ては Swinton の文典多く諸学校に行はるるを以て本書も姑く其區別に従ひて可能法を設けたり 然れども本書に於ける可能法は第八十五ページに述ぶるが如く能力。蓋然。必至を表示するに在りて條件の結果即ち前節に於けるが如きものは此法中に加へず 畢竟可能法に就いては其説色々にして一定の法則なしとす (井上十吉『中等英文典』、128 頁)

結論部の話法を Conditional とする見解もまた、<其説色々>の中に含まれるべきものである。菅沼岩蔵の『初等英文典』(明治⁹₂₇) は Subj.に関する数種の文法家の言をそのまま引用紹介し、その中に Micklejohn の<The Future subjunctive, when not preceded by a Conjunction, is sometimes called the Conditional Mood. "I *should strike* him if he were to hurt the child.> (Micklejohn's English Language 第五十頁ヨリ第五十六頁マデ) がある。斎藤秀三郎は、このような文典から Conditional Mood を知ったのであろう。明治⁽¹⁸⁸⁴⁾17年に Swinton の英文法書を直訳してから、すでに16年が経過している。英文法にも時代の動きがあり、彼自身の研究も幅を増して当然である。そして日本の語学界の歩みと実状を鑑みて、古いものを一概に排除せず、新しきものを取り入れて、ここに一冊の文法書を編んだのであろうと思われる。

表 15 (154 頁) に拠ると、^(安政²)1855年頃を境にして、直説法の<Conditional Tense>は時制の範疇から消えてしまう。そして英語の Cond.は、Subj. Mood の“if”とひとまとめにされて理解されることになる。また、仮定表現に関わる Fut.Perf.の名称についても、《未来過去》《過去未来》という訳語がほとんど用いられなかったこともあって^{註 27}、明治時代の英語学においては、《仮定法》の採用以外に、Subj.の訳語に関する大きな問題は特に見当たらないようである。

第三節 独語学における《接続法》と《約束法》

1. Konj. と Kond. に関する訳語

ところが、独逸語では事情が違ふ。明治の独語学ではその最初から《約束法》の呼称のもとに Kond. が存在しているのである。

表 11 (107 頁) を見ればわかるとおり、独逸語の Modus の特徴は

①Inf. の脱落 s

②Kond. の Konj. からの分離

の二点である。英語では Pot. の訳語として明治 4 年⁽¹⁸⁷¹⁾『洋学指針 英学部』に一回だけ出てきた《約束法》と、幕末の蘭文典からの訳語《疑問法》とが、明治 5 年⁽¹⁸⁷²⁾『獨逸作文階梯』において用いられて以来、昭和 25 年⁽¹⁹⁵⁰⁾『ドイツ広文典』に至るまで、独逸語の Kond. はほぼ一貫して Modus としての独立的傾向を強く示している。

明治期の 78 冊 (これは国会図書館所蔵の文典ほぼすべてである) に大正・昭和期のもの 8 冊を加えた独文典における両者の訳語は以下の通りである。

<Konjunktiv>

- | | | | |
|---------|------------|---------|---------|
| 1. 接続法 | 2. 綴話法 | 3. 添句法 | |
| 4. 附属法 | | | |
| 5. 可成法 | 6. 可能法/可能態 | | |
| 7. 疑問法 | 8. 疑示法 | 9. 不定語法 | 10. 仮定法 |
| (大正・昭和) | | | |
| 11. 間接法 | | | |

<Konditionalis>

- | | | |
|----------|-----------|---------|
| 12. 疑問法 | 13. 約束法 | 14. 希望法 |
| 15. 期約法 | 16. 条件法 | 17. 仮定法 |
| 18. 仮設法 | 19. 許可断法 | 20. 事情法 |
| (大正・昭和) | | |
| 21. 約束話法 | 22. 非現実話法 | |

Konj. と Kond. とに分かれていることもあって、訳語の数が英語のほぼ 2 倍になるが、

表 27. 独逸語原典における Modus の構成

年号	著者	話法	直説法	命令法	約束法(非現実話法)	接続法	不定法、その他
1574(信長の頃)	Oelinger	Modus	1.indicativus	2.imperativus	3.optativus (Ach, ich hette)	4.conjunctivus (wie ich habe)	5.infinitivus
1618 (三代家光治世)	Kromayer	Modus	1.Indicativus	2.Imperativus	3. Conjunctivus		4. Infinitivus
1641 (和蘭人出島に)	Gueintz	Weise	Modus finitus		(ナ シ)		die unendige Weise (Infinitivus)
			Anzeigungsweise	Gebietungsweise (Imperativus)			
1672 (四代家綱治世)	Pudor	Weise (Modus)	1.Indicativus	2.Imperativus	3. Conjunctivus		※活用表中に Participium を含む
1754 (九代家重治世)	Aichinger	Modus od. Weise	1.die Anzeigungsweise Indicativus	2.Befehlsweise Imperativus	3.Verbindungsweise Conjunctivus		
1762 (十代家治治世)	Gottsched	Art (Modus)	1.die anzeigende Art (Modus indicativus)	2.die gebiedende Art	3.die verbindende Art		4.die unbestimmte Art (Modus Infinitivus)
					(Modus potentialis od. Optativus (mögen, können 等 を使用) にも言及)		
1782(天明 2)	Adelung	Modus	1.Indicativ	2.Imperativ	3. Conjunctiv [besser die Duvitativus (= griech. Optativ)]		4. Infinitivus ※Participium は Modus 外 (ただし 活用表中には含まれる)
1828(文政 11)	Schmitthenner	Redeform	Sprachform		Sprachform		Nennform
			1.Aussageform Indicativ	Heischform	2.Aufstellform · Conjunctiv		a) Infinitiv (Hauptfoem) b) Mittelwort (Beiform)
		a) Wunschform Optativ b) Befehlsform Imperativ					
1830(天保 1)	Bauer	Modus Aussageart die Art der Aussage	1.Indicativ	4.Imperativ	2. Conjunctiv · Vorstellungweise		※Inf. は Modus 外
					b) Conditionalis eine bedingte od. bedingende Aussage	a) eine unbedingte Aussage (Conjunctiv im engeren Sinne)	
					3. Optativus Wunschform		
1838(天保 9)	Heyse(第 5 版)	Modus Aussageweise	1.Indicativ die Anzeige = od. bestimmte Aussageweise der Modus der Wirklichkeit	3. Imperativ die Befehlsweise der Modus der (subjectiven) Notwendigkeit	2. Conjunctiv die bedingungsform die Beding = od. Abhängigkeitsweise der Mous der Möglichkeit		※Inf. と Part. は Modus 外
1864(元治 1)	Becker	Aussageform (Modus)	1. Wirklichkeitsform (Indikativ)	4. Befehlsform (Imperativ)	3. Bedingungsform (Konditionalis)	2. Möglichkeitsform (Konjunktiv)	
1870(明治 3)	Gurke	Modusform	1.Indicativ (Wirklichkeitsform)	3. Imperativ (Befehlsform)	2. Conjunctiv (Möglichkeitsform)		
1871(明治 4)	Adler (英語獨文典)	mood	1.Indicative	3. Imperative	2. Subjunctive		4. Infinitive
1878(明治 11)	Heyse(第 23 版)	Modus Redeweise od. Aussageweise	1.Indicativ die Anzeige = od. bestimmte Aussageweise der Modus der Wirklichkeit	3. Imperativ die Befehlsweise der Modus der (subjectiven) Notwendigkeit	2. Conjunctiv die bedingungsform die Beding = od. Abhängigkeitsweise der Mous der Möglichkeit		
	Kaderly	Sprachart Redeform	1.die bestimmte Redeform (Indicativ)	3.die befehlende Redeform (Imperativ)	2.die verbindende Redeform (Conjunctiv)		

(表 27-1)

年号	著者	話法	直説法	命令法	約束法(非現実話法)	接続法	不定法、その他
1882(明治15)	Schäfer	Redeweise (Modus)	1. Wirklichkeitsform Anzeigende Redeweise (modus indicativus)	3. Befehlsform (modus imperativus)		2. Verbindende Redeweise (modus conjunctivus)	
			1. (同上)	4. (同上)	3. Bedingungsform (modus conditionalis) Wunschform (modus optativus)	2. Möglichkeitsform (modus conjunctivus)	
1883(明治16)	Lehmann	Aussageweise (Modus)	1. die anzeigende Aussageweise (Indicativ)	3. die befehlende Aussageweise (Imperativ)		2. die verbindende Aussageweise (Conjunctiv)	
1884~5 (明治17~18)	Engelien	Modus Redeweise			Konjunktiv die ungewisse Redeweise a) Subjunktiv b) Konditional c) Opativ d) Konzessiv		
1885(明治18)	Wilmanns	Modus	1. Indikativ	3. Imperativ	(Konditionalform)	2. Konjunktiv (Konj. optativus を 含む)	der Modus der Nichtwirklichkeit (=非現実話法) (=Konj. potentialis)
1903(明治36)	Lyon und Polack	Aussageweise Modus	1. Wirklichkeitsform Indikativ	3. Befehlsform Imperativ	Bedingungsform Konditionalis	2. Möglichkeitsform	

(表 27-2)

Konj.の場合は《接続法》、Kond.の場合は《約束法》を以て代表的訳語と見做すことができる。共に江戸期の蘭語学からの受け継ぎであり、《接続法》は『蘭学凡』(文政7)⁽¹⁸²⁴⁾に始まり、《約束法》は、村上英俊が『明要附録』(明治3)⁽¹⁸⁷⁰⁾で、仏蘭西語の Cond.に与えた訳語である。また、《分註法》ほど独創的ではないが、《綴話法》《許可断法》のような独語学のみの訳語も幾つか見出すことができる。

表 27 (342 頁) を見ると、独逸語原典は、羅典語の術語ではなく独逸語訳の用語を使用し、しかもその数の多いことが一見してわかる。

<Conjunctiv(us) : Konjunktiv(us)>

1. Subjunctivus
2. Möglichkeitsform
3. a) Verbindungsweise ; b) die verbindende Art ; c) die verbindende Redeform ;
d) die verbindende Redeweise ; e) die verbindende Aussageweise
4. die ungewisse Redeweise
5. Beding= od. Abhängigkeitsweise
6. Vorstellungsweise
7. Aufstellform
8. (Duvitativus)

<Konditionalis>

9. Konditionalform
10. a) Bedingform ; b) Bedingungsform ; c) die bedingende Form
d) eine bedingte od. bedingende Aussage
11. a) Optativus ; b) Wunschform

和蘭語原典が専ら<Bijvoegende wijs>のような和蘭語の名称を使用したように、独逸語も、Konj.は<Verbindende Redeform><Möglichkeitsform>、Kond.は<Bedingungsform><Wunschform>等の独訳名で呼んでいる。

この点において英語(表 26 [334 頁])との相違は明らかである。英語は羅典語主義を採ったために用語のばらつきがゼロに等しいのに対し、独逸語の場合は、わずか 21 冊で Konj.に対して 14 種、Kond.に対して 7 種もの独逸語の術語が使われている。Konj.に関しては約 1,3 冊で訳語ひとつの割合になる²⁸。日本の独逸語の文法用語が、良く言えば多彩、悪く言えば不統一なのは、日本人の創意工夫もあろうが、底本とする原典の用語それ自体がこのようにもともと不統一であることに原因があろう。参照した原典ごとに術語が異なり、その異なる原語に忠実に翻訳が行なわれると、当然のことながら訳語の種類も多くならざるを得ないからである。先述の J.Grimm と父 Heyse^{ハイス}の批判もむべなるかな、である。

表 27 (342 頁) で注目すべきは Schäfer (1882) である。彼は Modus の内容に関して、従来の旧説と当時起こった新説とを併記し、新説において Kond. を Konj. から分離させているからである。表 27 (342 頁) では^(文政11)1828年の Schmitthenner からその変動が始まるが、この数年後に顕著になる時制構成の変化と歩調を合わせて、変動期の独逸語文法の姿がここにもまた現れている。

Schäfer の述べる当時の<新説>とは、意味的に言えば「神よ、～でありますように」を<Möglichkeitsform> (modus conjunctivus)、「もし～だったら～なのに / だったのに」を<Bedingungsform> (modus conditionalis) に分けることである。旧説では両者はともに Konjunktivus の下にひとつであったのである^{註29}。しかし、この新説の命脈も長くは続かず、現代では再び旧説に戻ってしまっている。

新説の区分けは、現代のドイツ語文法では Konj. の下位区分の扱いとなり、前者が「接続法第一式」、後者が「接続法第二式」と呼ばれる。これは、接続詞から見ると、前者が“daß”「～ということ」、後者が“wenn”「もし～ならば」を用いるもので、ちょうど現代のフランス語において“que”《接続法》と“si”《条件法》とが分かれているのと同じ分類を、Schäfer は独逸語で行なったことになる。和蘭語・英語・独逸語ともに、江戸から明治期にかけての文法は、Conditionalis が《接続法》から独立する傾向を示したのである。

日本の独逸学への影響から考えて、まず重要なのは Heyse と Schäfer であると言えようが、すでに幕末から日本に輸入されて学ばれた Heyse の大著 (1838) が、時制に関しては新説を展開しながら、Modus を旧説どおり三法としているのと対照的に、Schäfer は時制こそ典型的な旧時制で、Perf. を《過去》Vergangenheit のままにしているが、事 Modus に関してははっきりと、あれを旧説、これを新説と言い、両者を丁寧に比較考察している。

明治期の独逸学において、その最初から Kond. が Konj. とは別の Modus として分離独立することになった理由は、恐らく、この Schäfer<セーフェル氏>の文法書が、独逸語の草創期に一番初めに直訳されたためであろう。表 11 (107 頁) にはその直訳文典が 7 種見られるが、その筆頭が明治 13 年の多賀貫一郎訳『セーフェル氏文典直譯』であり、これはあたかも文法用語の見本市のような観を呈している。そして、本書が Kond. を認めていたが故に、和蘭語の<四法>、英語の<五法>に比して、独逸語原典の Modus が基本的には<三法>しかないにもかかわらず、明治期の独文典では<四法>となり、この傾向は、明治期を超えて大正・昭和に至るまで続くことになる。

2. 明治期の独文典における訳語

2.1. 《疑問法》

明治期の独逸語で《接続法》と言い、《可能法》と言い、《約束法》と言うものは、「もし～だったら～なのに / だったのに」の一文全体を表わす Modus である。1500 年代の独文法

の発生期はともかく、この時代の独逸語の Konj. は最早、和蘭語の《附説法》のように従属節の部分のみとか、英語の《条件法》のように仮定文の結論部だけを扱うものではない。Kond. を Konj. から分離しなかった Heyse は、“Wenn ich Geld hätte, ginge ich gern auf Reisen.”（もし今お金があつたら旅行に行くのだが）という例文において、“Wenn ich Geld hätte”（もし今お金があつたら）を<bedingender Satz>（条件を与える部分）、“ginge ich gern auf Reisen.”（旅行に行くのだが）を<bedingter Satz>（条件を付けられた部分）と呼び、両方を併せて<Conditionalis oder bedingliche Redeweise>だと言っている。それ故、<bedingter Satz>の部分だけを殊更《約束法》とするようなことは、明治期の独逸文法では見られないのが普通である³⁰。

この Konj. に関する用語で、蘭語学よりの引き継ぎは 7. 8. 9. である。7. の《疑問法》は Konj. と Kond. 双方の訳語としてそれぞれ 2 回ずつ現れるが、明治⁽¹⁸⁸⁸⁾21 年まで度々使用された英語と違い、独逸語ではその回数もわずかで、使用された年数も短い。しかも Konj. の場合、《疑問法》は正式な訳語ではなく副称にすぎず、実質的に独逸語には《疑問法》という訳語は受け継がれなかったと言ってよい。

これに類する語として 8. 《疑示法》がある。これは、9. 《不定語法》とともに高橋金一郎『獨逸文典』（明治⁽¹⁸⁹³⁾36）の訳語であるが、和蘭語の《疑問法》と同じく定義内容からの意訳で、原語は<die verbundene Redeweise>【接続話法】——ただし表 27（342 頁）中には見当たらない——である。<事実ノ真偽明ナラズ唯人ヨリ聞キ又ハ徒ニ想像スルノミニシテ語氣ニ疑ヲ含ミ若クハ希望奨誘ノ意ヲ帶ルトキ 即チ「ソーダ」「ナラン」「何々ナレバイトガ」「何々デアリタシ」等トイフトキハ er sei... 等動詞ノ変化ヲ異ニスル 此ノ如ク疑念 希望 奨誘 等ヲ帶フル>が故に、《疑示法》または《不定語法》と訳すと説明している。

2.2. 《接続法》と《可能法》

これら《疑問法》系の用語に対し、1. の《接続法》は、6. の《可能法》と並んで最も頻繁に使用され、結局現代まで生き残った術語である。表 27（342 頁）で原語の術語を見ても、幕末～明治の日本で用いられた Heyse（天保⁽¹⁸³⁸⁾9）から Lehmann（明治⁽¹⁸⁸³⁾16）までは<Verbindende Redeform (Redeweise)>か<Möglichkeitsform>のどちらかを用いている。

明治⁽¹⁸⁸⁵⁾18 年に『シェーフェル氏獨逸文法獨学』を口訳した平塚定二郎（雷鳥の実父）は、紀州和歌山の出身、明治 12 年から 15 年まで外国語学校の独逸語担当、明治⁽¹⁸⁸⁴⁾17 年当時は獨逸学協会学校の独逸語教員で 25 才であったことが判っているので、この訳書を出した時は 26 才である³¹。彼は、その二年前の明治⁽¹⁸⁸³⁾16 年、全編独逸語で『獨逸文法楷梯』を、<首として獨逸博士「ハイゼ」氏ノ文法ニ拠ルト雖モ 間又「ベッケッル」「ハイデルベルグ」「グルケ」諸氏ノ文法ヲ引用シ>て書いたが³²、17 年の『シェーフェル文典』の翻訳

をはさんで、翌々⁽¹⁸⁸⁶⁾19年、今度は和文で『獨逸文法楷梯説明』を出版する。そして16年版の<Conjunctiv>と<Modus der Möglichkeit>のうち、この時は前者が《接続法》として訳出された。もし後者を選んでいれば、これこそがもうひとつの主要な訳語《可能法》となっていたはずである。

《可能法》《可成法》は本来、can と may を用いる英語の<Potential mood>に対する訳語である。『和蘭語法解』の底本の執筆者と思われる Peyton の英文典には、<The Potential expresses the aktion of the verb by power ; as I can or may go.>と説明されている(1776、103頁)。表8(86頁)に拠ると、《可成法》の初出は慶応2年⁽¹⁸⁶⁶⁾『英吉利文典字類』、《可能法》は明治8年、プリンクリの『語学獨案内』である⁽¹⁸⁷⁵⁾註33。このPot.は江戸期の文典である『和蘭語法解』と『英文鑑』⁽¹⁸⁸¹⁾においては《許可法》と呼ばれ、明治21年まで用いられたが、第二次洋語ブーム[第二章第二節2.(194頁)]の起こった明治16年頃⁽¹⁸⁸³⁾から《可成法》への移行が始まる⁽¹⁸⁸³⁾註34。そして、ブームの頂点である20~21年以後、Pot.は専ら《可成法》に定まった。同じ時期に《可能法》の使用も始まるが、これは、《可成法》の後を受ける形で、英文典界がNesfieldに切り替わった年代に一般化している。表8(86頁)では明治34年⁽¹⁹⁰¹⁾『英文典問答』以降である⁽¹⁹⁰¹⁾註35。

しかし、この《可能法》は、英語よりも独逸語における文法用語として一般化した。<Möglichkeitsform>に関する訳語としてであるが、そこでは2種類の用いられ方をされている。即ち<Möglichkeitsform>は、Kond.がKonj.から分離したSchäferの<新説>では「要求話法」(~であるように)を指し[APPENDIX No.39(3)]、他方、分離していないKaderly⁽¹⁸⁷⁸⁾、Gurke⁽¹⁸⁷⁰⁾、Heyse^(1838; 1878)等の<旧説>では、これはKonj.全体を意味するからである。そして日本でも、独逸語の《可能法》はKonj.そのものを意味する訳語となる。

表11(107頁)で見ると、独逸語における《可能法》の初出は明治27年⁽¹⁸⁹⁴⁾『獨逸文法教科書全』(大村仁太郎・山口小太郎・谷口秀太郎合著)である。以後、この2種類の訳語が専ら世に行なわれ、かなり紛らわしかったらしく、昭和6年⁽¹⁹³¹⁾『自修新ドイツ文典』(山田幸三郎)には次のような記述がある。

固有のドイツ語で Möglichkeitsform(可能法)といふは、ラテン語からの由来語 Konjunktiv(接続法)を意味の上から譯して作りたる語にして、日本語に二種の譯語ありて紛らはしきも此の為である。(366頁)

ところが、明治の英語学における《可能法》は、<if>のSubj.ではなくPot.に対する訳語であったので、同一用語の表わす内容が英・独間で相違していることは、すでに触れたとおりである。結局、この《可能法》は独逸語でも戦後廃れてしまい、蘭語学以来の《接続法》が使用されて現在に至っている⁽¹⁹³⁶⁾註36。

2.3. 《許可断法》《添句法》《事情法》

しかし、蘭語学のような独創的な創出術語は、独語学には存在しないようである。唯一、18.《許可断法》がそうだと言え言えるかも知れない。が、この文庫本大の本書の著者はその名称の由来については何も語らず、動詞活用表の最後にこの用語と活用が書かれているのみである^{注37}。

3.《添句法》と 19.《事情法》は、渡辺修二郎（『初学自修獨逸語速成』(明治¹⁹⁰³36)）の用語である。《添句法》については、<添句法即ち Konjunktiv は……或る事情、仮説、又は併発事項を附述する為に、多く接続詞を以て本句の前若くは後に他の語句と添接するを云ふ>(143頁)という脚註がある。即ち《接続法》の1バージョンである^{注38}。

他方、《事情法》には何の説明もなく成立理由は不明である。この人が Kond.を《事情法》としたのは<或る事情、仮説…>云々の部分から採ったのかも知れない。

2.4. 《綴和法》《期約法》

2.の《綴和法》もまた、「文を綴り合わせる」という意味の verbinden 系の術語に対して考えられた訳語であり、蘭・英からの受け継ぎではない。

この出典は明治¹⁸⁸⁰13年の多賀貫一郎訳『セーフエル氏文典直譯』であるが、この文法書はまるで訳語の見本市である。当書における Konj.の正式な訳語はあくまでこの《綴和法》であり、《疑問法》が括弧付でそれに副えられている。が、別の箇所では《接続法》もまた用いられている。

しかし、多賀は、当時用いられていた用語をただ単に例示しているわけではない。Kond.に対する多賀の訳語は、《約束法》《希望法》《期約法》であるが、第三十八章<動詞ノ変画ノ例>では、Kond.が Konj.から分離していない<古式>では、Konjugation は《直説法》と《接続法》(=Konj.)の二種で以て示される。ところが、Kond.が<Bedingungsform>として分離して Konj.が要求話法を意味する<Möglichkeitsform>となった<新式>においては、動詞活用表は《直説法》、《可成法》(=Konj. : Möglichkeitsform)、《期約法(又ハ約束法)》(=Kond. : Bedingungsform) の名の下にその変化形を提示するのである。つまり、本書が訳語のバラエティーに富んでいるのは、Modus の<古式>と<新式>を訳し分けるために必要であったからだと考えられる。

3. 《約束法》について

3.1. 《約束法》の問題点

Kond.の主要な訳語となったのは《約束法》である。この訳語自体は、幕末～明治初年

の仏蘭西語学（村上英俊『明要附録』明治⁽¹⁸⁷⁰⁾3）に発するものである。明治⁽¹⁸⁹⁴⁾27年には《條件法》も現れるが、これは現在では仏文法系の用語となり、独逸語では専ら《約束法》が用いられている^{註39}。

この〈約束〉に対する原語は、和蘭語の voorwaalde、仏蘭西語の condition、英語の condition、独逸語の Bedingung である。江戸期の主な字書類を繰ってみると、次のような意味を見出すことができる。

- 『訳鍵』（文化⁽¹⁸¹⁰⁾7）坤 ：切實。直誠。盟約 (265 裏)
 『和蘭文典字類』後編（安政⁽¹⁸⁵³⁾3）：約束 (86 裏)
 『佛語明要』一（元治⁽¹⁸⁶⁴⁾1） ：性質。貴サ。約。有サマ (76 裏)
 conditionnel 言イ固メシ
 『和英対訳譯袖珍辞書』（慶応⁽¹⁸⁶⁷⁾3）：取極 (s 76 裏)
 conditional 取極ノ

これを見ると、〈約束〉という語は、安政⁽¹⁸⁵⁶⁾3年の飯泉士讓『和蘭文典字類』に発すると言えそうである。『和蘭文典字類』は、あの有名な和蘭語テキストの定番である *Grammatica* のための単語集であるから、〈約束〉の語を受け継いだ《約束法》は、幕末の和蘭語学習から生まれた文法用語だということになる。これらの字書類の意味の核心部分は〈盟約〉〈約束〉〈約〉〈取極^{とりきめ}〉で、これが、《假定》《条件》になる以前に日本人が *Modus Conditionalis* に与えた解釈であった。

しかし、この〈約束〉という語は、当時からすでに誤解されやすい文法用語であったらしい。寄山元吉は、明治⁽¹⁸⁹¹⁾24年『獨逸学捷徑』で、独逸語の《約束法》に関して次のようなことを述べている。

約束法ナル語ニ就テハ人ト約束デモ為シタルガ如キ思考ヲ懐ク者甚少カラズ是レ他ナシ説明ノ宜キヲ得サルニ因ルナリ (第四十六教)

「もし～だったら～だろうに/だったら」という仮定の〈条件〉を、〈約束〉という言葉で表現したのであるが、それが、日常の〈明日何時に…〉風の「約束」の語感に引き摺られて一般に解りにくかったのである^{註40}。村上英俊がこの用語を採用した理由は、和蘭語を学んだ当時の洋語学習者の間で、これが使われていたからであろう。

しかし、日本人の《約束法》に関する問題は、この訳語の不穏当さよりも、むしろ次の点にあった。即ち《第二未来(過去未来)》[=未来完了]と【第二約束法】[=接続法第Ⅱ式]の区別の難しさである。さらに寄山は言を続ける。

第二未来ト第二約束法トノ区別ハ世人一般ニ困難ナリト云フト雖モ決シテ困難ナル

モノニ非ズ 其困難ヲ生ズル所ハ世情一般ノ譯ノ悪シキニアリ 第二未来モ亦已ニ説明セル約束法ノ如ク我等日々用フル所ノ語ナリ 例エハ (余ハ此手紙ヲ書キテシマツタナラバ。君ト散歩ニ行キマス) ノ如シ 之ヲ獨逸語ニ反譯スレハ Wenn ich diesen Brief geschrieben haben werden, so werde ich mit Ihnen spazieren gehen ト云フ可シ 亦タ之ヲ世上一般ノ風ニ準ヒ直譯スレバ (我レガ此ノ手紙ヲ書キタデアロウナラバ。君ト散歩ニ行クデアロウ) ト云フ 其 (書キタデアロウ) ナル語ハ日々用ユル日本語ニ非ス 此ノ如キ譯ヲ附スルヲ以テ第二未来ヲ解得スル困難トナルナリ 故ニ第二未来ハ困難ナリ約束法ト區別シ難キナゾト云フ者ハ我ガ邦語ヲ顧慮セサルモノト云ハサル可カラス (第四十七教)

(未来完了《第二未来》と仮定法過去【第二約束法】を区別するのは難しいとよく言われるけれども、そんなことは決してない。難しくなる原因は、要するにその訳し方が悪いからである。未来完了も、仮定法同様、我々は常日頃から使っているもので、...例えば「余ハ此手紙ヲ書キテシマツタナラバ。君ト散歩ニ行キマス」というような言い方のことであり、ドイツ語では<Wenn ich diesen Brief geschrieben haben werden, so werde ich mit Ihnen spazieren gehen>となる。これを現代の一般的な「直訳」に直すと、「我レガ此ノ手紙ヲ書キタデアロウナラバ。君ト散歩ニ行クデアロウ」と言うことになるが、この「書キタデアロウ」などという言い方は日常用いる日本語ではない。こんな訳を付けるから、未来完了が理解困難になってしまうのである。未来完了と《約束法》は区別がつかないなどと言う者は、だから、日本語のことをよく考えないからだとしか言いようがない。)

独逸語の《第二未来》は<ich werde geschrieben haben>、【第二約束法】は<ich würde geschrieben haben>である。一方が推量未来、一方が非現実仮定を表わす Konditionalis であるが、これを当時の「直訳」法で訳すと、<werde>と<würde>は共に<書キタデアロウ>という、全く同じ表現になってしまい、両者間の相違を示すことができなくなってしまう。<故ニ第二未来ハ困難ナリ約束法ト區別シ難キナゾト云フ者ハ我ガ邦語ヲ顧慮セサルモノト云ハサル可カラス>と、寄山は断じている^{註41}。

3.2. 《未来過去》と《過去未来》

加えて、Konj.と関係するこの《第二未来》もまた、明治期においては《未来過去》とも《過去未来》とも呼ばれ、その呼称自体が、《約束法》同様問題視された。しかも、その問題点を生じさせたのは独逸語であった。即ち、この<Fut. II> または<Fut.Perf.> という時制を、英語学は《未来過去》と呼んだが、独逸学はその語順を逆転させて《過去未来》にしてしまったからである。

表 17 (195 頁) および表 19 (208 頁) に拠ると、《未来過去》の使用は英語 3 例・独逸語 7 例、《過去未来》は英語 0・独逸語 8 例であり、専ら独逸語において用いられたものであることがわかる。しかし、未来時制に関する独逸語の術語は、主に<Zukunft> 《未

来)・<Vor-zukunft>【前未来】ないしは<Futur(um)>・<Futur(um) exactum>《綿密未来》が使用されており、《未来過去》《過去未来》に対応する原語は見当たらない。つまり、これらは一種の意識なのである^{註42}。

では、蘭語学からの引き継ぎであろうか。表 16 (161 頁) に全く同じ用語を見出すことはできない。中野柳園が《未来ノ過去》と訳しているが、彼の用語は前期蘭語学で途切れてしまい、また、時代的にも離れすぎている。可能性のあるのは、小関三英の断片と『英文鑑』に見られる《過了未来》である。ともに <de tweede toekomstige tijd>《第二未来》(『英文鑑』には<The second future>も併記) を直訳せず、《過了未来》と意識している。『英文鑑』には《未来中ノ過去》と正しく分註されており(上編卷ノ六・六)、この《過了未来》と《未来中ノ過去》が《過去未来》と《未来過去》に最も近い術語である。

明治の英語学における《未来過去》の初出は、明治⁽¹⁸⁸⁴⁾17年の斎藤秀三郎である。斎藤の訳した Swinton 文典の用語は<future-perfect>であるから、これはほとんど原語の直訳と言ってよい。ところが、独逸語はこれを逆転させて《過去未来》とした。明治⁽¹⁸⁸⁰⁾13年の多賀貫一郎の直訳は<Fut. II>に対し4種類もの訳語を与えたが、その中のひとつが《過去未来》である^{註43}。

この《過去未来》を詳しく解説しているのは、平塚⁽¹⁸⁸⁶⁾定二郎『獨逸文法楷梯説明』(明治19)である。

過去未来ハ一未来ノ時アリ其時ノ来ル迄ニハ他ノ未来ノ時ハ既ニ終ルヘキコトヲ云ヒ顯ハスモノナリ 故ニ過去未来ヲ用フルハ二個ノ未来ノ時ヲ比シ一ツノ未来ノ時ヨリモ⁽⁵⁾前キニ他ノ未来ノ時⁽⁷⁾過去ヘキコトヲ云ヒ顯ストキナリ 一ツノ未来ノ時ニ達スル迄ニハ他ノ一ノ時ハ既ニ過去トナルト云フノ意ニ出タルモノナリ……故ニ過去未来ハ通常ノ未来ヨリモ現在ニ近キモノトス 即チソノ一例ヲ示サンニ今發話ノ時ハ恰モ一月ナリ当時發話者ハ病氣ナリ然レドモ二月中ニハ全快ノ見込アリ四月ニハ桜花開クヘシ 此三個ノ時ヲ相互ニ關係セシメテ「桜花開クデアロウトキニハ私ガ病氣全快シデアロウ」ト云ヘハ桜花云々(四月)ハ未来ナルヘク私ガ病氣云々(二月)ハ過去未来ナルヘシ 即チ一月ヨリ云ヘハ四月モ二月モ未来ニアレドモ四月(未来)ニ至レハ二月(過去未来)ハ既ニ過去トナルヘシ 即チ

○現在

○過去未来

○未来

一月發話ノ時

二月全快ノ時

四月開花ノ時

ナリ 故ニ過去未来 現在ニ近シト云フ

(第十一章・乙)

この書は、平塚が素ト自家ノ生徒ニ教授スルノ際毎ニ之ヲ筆記シ歲月^{じんげん}往再積テ一巻ヲナスニ至>ったものである(岡田 種^{しゅ}の序文)。彼は、この<相反対ノ意義アル文字ヲ合併

シ甚ダ解シ難キ>時制を、実際このように講義したのであろう。他の5時制のどれよりも多く、平塚は《過去未来》のために説明の筆を採っている。それだけこの時制は理解が難しかったということである。誤解の実例として、これは英文典であるが、明治⁽¹⁸⁸⁶⁾19年の『文法詳解ブラウン氏英文法釈義』(澤田重遠義訳)を挙げることができる。この書は、《第二未来》のことを<既ニ記サレタル或ル未来ヨリ一層後ニ起ルベキトコロノ者ヲ顕ハス時限ナリ>(103頁)のように説明している^{註44}。

独逸語においては、このように、Kond.に関わる《約束法》と《過去未来》が、両者ともに問題をはらんだ術語であった。加えて、「直訳」という当時の<世情一般ノ譯ノ悪シキ>が故に<第二未来ト第二約束法トノ區別ハ世人一般ニ困難ナリ>という語学教育上の問題まで生じさせたのである^{註45}。

3.3. 《約束法》の温存

この《約束法》は結局、明治⁽¹⁸⁷²⁾5年『獨逸作文階梯』に採られて以来、Kond.に関する主要な訳語として、明治を越えて昭和に至るまで存続することになる。

ところが、表27(342頁)を見ればわかるとおり、独逸語原典においてKonj.からKond.を明らかに分離させているのはBecker⁽¹⁸⁶⁴⁾とSchäfer⁽¹⁸⁸²⁾のふたりしかいない。Konj.の下位区分としてKond.を認めているSchmitthenner⁽¹⁸²⁸⁾とBauer⁽¹⁸³⁰⁾を含めてもわずかに4名である^{註46}。それにもかかわらず、独逸語の原書がKond.をModusとして再び認めなくなった後も、日本の独文典は《約束法》を温存させていく。

確かに、日本の《約束法》も、必ずしも独立した一法とは認められなくなる。例えば、明治⁽¹⁹¹⁰⁾43年『獨逸新文典』(三瀧信三・多久安美共著)は、《約束法》をひとつのModusとして認めていない。

此等三種ノ説話法ノ外ニ別ニ約束法(又ハ假定法)(Konditionalis)ヲ一個獨立ノモノトシテ掲グル書アレドモ吾人ハ之ヲKonjunktivノ一種ニ過ギズトスル多数ノ説ニ從イ茲ニハ論述セズ、其變化ノ如キモKonjunktivノ變化ヲ示セシ項中ニ一括シ置キタリ。
(下巻、432-433頁)

しかし、こう言いながらもこの書は《約束法》を排除することなく、直説・可能(=Knoj.)・命令の次に《第一約束法》《第二約束法》の説明を施しているのである^{註47}。表11(107頁)で番号の付されていないものがModus外の《約束法》である。独逸本国では結局認められなかったKond.であるのに、日本ではこのように、時に名称はありながらModusからは外されるという中途半端な扱いを受けながらも、とにかく昭和⁽¹⁹⁵⁰⁾25年『ドイツ広文典』の《条件法》まで、<Modus Konditionalis>は続いている。

独語学の草創期にSchäfer文典の<新説>が「直訳」されたことの影響は決定的であ

った。以後、<Konditionalis>という Modus と《約束法》という訳語は、この Modus が原典から消滅してもなお日本の文法書中に長く受け継がれた。原書にはなくて日本の文法書には在るというのは、創出術語の豊富な蘭語学ならともかく、原典忠実主義の明治期の洋語学には珍しい現象である。

しかし、この Konj. と Kond. が分離した Schäfer の文典を以てその歩みを始めたが故に、最初期の独語学は英語にはない翻訳の労苦を経験しなければならなくなる。即ち、動詞活用一覧表におけるこの二説話法の訳し分けの問題である。

第二十八章では Kond. は《約束法 又 希望法》と訳されている。<新式>の<Wunschform (Modus Optativus)>に対する訳語が《希望法》であり、これが動詞活用表では《期約法》の用語に替わっている[APPENDIX No.40(3) (454 頁)]。

Schäfer が § 28 にて提示している<古式>と<新式>の Modus は、以下のようになっている

a. 古式

1. 現在法即ち直説法、2. 綴話法 (疑問法)、3. 命令法

b. 新式

1. 直説法、2. 綴話法 (疑問法)、3. 約束法又希望法 [動詞活用表では《期約法》]

4. 命令法 [同上]

(訳語は多賀貫一郎の直訳より)

<新式>の《綴話法 (疑問法)》が、現代文法で言う「接続法第一式」の要求話法で、《約束法又希望法》が「接続法第二式」の非現実話法である。これに従って、<動詞ノ変画>一覧表もまた、形態的時制表示をする<古式>の《接続法》から、形態的には《半過去》でも内容的には「現在」を表わすという点を考慮して、《半過去》と、そして同様の理由で《大過去》をも欠いた<新式>の《可成法》《期約法》に変質する。これに対し、多賀は<カシ>という「願い仮名」を以て《可成法》の対訳和語とし、一方《期約法》には<有ロウ><アロウガ>を充てて、この用法が反実仮想であることを訳し出している。Schäfer の意図をよく理解した誠に的確な直訳法と言える。

この<カシ>は第三十九章の《不規則働辞》の基本形にも使われ、例えば<können> (=can) の《接続法半過去》<könnte>は、下図のように<得シガシ>となっている。

<得シ>は直説法過去に対する対訳和語であるから、これは、いわば<古式>に則った

不定法	直説法ノ 現在	直説法及ビ接続法 ノ半過去		命令法	過去ノ形状法 即ち分辞
können	kannst, kann	konnte	könnte	könne	gekonnt
得ル	得ル	得シ	得シガシ	得ヨ	得タル

(ドイツ語は筆者)

訳法であり、多賀の〈新式〉に従って仮に造語すれば、《期約法現在》「得ルデアロウガ」になるべきところである。多賀のこの訳法は、本文こそ難解極まる直訳であるが、その内実は非常によく考え抜かれたものである。

この観点から改めて多賀貫一郎の

Ich sei : 私ガ有レガシ
 Ich wäre : 私ガ有ロウ
 Ich würde sein : 私ガ有ルデアロウガ

のような Konjugation の翻訳を見ると、その労苦が思い遣られる。Modus に関する新説を取り上げたため、Schäfer の動詞活用表 (Konjugation) は結局、Konj.ひとつのものと、それが《可成法》(=接続法第1式)と《期約法》(=接続法第2式)とに分離しているものとの2種類になっている。もし〈新式〉の《可成法》と《期約法》の意味を訳し分けようとした場合、下の表 28 の〈古式〉のように、例のあの「直訳」通りの〈アリ〉〈アリシ〉〈アツタリシ〉の踏襲になってしまったとしても、むしろそれが当然なのである。事実、直説法の場合はそのまま「直訳」に従っている。それなのに〈新式〉の動詞活用表に関しては、多賀はそうしなかった。“Ich wäre” に対し、〈私ガアリシガシ〉ではなく、〈私ガ有ロウ〉という対訳和語を、多賀は新たに〈新式〉のために与えたのである。

そもそも、動詞の活用形のみを羅列である一覧表を訳するなど無謀な行為と言うべきである。しかし、江戸～明治期の人々はそれを行なわなければならず、また、実際に行なったのであった。すでに蘭語学の最初期に、あの和漢の学に通暁した中野柳圃がこれに類することを実行している。これは、夥しい英単語を日本語に移し変えることなく、片仮名の

	〈古式〉接続法		〈新式〉可成法		〈新式〉期約法	
Ich sei	1.現在	私ガアレガシ	現在	私ガアレガシ		
Ich wäre	2.半過去	私ガアリシガシ			現在	私ガ有ロウ
Ich sei gewesen	3.過去	私ガアツタガシ	過去	私ガアツタガシ		
Ich wäre gewesen	4.大過去	私ガアツタリシガシ			過去	私ガ有ツタロウ
Ich werde sein	5.未来	私ガアルデアロウガシ	未来	私ガアルデアロウガシ		
Ich werde gewesen sein	6.過去未来	私ガアツタデアロウガシ	過去未来	私ガ有ツタデアロウガシ		
Ich würde sein					未来	私ガ有ルデアロウガ
Ich würde gewesen sein					過去未来	私ガ有ツタデアロウガ

表 28. 〈旧式〉と〈新式〉の対訳和語対照表

まま、むやみやたらと乱用する現代よりも、よほど真摯な態度と言うべきであろう。

寄山元吉は、外国語学習不進歩の原因を<英書ヲ修学スルモ其風論孟ヲ素読スルニ異ナラズ>という学習法にあると嘆いた（序章2. [3-4頁]）。たとえ不完全であろうとも、若干不自然な和訳であろうとも、原書から抜き出した動詞活用一覧表を何ほどの訳も施さずそのまま学習者の前に投げ出すよりは、願望・反実仮想表現の何がしかのニュアンスが、これを見た者には伝わったのではないだろうか。

表 29. 江戸及び明治期の蘭・英・独文典における Conj./Subj. の訳語変遷表

年号	書名	Kond.																									
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	
Subj. の訳名		分注 法注 法	死 語 法	希 説 法	附 説 法	接 続 法	承 起 法	附 属 法	接 説 法	未 定 様	虚 構 法	疑 示 法	疑 説 法	疑 問 法	疑 惑 法	綴 話 法	可 成 法	不 定 法	仮 定 法	可 能 法	間 接 法	約 束 法	希 望 法	期 約 法	條 件 法	非 現 実 話 法	
1777(安永6)以後	蘭学生前父																										
(天明?)	柳圃先生助詞考																										
(寛政?)	柳圃中野先生文法																										
	三種諸格																										
	作文必要訳書須知 属文錦囊	○																									
	九品詞名目	○																									
1805(文化2)	四法諸時対訳		○																								
1807(文化4)	蘭語九品集		○																								
1811(文化8)	和蘭文学問答		○	○																							
1812(文化9)	九品詞略	○																									
1814(文化11)	和蘭文範摘要	○																									
	訂正蘭語九品集	○	○																								
	魯語文法規範									◎																	
1815(文化12)	オランダごほうげ 和蘭語法解(英?)				○ (△)																						
1815~22 (文化12~文 政5)の間	和仏蘭対訳語林		○																								
1824(文政7)	蘭学凡					○																					
(文政?)	和蘭属文錦囊抄	○																									
(文政?)	小関三英の断片三葉										○																
(文政11~12?)	繙巻得師草稿 (国会図書館本)				○																						
1840(天保11)	英文鑑 ^{かがみ}										○ (虚構様)																
(安政?)	四格十品弁解				○																						
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	

○蘭文典
◎露語文典
■仏文典
▲英文典
★独文典

(表 29-1)

年号	書名	Subj. の訳名	Kond.																								
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
			分注 法	死語 法	希説 法	附説 法	接統 法	承起 法	附屬 法	接説 法	未定 様	虚構 法	疑示 法	疑説 法	疑問 法	疑惑 法	綴話 法	可成 法	不定 法	仮定 法	可能 法	間接 法	約束 法	希望 法	期約 法	条件 法	非現 実
1885(明治 18)	無類捷徑英学童子解								▲																		
1886(明治 19)	文法詳解ブラウン氏英文典 積義 [澤田重遠]								▲																		
	ピ子ヲ氏英文典(全) [玉井靖三郎]																			▲							
	獨逸文法楷梯説明(前篇)						★																				
1887(明治 20)	イングリッシ文法主眼						▲																				
	ソンメール氏佛文典直訳								■																		
	獨文組立法						★																				
1888(明治 21)	スウキントン氏英文典直訳 [伴野乙弥]														▲												
	ス井ントン氏ニューランゲ ーレッスンズ直訳 [石川録太郎]																				▲						
1889(明治 22)	須因頓氏大文典講義 [平井広五郎]						▲		▲																		
1891(明治 24)	獨逸学捷徑(全)						★														★		★				
1893(明治 26)	英文典 [チャムブレ]						▲																				
1894(明治 27)	実験英文典教科書						▲																				
	シェーフェル文典解釈(上 下) [嶋約 翰]	旧 説					★																				
		新 説					★																	★	★		★
	獨逸文法教科書(全)						★														★						
																					(Kond.)						
1896(明治 29)	新式英文典教科書						▲																				
1897(明治 30)	新撰獨修 獨逸文法指針 (上下)						★																	★			
1898(明治 31)	邦文英文典[嶋文次郎]						▲																				
	邦語英文典[畔柳都太郎]						▲																				
1899(明治 32)	英文典教科書 [王堂シャムブレ]						▲																				
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25

(表 29-3)

5) Unpersönliche Zeitwörter (verba impersonalia) sind solche, die eine Thätigkeit ausdrücken, welche ohne ein bestimmtes Ding (Subjekt), von dem die Thätigkeit ausgeht, gedacht wird. Das thätige Ding wird alsdann als ein ganz unbestimmtes durch das Formwort „es“ bezeichnet.

B. V.: Es donnert, regnet, schneit, hagelt, blizt.

II.

Die Zeiten (Tempora), die Redeweisen (Modi), das Personen- und Zahl-Verhältnis des Zeitwortes.

§. 27.

1) Durch das Zeitwort wird nicht allein die Thätigkeit eines Dinges (einer Person oder Sache) ausgedrückt, sondern es wird auch außerdem durch dasselbe bezeichnet:

- a. ob die Thätigkeit wirklich oder nicht wirklich ist;
- b. ob die Thätigkeit jetzt geschieht, schon geschehen ist, nach geschehen wird;
- c. ob die Thätigkeit von einer oder von mehreren Sprechenden, angesprochenen oder besprochenen Personen (Sachen) ausgesagt wird.

2) Es wird also auch durch das Zeitwort ausgedrückt:

- a. die Weise der Thätigkeit (das „Wie?“) — Redeweise (Modus);
- b. die Zeit der Thätigkeit (das „Wann?“) — Zeit (Zeitform, Tempus);
- c. das Ausgehen der Thätigkeit („von Wem?“) — Personen- und Zahl-Verhältnis.

B. V.: a. Dort kommt der Vater. Dein Bruder komme!

b. Ich schlafe, ich habe geschlafen, ich werde schlafen.

c. Ich schreibe, du schreibst, er schreibt; wir schreiben, ihr schreibt, sie schreiben.

§. 28.

Die Redeweisen (Modi)

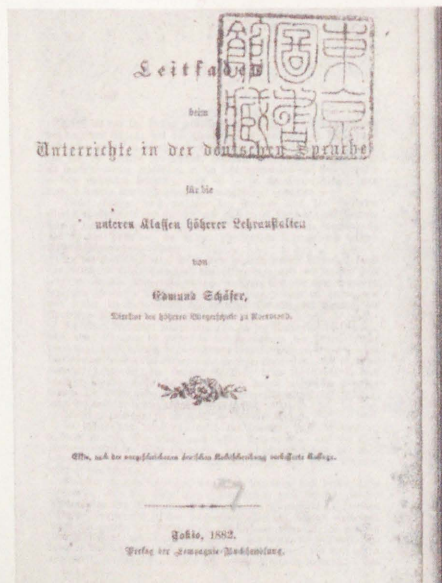
Man kann die Thätigkeit eines Dinges im allgemeinen als wirklich oder nicht wirklich aussagen. Eine nicht wirkliche Thätigkeit kann als möglich, als wirkliche angenommen, als notwendig dargestellt werden. Diese verschiedenen Weisen, eine Thätigkeit auszudrücken, nennt man Redeweisen (Modi), welche teils durch Biegung des Zeitwortes, teils durch besondere Formwörter (Hülfszeitwörter, §. 37) bezeichnet werden.

a. Frühere Ansicht.

1) Die Redeweise, durch welche der Redende anzeigt, daß eine Thätigkeit wirklich ist (war oder sein wird), nennt man Wirklichkeitsform oder anzeigende Redeweise (modus indicativus).

B. V.: Die Sonne scheint. Das Kind schläft fest.

3*



(明治15)
資料 90. 1882年、東京で出版された Schäfer 文典

<Redeweise> (=Modus) に関する旧説と新説とが述べられている部分。新説において<Bedingungsform>が新たに設けられた。

2) Die Redeweise, durch welche der Redner andeutet, daß eine nicht wirkliche Thätigkeit möglich oder als wirklich angenommen ist, heißt verbundene Redeweise (modus conjunctivus), weil die in derselben gebrauchte Thätigkeit nie allein, sondern immer in Verbindung mit einer anderen, ausgedrückten oder hinzugedachten Thätigkeit vorkommt.

Z. B.: Gebe Gott, daß er sich bessere. (Gäbe Gott), daß doch alle Menschen den Weg der Tugend wandelten. Wenn du fleißiger gewesen wärest, hättest du bedeutendere Fortschritte gemacht.

3) Die Redeweise, durch welche der Sprechende bezeichnet, daß eine nicht wirkliche Thätigkeit notwendig ist (oder: die Redeweise, durch welche der Sprechende bezeichnet, daß er etwas will oder befehlt), heißt Befehlsform (modus imperativus).

Z. B.: Sei aufmerksam! Liebe die Eltern und gehorche ihnen!

Anmerkung 1. Die Form, welche das Zeitwort hat, wenn es bloß genannt wird, die man deshalb auch wohl Nennform nennt, kann wegen der Allgemeinheit ihrer Bedeutung (weßhalb sie auch im Lateinischen „modus infinitivus“, d. i. „unbegrenzte Redeweise“ genannt wird) nicht als Redeweise betrachtet werden. Weil sie entweder als Subjekt oder Objekt steht, also das Wesen eines Dingwortes hat, so nennen wir sie Dingform. (Siehe dieselbe, S. 32.)

Anmerkung 2. Nach der neueren Ansicht der deutschen Sprache wird die verbundene Redeweise oder der Konjunktiv getrennt, indem der Konjunktiv der dauernden und vollendeten Gegenwart und Zukunft (also: Praesens, Perfectum Futurum I u. II), der nur Mögliches enthält, als eigentlicher Konjunktiv (Konjunktiv im engeren Sinne) bezeichnet wird.

Der Konjunktiv der dauernden und vollendeten Vergangenheit (Imperfect und Plusquamperfect) aber und die Umschreibung durch „würde“, welche gebraucht werden, wenn eine nicht wirkliche Thätigkeit als wirklich angenommen wird, heißt dann Bedingungsform und auch Wunschform (modus conditionalis, modus optativus).

So wird aus dem Konjunktiv Imperfekt = die bedingte Gegenwart; aus dem Konjunktiv Plusquamperfecti = die bedingte Vergangenheit; aus der Umschreibung mit „würde“ = die bedingte Zukunft.

Für solche, welche diese Trennung beizubehalten wünschen folgt hier unten eine entsprechende Auseinandersetzung, so wie auch in den Konjugations-Mustern darauf Rücksicht genommen ist, indem S. 33 doppelte aufgeführt ist.

b. Neuere Ansicht.

1) Die Redeweise, durch welche der Redende anzeigt, daß eine Thätigkeit wirklich ist (war oder sein wird), nennt man Wirklichkeitsform (modus indicativus).

2) Die Redeweise, durch welche der Redende anzeigt, daß eine nicht wirkliche Thätigkeit möglich ist, heißt Möglichkeitsform (modus conjunctivus).

Z. B.: Der König lebe! Das verhüte der Himmel! Ich hoffe, daß er komme.

3) Die Redeweise, durch welche der Sprechende andeutet, daß eine nicht wirkliche Thätigkeit als wirklich angenommen wird, heißt

Bedingungsform (modus conditionalis), auch Wunschform (modus optativus).

Z. B.: Wenn du fleißig gewesen wärest, würdest du mehr wissen.

4) Die Redeweise, durch welche der Redende andeutet, daß eine nicht wirkliche Thätigkeit notwendig ist, und deren Wirklichkeit er will oder befehlt, heißt Befehlsform (modus imperativus). (Das Weitere siehe S. 68.)

Anmerkung. Einige Zeitwörter, die sowohl bezüglich als unbezüglich, und zwar bei letzterer Bedeutung eine Bewegung nach oder von einem Orte ausdrücken, haben natürlich in der einen Bedeutung „haben“, in der anderen „sein“. B. V.: Ich habe ihn geflohen (so viel als „gemieden“). Ich bin ins Anstalt geflohen. — Ich habe heute die Herrschaft nach Bingen gefahren. Die Herrschaft ist heute nach Bingen gefahren. — Ist bei diesen unbezüglichen Zeitwörtern der Bewegung die Richtung nach einem Orte nicht angegeben, so steht auch „haben“. B. V.: Ich habe den ganzen Tag gelaufen.

3) Die Zukunft, Vorzukunft und die Leidesform. — Futurum I, Futurum II und Passivum — werden mit Hilfe des Zeitwortes „werden“ gebildet.

Anmerkung. Die Hilfszeitwörter sind manchmal nicht Formwörter, sondern wirkliche Begriffswörter. B. V.: Es ist (existiert) ein Gott. Ich habe (besitze) ein Haus. Aus dem Kerne wird (entsteht) ein Baum.

Beispiele

der Verbindungsform (der Konjugation).

§. 38a.

I. Das Hilfszeitwort „sein“.

Wirklichkeitsform. Indikativ.	Verbundene Redeweise. Konjunktiv.
Gegenwart (Praesens).	
Ich bin du bist er ist wir sind ihr seid sie sind.	Ich sei du seiest (seiest) er sei wir seien ihr seiet sie seien.
Mitvergangenheit (Imperfectum).	
Ich war du warst er war wir waren ihr wäret sie waren.	Ich wäre du wärest er wäre wir wären ihr wäret sie wären.
Vergangenheit (Perfectum).	
Ich bin du bist er ist wir sind ihr seid sie sind	Ich sei du seist er sei wir seien ihr seiet sie seien
} gewesen.	} gewesen.

資料 92. Schäfer 文典における動詞活用表 <古式>の例

旧来の“sein”の活用表である。表の左側が<Wirklichkeitsform> (=Indikativ)、右側が<Verbundene Redeweise> (=Konjunktiv)で、左側には接続法 1 式と 2 式が<Verbundene Redeweise>のまま混在している。

時制は典型的な旧時制で、Imperf. (ich war/wäre) が<Mitvergangenheit>【共時過去】、Perf. (ich bin gewesen/sei gewesen) が<Vergangenheit>《過去》になっている。

Wirklichkeitsform. Indicativ.		Verbundene Redeweise. Konjunctiv.
Vorvergangenheit (Plusquamperfectum).		
Ich war du warst er war wir waren ihr wäret sie waren	}	gewesen.
		Ich wäre du wärest er wäre wir wären ihr wäret sie wären
		}
		gewesen.
Zukunft (Futurum I).		
Ich werde du wirst er wird wir werden ihr werdet sie werden	}	sein.
		Ich werde du werdest er werde wir werden ihr werdet sie werden
		}
		sein.
Vorzukunft (Futurum II oder exactum).		
Ich werde du wirst er wird wir werden ihr werdet sie werden	}	gewesen sein.
		Ich werde du werdest er werde wir werden ihr werdet sie werden
		}
		gewesen sein.

Befehlsform (Imperativ): Einzähl „sei“, Mehrzahl „seid“.
 Dingform (Infinitiv): a. Gegenwart „sein“.
 b. Vergangenheit „gewesen sein“.
 c. Zukunft „sein werden“.
 Eigenschaftsform (Partizipium): a. Gegenwart „seiend“.
 b. Vergangenheit „gewesen“.
 c. Zukunft (fehlt).

II. Das Hilfszeitwort „haben“.

Gegenwart (Praesens).

Ich habe
du hast
er hat
wir haben
ihr habet
sie haben.

Ich habe
du habest
er habe
wir haben
ihr habet
sie haben.

Mitvergangenheit (Imperfectum).

Ich hatte
du hattest
er hatte
wir hatten
ihr hättet
sie hatten.

Ich hätte
du hättest
er hätte
wir hätten
ihr hättet
sie hätten.

資料 93. Schäfer 文典における動詞活用表 <古式>の例 (続き)

Wirklichkeitsform. Indikativ.		Verbundene Redeweise. Konjunktiv.
Vorbergangenheit (Plusquamperfectum).		
Ich hatte du hattest er hatte wir hatten ihr hattet sie hatten	}	getragen.
	}	Ich hätte du hättest er hätte wir hätten ihr hättet sie hätten
		}
		getragen.
Zukunft (Futurum I).		
Ich werde du wirst er wird wir werden ihr werdet sie werden	}	tragen.
	}	Ich werde du werdest er werde wir werden ihr werdet sie werden.
		}
		tragen.
Vorzeitigkeit (Futurum II).		
Ich werde du wirst er wird wir werden ihr werdet sie werden	}	getragen haben.
	}	Ich werde du wirst er werde wir werden ihr werdet sie werden
		}
		getragen haben.

Befehlsform (Imperativ): Einzahl „trage“; Mehrzahl „traget“.

Dingform (Infinitiv): a. Gegenwart „tragen“.

b. Vergangenheit „getragen haben“.

c. Zukunft „tragen werden“.

Eigenschaftsform (Partizipium): a. Gegenwart „tragend“.

b. Vergangenheit „getragen“ (leidend).

c. Zukunft „zu tragend“ und „zu tragen“ (leidend).

§. 38b.

I. Das Hilfszeitwort „sein“.

Wirklichkeitsform. Indikativ.	Möglichkeitsform. Konjunktiv.	Bedingungsform. Konditionalis.
Gegenwart (Praesens).		
Ich bin du bist er ist wir sind ihr seid sie sind.	}	Ich sei du seiest (seiest) er sei wir seien ihr seiet sie seien.
	}	Ich wäre du wärest er wäre wir wären ihr wäret sie wären.
		}

資料 94. Schäfer 文典における動詞活用表 <新式>の例

<Verbundene Redeweise> (=konjunktiv) が、現代の「接続法第1式」であるところの <Möglichkeitsform> 《可成法》と、「接続法第2式」である <Bedingungsform> 《期約法》《約束法》に分かれている。

Wirklichkeitsform. Indikativ.	Möglichkeitsform. Konjunktiv.	Bedingungsform. Konditionalis.
----------------------------------	----------------------------------	-----------------------------------

Mitvergangenheit (Imperfectum).

Ich war
du warst
er war
wir waren
ihr waret
sie waren

Vergangenheit (Perfectum).

Ich bin du bist er ist wir sind ihr seid sie sind	} gewesen.	Ich sei du seiest er sei wir seien ihr seiet sie seien	} gewesen.	Ich wäre du wärest er wäre wir wären ihr wäret sie wären	} gewesen.
--	------------	---	------------	---	------------

Vorvergangenheit (Plusquamperfectum).

Ich war
du warst
er war
wir waren
ihr waret
sie waren

} gewesen.

Zukunft (Futurum).

Ich werde du wirst er wird wir werden ihr werdet sie werden	} sein.	Ich werde du werdest er werde wir werden ihr werdet sie werden	} sein.	Ich würde du würdest er würde wir würden ihr würdet sie würden	} sein.
--	---------	---	---------	---	---------

Vorzeit (Futurum II oder exactum).

Ich werde du wirst er wird wir werden ihr werdet sie werden	} gewesen. sein.	Ich werde du werdest er werde wir werden ihr werdet sie werden	} gewesen sein.	Ich würde du würdest er würde wir würden ihr würdet sie würden	} gewesen sein.
--	---------------------	---	--------------------	---	--------------------

Befehlsform (Imperativ): Einzahl „sei“; Mehrzahl „seid“.

Dingsform (Infinitiv): a. Gegenwart „sein“.

b. Vergangenheit „gewesen sein“.

c. Zukunft „sein werden“.

Eigenschaftsform (Partizipium): a. Gegenwart „seiend“.

b. Vergangenheit „gewesen“.

c. Zukunft (fehlt).

資料 95. Schäfer 文典における動詞活用表 <新式>の例 (続き)

汝等カ荷フタ彼等カ荷フタ大過去私カ荷フタリシ汝カ荷フタリシ彼
カ荷フタリシ我々カ荷フタリシ汝等カ荷フタリシ彼等カ荷フタリシ
第一未來私カ荷フテアロウ汝カ荷フデアロウ彼カ荷フデアロウ我々
カ荷フテアロウ汝等カ荷フテアロウ彼等カ荷フデアアロウ第二未來私
カ荷フテデアロウ汝カ荷フテデアアロウ彼カ荷フテデアアロウ我々カ荷
フテデアアロウ汝等カ荷フテデアアロウ彼等カ荷フテデアアロウ
命令法單數荷ヘヨ複數荷ヘヨ
不定法イ現在荷フ、ロ過去荷フタ、ハ未來荷フテアロウ
過去分詞イ現在荷ヒツ、ロ過去荷ヘレテ受方ヘ未來荷ヘレツ、及ヒ荷
フベク(受方)

第三十八章乙

其一、助働詞ザイン

直説法現在私カ在ル汝カ在ル彼カ在ル我々カ在ル汝等カ在ル彼等カ在

ル半過去私カ在リシ汝カ在リシ彼カ在リシ我々カ在リシ汝等カ在リ
シ彼等カ在リシ過去私カ在ツタ汝カ在ツタ彼カ在ツタ我々カ在ツタ
汝等カ在ツタ彼等カ在ツタ大過去私カ在ツタリシ汝カ在ツタリシ彼
カ在ツタリシ我々カ在ツタリシ汝等カ在ツタリシ彼等カ在ツタリシ
第一未來私カ在ルデアロウ汝カ在ルデアロウ彼カ在ルデアロウ我々
カ在ルデアロウ汝等カ在ルデアロウ彼等カ在ルデアロウ第二未來私
カ在ツタデアロウ汝カ在ツタデアアロウ彼カ在ツタデアアロウ我々カ在
ツタデアアロウ汝等カ在ツタデアアロウ彼等カ在ツタデアアロウ
接続法現在私カ在ル汝カ在ル彼カ在ル我々カ在ル汝等カ在ル彼等カ在
ル過去私カ在ツタ汝カ在ツタ彼カ在ツタ我々カ在ツタ汝等カ在ツタ
彼等カ在ツタ第一未來私カ在ルデアロウ汝カ在ルデアアロウ彼カ在ル
デアアロウ我々カ在ルデアアロウ汝等カ在ルデアアロウ彼等カ在ルデアア
ロウ第二未來私カ在ツタデアアロウ汝カ在ツタデアアロウ彼カ在ツタデア

ロウ我々カ在ツタデアアロウ汝等カ在ツタデアアロウ彼等カ在ツタデア
ロウ

約束法現在私カ在レガシ汝カ在レガシ彼カ在レガシ我々カ在レガシ汝
等カ在レガシ彼等カ在レガシ過去私カ在ツタレカシ汝カ在ツタレガ
シ彼カ在ツタレガシ我々カ在ツタレガシ汝等カ在ツタレガシ彼等カ
在ツタレガシ第一未來私カ在ルデアアロウ汝カ在ルデアアロウガシ
彼カ在ルデアアロウガシ我々カ在ルデアアロウガシ汝等カ在ルデアアロウ
ガシ彼等カ在ルデアアロウガシ第二未來私カ在ツタデアアロウガシ汝
在ツタデアアロウガシ彼カ在ツタデアアロウガシ我々カ在ツタデアアロウ
ガシ汝等カ在ツタデアアロウガシ彼等カ在ツタデアアロウガシ
命令法單數在レヨ複數在レヨ
不定法イ現在在ル、ロ過去在ツタ、ハ未來在ルデアアロウ
過去分詞イ現在在リツ、ロ過去在ツタ、ハ未來欠ケル

資料 96. (1894) 明治 27 年、嶋約翰訳『シェーフエ
ル文典解説』

前頁の<新式>の動詞活用表を翻訳した箇
所である。<Möglichkeitsform>は《接続
法》、<Bedingungsform>は《約束法》で
ある。《接続法》の対訳和語は《直説法》
と全く同一で、一方《約束法》には「願い仮
名」である<カシ>が付いている。

第五

wenn, fo, wofern, falls (又ハ wo) ハ約東文章中ニ用非ラレトモ
ノニナテ其本文章後ニ位スルハ其中ハ「fo」置クベシ例之ハ
Kohls du nicht liebst, fo leiste mir Gehorsam!
Wofern er sich nicht bessert, wird er entlassen.
Wenn der Schind hart bläst, fo schenkt das Meer.
So man Gerechtigkeit nicht sieht, fo sieht man die Falsch.

第六

Diesem, obgleich, obwohl, wenn schon, wenn gleich, wenn
auch & Gleichmangelsätze (解前ヲ見ル) 中ニ用非ラレトモ
ニナテ本文章後ニ位スルハ其中ニ「fo」置クベシ例之ハ
Wenn er gleich noch jung ist, ist er doch schon bedächtlich.
Obgleich es schon fünf Uhr war, marierte ich noch auf die.
Wenn es auch regnet, fo werde ich hoch gehen.

第五及第六ノ 疑問問句及命令文章ノ形狀ヲ以テスルヲ得ベシ例之ハ
Gehehst du nicht, fo geht es dir schlecht.
Kernt man dich, fo antworte heftiger!
Bist du rechtschaffen, fo wird es dir gut gehen.
Bei mein Streub, fo werde ich dir helfen.
Eine andere (Gutes), fo wird man es dir lieber thun.

前例ニ倣ヒ左文章ヲ反譯スベシ
①如何トナレバソレガ兩フリタ故ニ街道ガ湿テアル ②私ガ私ヲ全ク快ヨ
ク見出ザリシ夫故ニ私ガ家ニ迄止マリシ所ノ ③彼レガ決シテアルモノヲ
學バヌデアラウ如何トナレバ彼レガ全ク勉強デアラヌ故ニ ④私ガ前夜私
ノ病氣ノ父ノ傍ニ起キタリノ夫故ニ睡ムテアル ⑤彼レガ彼レノ家ガ財産
ト共ニ焼ケタリノソレカラ貧乏ニナリタ ⑥如何トナレバ私ガ私ノ仕事ヲ
猶終ラナンダリシ故ニ私ガ劇場ニ於テ往カザリシ ⑦彼レガ不規則ニ生活
セテバナラヌ如何トナレバ彼レガ不健康デアアル故ニ ⑧私ガ彼レヲ罰シタ
夫ヲ以テ彼レガ自分ヲ改メルノ爲ニ ⑨彼レガ出テ往キタ他國ノ動物ヲ見
ルベク爲メニ ⑩如何トナレバ彼レ不規則ニ生活シタ故ニ彼レガ病氣ニナ
リタ ⑪私ガ彼ヲ迎ヘシメタ私ガ汝ニ此ノ美麗ナル像ヲ示スコトノ上ニ
⑫昔君ガ過度ニ生活セテバナラヌ而シテ「fo」不消化ナル食物ヲ食フテ
ハナラヌ貴君ガ常ニ健康デ止マルノ上ニ ⑬私ガ私ノ息子ヲ夫故ニ伊香
保ノ湯場ノ方ニ送リタ如何トナレバ彼レガ長キ時以來弱身デアアル故ニ ⑭
私ガ私ヲ彼レニ私ノ借金ニ思ヒ出セシ彼レガ金ニ付テ話セシトニ ⑮私
ガ彼レガ私ノ愛ヲ惡シク用ユルコトヲ見付タル故ニ彼レカ終リヲモツ ⑯私
ガ家ニ迄止マル若シモ汝ガ私ヲ毒ダ願ハヌトニハ「fo」若シモ私ガ貴君ニ明
日迄罰カヌトニハソノ「fo」ハ昔君ガ私ニ迄來ルベク要セヌ ⑰負債主ガ二

週間ノ間ニ都テノ彼レノ負債ヲ拂ハヌナラバソノ「fo」ハ彼レノ家ガ裁判所
カラ公費セラレテバナラヌ ⑱假令ソレガ昨日甚ダ風立テアリシトモ彼レ
ガ遠ク小舟ヲ以テ湖水ヲ越ヘテ渡ルベク試ミシニ ⑲假令此ノ魚ガ新ラシク
アルトモ彼レガ好ク味ハヌトニ ⑳假令彼レガ彼レノ父カラ屢戒シメラルハ
ソレデモ彼レガ改メヌトニ ㉑汝ガ學校カラ放逐サレシトモ思フナラバソノ「fo」
ハ汝ガ常ニ怠惰ニ止マリ得ルトニ ㉒假令人ガ「ハンニバル」ナル若キ亞非利加
人ヲ常ニ勇猛ナル戰將トシテ知り分ケタトハ雖モソレデモ羅馬ニ於テ一ツ
ノ人間モ彼レガアルハハンニバルニ越ヘテ往クデアアラウコトヲ考ヘナンダリシ
奈破翁ガ埃及カラ大ヒタル急キヲ以テ歸ラテバナラザリシ如何トナレバ人
民ガ故郷ニ於テ叛セシ故ニ ㉓「ハンニバル」ガアルハハンニバルニ越ヘルノ後
ニ彼レノ軍人ヲ以テ真太利亞ノ平地ヲ旅セシトモ彼レノ驚キガ甚ダ大キク
ナラテアリシ如何トナレバ半分ガ旅ノ間ニ死シテアリシ故ニ

第七章 Verkirzte Lebenszüge (略副文章)

副文章中接續詞又ハ並テ其主ヲ省略スルコトカラス斯ノ如キ副文章ヲ略副
文章ト云フ而シテ此文章中ニハ Hauptwort in der 1. 副文章ノ主ハニ
本文章ニ在ルル若シクハ其中ニアルモノト想像スルヲ得ルルニ非ザレバ其
副文章ヲ略スルコトヲ得ズ例之ハ

- Der Regenbogen (welcher) eine der schönsten Naturerzei-
nungen (ist), hat sieben Farben.
Er starrt bestaunt beim Gange in Dante zu bleiben (soß es
bleib).
- Es ist Pflicht (für jeden, das jeder) die Wahrheit zu sagen.
略副文章ノ例
- 關係代名詞ヲ略ス
- Ernarrichte, ein Gelberr Propolis, wurde gegen nun
Eduarden.
- Die Lehren dieses Mannes, be-
fand im Munde des Vol-
kes habe ihm, dem treuenen
geban.
- Der Pfaffen hatte diesen Mann
bekennender fähigen fä
gemacht.

以上第二卷第一項ノ第七ニ同ク
Der Fuchs, an Schlafheit fa-
geht auch in die Falle.



資料 97. 平塚定次郎著『獨逸文法楷梯』の「文章学」より、当時の「直訳」によって書かれた練習問題

形式主語にも熟語の前置詞にも、ひとつ残らず対訳和語が当てられている。今日では理解し難い表現も多く、例えば3) の<勉強デアラヌ>は「勤勉でない」の意である。この甚だしい日常語との乖離が、当時の語学者の批判を生んだ。表 30 の対訳和語を参考にすると、1) <雨フリタ>は過去形で、<湿テアル>は現在形、6) の<猶終ラナンダリシ>は過去完了、<往カザリシ>は過去形になる。23) ~25) には古代羅馬史の英雄ハンニバルと、フランスの英雄ナポレオン<奈破翁>の名が見える。

302 Des VI Hauptstücks I Abschnitt.

Die anzeigende Art. (Modus indicativus.)		Die verbindende Art. (Modus conjunctivus.)	
Die gegenwärtige Zeit (Präsens.)			
Einz. Ich bin, Du bist, Er ist.	Daß ich sey, nicht sene, *)	Daß du seyst, nicht seyest,	
Vielf. Wir sind, Ihr seyd, Sie sind, (nicht seynd.)	Daß wir seyn, nicht seyen,	Daß ihr seyd,	
Die kaum vergangene. (Imperfectum.)			
Einz. Ich war, Du warest, Er war.	Daß ich wäre,	du wärest,	
Vielf. Wir waren, Ihr wäret, Sie waren.	Daß wir wären,	ibr wäret,	
Die völlig vergangene. (Perfectum.)			
Einz. Ich bin gewesen, nicht gewest b), Du bist gewesen, Er ist gewesen.	Daß ich gewesen sey,	du gewesen seyst,	
Vielf. Wir sind gewesen, Ihr seyd gewesen, Sie sind gewesen.	Daß wir gewesen seyn,	ibr gewesen seyd,	
Die längst vergangene. (Plusquamperfectum.)			
Einz. Ich war gewesen, Du wärest gewesen, Er war gewesen.	Daß ich gewesen wäre,	du gewesen wärest,	
Vielf. Wir waren gewesen, Ihr wäret gewesen, Sie waren gewesen.	Daß wir gewesen wären,	ibr gewesen wäret,	

*) Niemand meynet, das seye habe in verneinenden Modis sey aber bey bejahenden statt. Meines Wissens ist dieser Unterschied weder irgendwo eingeführet, noch überhaupt nöthig.

b) Daß dieses falsch sey, zeigt die Analogie, oder Ähnlichkeit aller unrichtigen Zeitwörter, dergleichen dieses eins ist. Denn sobald das præt. imperf. sich nicht auf te endiget, gehen alle Supina auf ein en, und nicht auf ein e aus. Z. E. ich sehe, ich sah,

Von den Hülfswörtern.

Die ungewiß zukünftige. (Futur. incertum.)	
Einz. Ich will seyn, Du wirst seyn, Er will seyn.	Daß ich seyn wolke, du seyn wolkest, er seyn wolke.
Vielf. Wir wollen seyn, Ihr wollet seyn, Sie wollen seyn.	Daß wir seyn wolken, ibr seyn wollet, sie seyn wolken.
Die gewiß künftige. (Futurum certum.)	
Einz. Ich werde seyn, Du wirst seyn, Er wird seyn.	Daß ich seyn werde, du seyn werdest, er seyn werde.
Vielf. Wir werden seyn, Ihr werdet seyn, Sie werden seyn.	Daß wir seyn werden, ibr seyn werdet, sie seyn werden.
Die bedingt künftige. (Futur. condit.)	
Einz. Ich würde seyn, Du würdest seyn, Er würde seyn.	Daß ich seyn würde, du seyn würdest, er seyn würde.
Vielf. Wir würden seyn, Ihr würdet seyn, Sie würden seyn.	Daß wir seyn würden, ibr seyn würdet, sie seyn würden.
Die gebietende Art. (Mod. Imperat.)	
Gegenw. 3. E. Sey du, V. Seyd ihr.	Gegenw. 3. Seyn, Vergang. 3. Gewesen seyn,
Künft. 3. E. Du sollst seyn, Er soll seyn. V. Ihr solltet seyn, Sie sollen seyn.	Künft. 3. Seyn werden. Supin. Zu seyn, Gerund. Sey seyn, Zum seyn.

Mittelwörter. (Particip.)

Der Gegenw. Zeit, ein Wesender c).

Vergang. Zeit, ein Gewesener.

Künftig. Zeit, einer der seyn wird.

sah, gesehen; nicht gesehet; ich nehme, ich nehme genommen, nicht genehmet; ich sehe, ich sah, gelesen, nicht gesehet; also auch ich bin, ich war, gewesen; nicht gewest.

c) Dieses einfache Mittelwort ist nun zwar nicht im Gebrauche: allein in der Zusammensetzung setzet man oft ein Abwesen-



Vollständigere und Neuerklärtere
Deutsche
Sprachkunst

Nach den
Mühen der besten Schriftsteller

des vorigen und ihgen Jahrhunderts
abgefaßt,
und bey dieser fünften Auflage merklich verbessert,

von
Johann Christoph Gottscheden,
P. der Königl. Preuss. Acad. der Wissenschaften, u. der
P. der Königl. Preuss. Acad. der Wissenschaften, u. der
P. der Königl. Preuss. Acad. der Wissenschaften, u. der



Leipzig,
Verlegt bey Joh. Christ. Beyer und Sohn, 1762.

資料 98.

1762 年出版の Gottsched の独
文法書

< Verbindende Art > の接続詞
は“daß” (蘭 dat ; 英 that) た
だひとつである。Marin、Sewel
の文典と比べると、彼らの従属
接続詞の多彩さと、この文典の
シンプルさが好対照をなす。

第四節 ま と め

以上の考察から、和蘭語・英語・独逸語における Conj./ Subj.の主な訳語の時間的推移を図示すると表 28 (354 頁) のようになる。これらの訳語について各節ごとにまとめると、次のようなことが言えるかと思う。

蘭語学の場合：——Conj./ Subj.の基礎を築いたのは江戸期の蘭語学であった。その特徴は、対応する和蘭語の術語を持たない創出術語である。特に Conj./ Subj.の機能を漢学・国学の注釈法から把握した《分註法》の獨創性はすばらしいものがあつたが、術語自体の難解性も手伝って前期蘭語学のみで使用で終わってしまった。

幕末においては、^{マートシカッペイ}Maatschappij の *Grammatica* 翻訳の過程で《疑問法》が創出された。これは明治の英・独語学に引き継がれ、英語においては明治 20 年代まで用いられたが、独逸語ではさほどでもなかった。しかし、この術語は「疑問文を作る法」と混同・誤解され得るという弱点を伴った。

《附説法》は江戸時代の終焉とともにその役割を終え、一方《接続法》と、仏語学に発する《附属法》は、さしたる問題もなく明治に継承された。

英語学の場合：——英語の Subj.は明治全般を通じて《接続法》であり、《仮定法》は明治時代終盤になって漸くに一般化した比較的新しい術語である。Subj.の<正しき形>が失せ行きて大方の場合に叙実法を用うるに至り^{註 48}、その用法が専ら“if”に限定されるようになった時、この《仮定法》という術語が《接続法》と交替して現代に至っている。

英文法における《可能法》は Potential mood のことであり、同一用語の内容が英語と独逸語との間では相違を示した。

独語学の場合：——独逸語の《接続法》は、蘭語学より発したものが現代に至るまで存続したものである。しかし、明治初年が原典において Kond.が Konj.から一時分離独立する時期に相当したため、《接続法》は《可能法》(=Konj.)と《約束法》(=Konj.)とに分裂した。《可能法》は、明治 30 年代以降《接続法》に代わって Konj.全体を意味する訳語となる。このため Konj.に対して《接続法》と《可能法》というふたつの名称が通用し、混乱した。

一方《約束法》は、独逸語原典から Kond. が再び消滅したにもかかわらず、日本の独文法では破棄されることなく長く存続した。

明治 30 年代は、幕末の蘭語学の影響が殆ど影を潜め、新たな方向を志向する節目の時代である。明治 20 年代は前時代の遺産と新文法の要素とが入り混じり、拮抗し、続く 30 年代に旧文法の要素の多くが退けられた。Perf. (=I have had) と Imperf. (=I had) の用法的逆転もそうであったが、Conj./ Subj. の訳語に関しても同様で、蘭語学以来の《附説法》・《附属法》・《疑問法》等の訳語は、《接続法》ひとつを除いてほとんど姿を消している。

Conj./ Subj. の訳語に関してとりわけ特徴的なのは、意識度の高さではないかと思う。前期蘭語学の豊富な創出術語はもとより、幕末の《疑問法》も、意外なことに明治の《仮定法》も意識である。奈倉次郎が「是を形よりすれば原名の如く接続法と云ふを当れりとすれども、其の意味より考ふる時は常に假定の意味を以て假定法と称するなり」(本章第二節 1. [336 頁]) と言うように、当時の洋語学者は、Modus のような内容理解の難しい分野に関しては、原語直訳よりも意識を以て臨み、その意味用法が具体的に表出されるように試みたのである。それだけ、当該事項の理解が、日本人にとっては難しいということであろう。江戸期の蘭語学における《過去ノ現在》(=Imperf. : ik hadde) や、明治期の英・独語学における《未来過去》と《過去未来》(=2nd Future 及び Fut. II) に対するという意識も、同様の理由による。

しかし、とりわけ Conj./ Subj. の理解の見事さを我々に示してくれるのは、和・漢文法との関わりを加味することにより数々の意識の術語を創出した江戸期の蘭語学である。《死語法》と、殊に《分註法》は、日本語と洋語学習との関係を考えるにあたって示唆に富む術語である。このような、和漢を主、和蘭語を従とするこれら創出術語の対極にあるかのような「直訳」のあり方については、物集高見・寄山元吉等がその問題点を指摘しており、これについては、また稿を改めて考えて見たいと思う。

注

1) ただし、訳語的に問題が少ないということは、内容的に問題がないということの意味しない。明治期の英語学は、仮定表現における Pot. と Subj. の関係と前者の存在意義、Subj. の時制の数等をめぐって、見解が分かれていた。明治の二大英文典である Swinton が Pot. を認め、Nesfield がそれを否定したことから、日本の著述文典の著者は説明に種種の苦勞を強いられている。〈接続法と可能法とを合せて条件法 conditional mood となして論ずる文法家あり 又接続法は現在過去の二時制を有すと論ずるもの或は直説法と同様に六時制を有すべきものなりと論ずるものあり 彼此論議一定せず〉(酒巻貞一郎著『英文法神髓』三河屋書店、明治³⁰、146 頁)のごとくである。その他、井上十吉『中等英文典』(明治³¹)の 85 頁及び 127 頁、菅沼岩蔵『初等英文典』(明治²⁷)の 126 頁等参照。

2) 『和蘭語法解』は、上述の箇所に続けてく又 onbepaalde tyd トモス。即チ不定ノ義ナリ」という。この《不定時》は《不定法》と混同されることがある。『四法諸時対譯』はこれを《不限時》と呼ぶが、その例文 “Ik zou leeren” (=I would learn) について、<leeren> が《不定法》だから《不限時》としたと言う解説を見ることがある。だが、そうではなくて、これは “zou” (=would) によって表わされるところの仮定推量 Conditionalis のことである。

3) 『蘭語学』Ⅱ、611頁。また『和蘭語法解』の《欽助言》の項では《料度未来》と言われている。

4) Weiland (1806; 1846) の未来時制は、表向きはひとつである。しかし、その内容は4種の未来を扱っているため、実質的には4未来で、<Ik zou+Inf.>が【接続法第一仮定未来】、<Ik zou+Perf.>が【接続法第二仮定未来】である。van der Pyl (1819) では、<Ik zou+Inf.>が【仮定時】で、<Ik zou+Perf.>が【第二仮定時】である。更に1851年版の P. Marin では、60年前の1790年版ではひとつしかなかった未来時制に、今日の「未来完了」である【複合未来】とともに、【仮定時】と【複合仮定時】が加えられている。この多数の未来時制は、蘭語学においては1800年代初頭の『四法諸時対譯』(1805)と『訂正蘭語九品集』(1814)に反映されている。

5) この多賀貫一郎の直訳文典では、《充分未来》《綿密未来》《第二未来》《過去未来》という4種類の訳語が併用されている。先の三者に関してはそれぞれ <die vollendete Zukunft> <Fut. exactum> <Fut. II> という原語の推測が容易であるが、《過去未来》だけはそれができない。『獨逸文法楷梯説明』にはこの《過去未来》についての詳しい説明がある(これについては第三節にて取り扱う)。

6) しかし、当時の独文典では専ら「つなげる」の意の <verbinden> を使用し、<Verbindende Weise> のように言っている。この接続された文章のことを英語では「従文」と言うが、独逸語では現在「副文」と呼びならわし、すでに明治の初めから専ら独逸語系で使用されている。この「副」の文字は、現代人にはもはや訓ずることができなくなってしまったが、明治の元勲のひとり副島種臣が「ふくしま」ではなく「そえじま」と読まれることから分かるように、「そえる」という意味を持っている。いかにも漢文を当然の基礎教養とした世代らしい見事な訳語である。幕末から明治初年の頃は訓読みされる傾向があるので、あるいは「そえぶん」と読まれていたのかも知れない。

7) 『蘭語学』Ⅱ、1166頁。

8) 後述する高野長英になると、《分註法》ははっきりと関係代名詞のことになっている。他の例を挙げれば、大槻玄沢の『蘭訳梯航 下』(文化13)に、

答曰翁少弱ノ頃笈ヲ負ヒテ此学ニ入り師友ノ愛顧恩偶ヲ蒙リ其ノ端倪ヲ知リタリシハ
鶴斎先生ト蘭化先生ト教育ノ厚カリシ恩沢ニ由リ淳庵中川子竜橋 杵月池 栳ニ公並ニ森
氏 前ノ訳官ニシテ西某ノ養息ナリ其家ヲ辞シテ東遊シ森トナル今ハ千古ノ人ナリ
ノ益友タリシ切磋ニ出タリ但資性ノ謬劣ナルト亦
学關ケ初ムルノ頃ナレバ今時熟練ノ業トナリシ世ノ修行ノ如クニモアラズ

のような文があるが、この文における〈前ノ訳官ニテ…〉と言う文註は、さしずめ〈who〉の関係文と同じ機能を果たしている。引用は『蘭語学』Ⅱ、402頁から。

9) 中野柳圃の『四法諸時対譯』(1805)には、過去形による反実仮定の用法として、〈als [al] leerde ik 学ひしかとも 学ふとも〉と〈schoon ik leeren zoude 我学はめど 我学へけれと〉が、『文註法』《未来》の箇所に増補されている。前者については〈前後皆過去詞ナレハ学ひしかともト訳ス…(中略)…現在ニカケテ云トキハ学ブトモナリ〉と説明され、過去形が現在の非現実を表わすことを言っている。後者は、単なる《未来》ではなく、〈未来ノコトニ schoon を附ルハ不定ニナル故 zal トハイワス〉と言われる通り Conditionalis である。〈不定〉とは今日の「仮定」の意で、直説法の“shall”とは違うのだと言っているのである(『蘭語学』Ⅰ、459-460頁)。

この仮定推量という Conditionalis の性質を、Sewel はよほど気にかけていたらしい。この英国系オランダ人文法家は、国会図書館所蔵の辞書中蘭文典とは内容の異なる、しかし出版年は同じであるところのアムステルダム大学所蔵版の蘭文典(1708)を書いており、佐藤信が『日本におけるオランダ語研究の歴史』(大学書林、昭和60、101-114頁)で言及しているのであるが、その文典の〈de Aanvoegende of Wenschende Wyze〉(=Conj.)では、“Toen Ik *Leeren zoude*”が〈Tweede Onvolmaakte Verleeden Tyd〉【第二未完成過去】(現代の「過去形」)として、特に〈Onvolmaakte Verleedene Tyd〉【第一未完成過去】(同じく現代の「過去形」)から別れて、下に引用するように、独立した活用として Conj. の時制中に置かれている。

Tegenwoordige Tyd	: Dat ik Leer of Leere
<i>Onvolmaakte Verleedene Tyd</i>	: Dat of Schoon ik Leerde
<i>Tweede Onvolmaakte Verleedene Tyd</i>	: Toen Ik <i>Leeren zoude</i>
Volmaakte Verleedene Tyd	: Dat of Hoewel Ik geleerd heb of hebbe
Meer dan Volmaakte Verleedene Tyd	: Indien of Dat Ik geleerd had of hadde
Toekomende Tyd	: Als Ik <i>Leeren zal</i>
<i>Tweede Toekomende Tyd</i>	: Als Ik <i>geleerd zal hebben</i>
<i>Derde Toekomende Tyd</i>	: Schoon Ik <i>geleerd zoud hebben</i>

“zoude”(英の should, would; 独の würde)は、形で言えば“zullen”の過去——即ち《過去ノ現在》であるから、このような命名になったのであろう。〈Onvolmaakte Verleedene Tyd〉と〈Tweede Onvolmaakte Verleeden Tyd〉はどちらも「現在」の非現実をあらわすことができるが、わざわざ【第二未完成過去】を設けたのは、仮定推量の Conditionalis を区別するためなのではなかろうか。即ち、単独の過去形だけで表わされる非現実仮定が【未完成過去】、“zoude”で以って表わされる非現実の仮定推量が【第二未完成過去】である。

残りの〈Tweede Toekomende Tyd〉【第二未来】と〈Derde Toekomende Tyd〉【第三

未来】についても柳圃の理解は的確で、前者は《未来ノ過去》——即ち「未来完了」、後者がく (geleerd の) 下ノ hebben ニ過去ノ意アル故不限時ノ過去ト云テ可ナリ>——即ち「仮定法の過去未来完了」であると説明されている。《不限時》が仮定推量で、これが《過去》になるのは、当時の時制では、hebben が過去分詞と一緒にになって完全なる《過去》(現代の「現在完了」の形式) を形成するからである。故に <hebben ニ過去ノ意アル故> というのであろう。

10) <be : zyn> <have : hebben> のような助動詞ではなく、一般動詞になると未来時制の数が増加する。“love” の <de Wenschende of Ondervoegende Wyze> (=Conj.) では、<Toekomende tyd> 《未来》の次に <Tweed toekomende tyd> 《第二未来》として、直説法には普通置かれない「未来完了」が現れ、更に “should love” の <Onderstellende toekomende tyd> 【仮定未来時】と、Conj.の場合に許されるとして “should + have +p.p.” である <Tweede onderstellende toekomende tyd> 【第二仮定未来時】が続いている(資料 79[323 頁])。

11) 『蘭語学』 I、487 頁。

12) 野呂天然の例は『蘭語学』 I、497 頁。吉雄権之助については同書 892 頁。

13) 第二章で触れた寄山元吉編述『英語教授書』(第二巻、163 頁)にある言葉である。曰く <佛人及ヒ獨逸人ノ如キハ其本国ノ詳細ナル文法ヲ定規トスルヲ以テ shall, will ニ付未来ノ用法ト現在ノ用法ヲ判然區別ス英米人ハ反テ文法書毎ニ説明ヲ異ニスルガ如キ弊アリ然ルニ日本人ハ國語ヲ定規トセザルガ為メ shall, will ノ義ヲ測定シ難クシテ英人ガ困難ト云ヘバ英人スラ困難ト云フガ故我等ノ能ク識別シ得ル所ニ非ズ杯ト言ヒテ生徒ニ説明セザルガ如キノコトアルハ実ニ遺憾ニ堪ヘザルナリ>

14) この、詞の「動」と「死」という観念は、かの著名な漢学者・荻生徂徠の漢学にその淵源があるそうである(『蘭語学』 I、274-278 頁)。三澤光博「<訳文箋諦>における語の意識分類」に拠ると、<我国において、漢文法の研究が始まったのは、荻生徂徠の「訳文箋諦」などからではあるまいか>と言う(『語文』第十五輯、169 頁)。そこでは《実学》《死字》《活字》《動静虚実》等の術語が使われ、これらの用語を、柳圃は彼の蘭文法研究に活用したのである。

15) 『蘭語学』 II、602 頁。

16) van der Pyl, *A practical grammar of the Dutch language*. 115 - 117 頁。

17) De aanvoegende wijs, die waardoor iets twijfelachtigs, of onzeckers gezegd, waardoor een wensch, of eene voorwaarde, of toegeving, of aandrijving uitgedrukt word.
(1806、175 頁)

18) 洋風日本文典の最初である古川正雄『絵入り智慧の輪』の《疑問法》は、Conj.の意味である(四編下 詞の巻、明治5)。この国文典の《法》は、

- | | |
|--------------------|------------------|
| 1. つねのいひかた (直説法) | 2. つなぐいひかた (疑問法) |
| 3. いいつけのいひかた (命令法) | 4. つきぬいひかた (不定法) |

5. うちけすいひかた

の5法である。

物集高見『日本文語』(明治9?)の《帯疑法》もSubj.の意である。<直説法は切実なる事故を示し、帯疑法は不切実なる事故を示す。されば将来の事に属する約束、目的、好欲、願望等をいふには、総て帯疑法を用ふるなり>という説明は、^{マートシカッペイ}MaatschappijのGrammaticaのそれを髣髴とさせる。事実、古田東朔は本書について、大庭雪斎の『譯和蘭文語』に拠ったと述べている(「物集高見博士『日本文語』の拠ったもの——明治初期洋風文典原典考4」;『解釈』第6巻第1号所収)。

19) 引用は、杉本つとむ『英文鑑——資料と研究』ひつじ書房(1993)131頁。原著者L.Murrayの定義は、<The Subjunctive Mode represents a thing under a condition, motive, wish, supposition, &c.> (1795, 39頁)である。

20) 『蘭語学』I、424頁等。

21) 佐藤雄治譯述『正則挿譯ピ子ヲ氏英文典獨案内』(明治20)は、<想像ヲ顕ス為ニハ想像時限ヲ設定セリ>として特に設けられたこの時制を、《想像時限》の名のもとに訳出している。慶応義塾読本『ピ子ヲ氏原板英文典』では、Subj.の定義は以下のようである。

All the tenses of the indicative and potential modes become the tenses of subjunctive mode, by placing before them a conjunction denoting doubt or condition ; as, *If I am, If I was, If I have been, If I had been, If I shall be, If I shall have been, If I may be, If I can be, If I should be &c. &c.*

To denote supposition, there is also a Suppositional Tense, as follows :

Suppositional Tense.

Singular.

- | | | |
|---|----|---|
| 1. If I <i>were</i> . | | 1. <i>Were</i> I. |
| 2. If you <i>were</i> , or
If thou <i>wert</i> . | or | 2. <i>Were</i> you, or
<i>Wert</i> thou. |
| 3. If he <i>were</i> . | | 3. <i>Were</i> he. |
- (Art.221.)

Pinneoの時制は、Pres., 1st Past (=Imperf.), 2nd Past(=Perf.), 3rd Past, 1st Fut., 2nd Fut. の6時制であるが、更にModeではなく<Tense>として、これが加えられている。

ところで、明治初期の洋風国文典の中で、これはあるいはPinneoの<Suppositional Tense>の影響かと考えたくなるものに、物集高見『初学日本文典』(明治11)がある。本書の時制は1.現在、2.過去、3.大過去、4.未来、5.想像過去、の5時制である。最後のこの《想像過去》は、一見すると<Suppositional Tense>の直訳のように見える。ところがこれは、<已ニ過去ニ属シタル可キヲ想像スルヲ示スモノトス>という、文字通りの過去の推量なのである。佐藤良雄が「動詞の<過去未来>について」でこれを取り上げており、<未来完了でもないが過去の未来でもない>とコメントしている(『武蔵野女子大学紀要』Vol.5, 1970, 31頁)。

この発展形態が、5年後の『詞のはやし』における《第三過去》(けむ)なのであろう。

更に、落合直文・小中村義象著『中等教育日本文典』にも《過去の想像》(つらむ・たりける)という用語が存在する。この文典には、和蘭文典を思わせる《過去の現在》(たり・けり)が《半過去》(ぬ・つ)とは別に立てられていて、逆に洋語文法の眼から見ると面白い。

22) 幕末の安政期の頃から明治30年代あたりまで語学学習で一般的に行われていた「直訳」の例を一覧表にして次頁に示す。このように定型化した訳語に従って、文法書の Conjugation は英・独・仏を問わず、以下のように和訳された。

○ love ナル動詞乃変法

主要ナル部分)	現在	love 愛スル	過去	loved 愛セシ
	半過去分詞	loving 愛シタ	過去分詞	loved 愛シタル
(^{アア}) 直接法)	現在	: Thou lovest	汝は愛スル	
	半過去	: Thou lovedst	愛セシ	
	過去	: Thou hast loved	愛シタ	
	大過去	: Thou hadst loved	愛シタリキ	
	第一未来	: Thou will love	愛スルデアロウ	
	第二未来	: Thou will have loved	愛シタデアロウ	
成就法)	現在	: Thou mayst love	愛シ得シ	
	半過去	: Thou mightst love	愛シ得ル	
	過去	: Thou mayst have loved	愛シ得タ	
	大過去	: Thou mightst have loved	愛シ得タリキ	
接続法)	現在	: If thou love	若シモ汝ガ愛スルナラバ	
	半過去	: If thou lovedst	若シモ汝ガ愛セシナラバ	

(戸代光大『容易獨修英文典直譯』[ブラウン氏] 明治¹⁸20⁷)

これに基づいて、例文は、たとえば<私ガ書生デアリタ><彼ガ活シ能ハヌ><フランス帝ガ己ニニ三日後ニ戦場ノ上ノ一ツノ篝火ノ傍ニナポレオンと一緒ニ来リシ>のように訳されることになる。仮定表現と和訳の問題点については、次節の 3.1. (348-350 頁) 及び本章注 33、40、41 をも併せて参照のこと。

23) →本章注 13。

24) 渡部昇一『英語学史』459 頁。

25) Heyse 第5版に収録された第1版 (1814) の序文。vi 頁。

26) 斎藤の《附属法》(=Subj.) と《条件法》(=Cond.) は、共に条件文に用いるものであるが、《附属法》は “I wish I were a bird.” のような文における “I were a bird.” の部分を指す。一方《条件法》は、附属文ではなく本文にのみ用いられるもので、即ち、“If I had the money, I would lend it to you.” の “I would lend it to you.” における “would lend” の部分を指すのである (仏語の《条件法》は現代でもこれと同じである)。

本書の Mood は、直説、附属、条件、可能、命令、Infinitives の6法である。当時流行の Nesfield が Pot. を排除しているにも拘らず、今だに《可能法》を存続させている点で旧

表30. 明治期の三過去及び不定法の対訳和語

年 号	書 名	半過去 loved	過去 have loved	大過去 had loved	不定法現在 to love	不定法過去 to have loved
1805(文化 2)	四法諸時対訳	学ぶ 学びき	学びつ	学びつ 学びき		
1815(文化 12)	オランダごほうげ 和蘭語語法解	持ちき	持ちき	持てりき	打ツ	愛セラレタル
1840(天保 11)	英文鑑 ^{かがみ}	愛セシ	愛セリ	愛シタリシ		
1857(安政 4)	和蘭文典字類 (後編)	読ミシ	読ンダ			
1871(明治 4)	英文典獨学 [戸田忠厚]	愛セシ	愛シタ	愛シタ		
1883(明治 16)	克屈文典直譯(上下)	書キシ	書イタ	書イタリキ	書ク可ク	書イタ可ク
	ピネヲ氏原著英文典 獨案 [渡辺五一郎]	愛セシ	愛シタ	愛シタリキ		
	英語獨学便法	持チシ	持タ	持タリシ	持ツベク	持タベク
1884(明治 17)	ブラウン氏英文典直譯 [中西 範]	愛セシ	愛シタ	愛シタリキ	愛スルベク	愛シタベク
	文典和解英文指針	見シ	見タリ	見タリキ	見ルベク	見タルベク
1885(明治 18)	クワッケンボス氏英文 典獨案内 [高宮直太]	アリシ	アリタ	アリタリシ		
1886(明治 19)	クワツケンボス氏英文 典直譯[栗野忠雄]	愛セシ	愛シタ	愛シタリキ		
	ブラウン氏英文典直 譯(全) [源 綱紀]	愛セシ	愛シタ	愛シタリキ	愛スルベク	愛シタベク
	ピ子ヲ氏英文典獨学 (全) [玉井靖三郎]	愛セシ			愛スルベク	
	文法詳解ブラウン氏 英文典釈義 [澤田重遠]	愛せし	愛した	愛したりし	愛するべく	愛したるべく
1887(明治 20)	ソンメル氏佛文典 直譯 [中村秀徳]	持チシ	持ツタ	持タリシ	持ツコト	持ツタコト
	ソンメル氏佛文典 直譯 [平山直道]	愛セシ	愛シタ	愛シタリシ		
	和解纂註英文軌範 (完)	有リシ	有リタリ	有リタリキ		
	容易獨修英文典直譯 (ブラウン氏) [戸代光大]	愛セシ	愛シタ	愛シタリキ	愛スルベク	愛シタベク
	スウキントン氏英文 典直譯 [蘆田東雄]	愛セシ			愛スルベク	愛シタベク
	クワツケンボス氏英文 典直譯(全) [山本栄太郎]	愛セシ アリシ	愛シタ アリタ	愛シタリシ アリタリシ	愛スルベク	愛シタルベク
	クワツケンボス氏英文 典直譯 [水澤 郁]	愛セシ	愛シタ	愛シタ	愛スル可ク	愛シタ可ク
	正則挿譯ピ子ヲ氏英文 典獨案内 [佐藤雄治]	アリシ	アリタ	アリタリキ	アル可ク	アリタ可ク
1888(明治 21)	クアツケンボス氏英文 典獨案内(全) [外川秀次郎]	愛セシ アリシ	愛シタ アリタ	愛シタリシ アリタリシ	愛スルコ	愛シタコト
	スウキントン氏英文 典直譯 [太田次郎]	愛セシ	愛シテアル	愛シタ 愛シタリキ	愛スベク	愛シテアルベク
		Participle 愛シツツ / 愛シテアリツツ		Gerund	愛スルコト /	愛シテアルコト
	須因頼氏大文典解説 [田中達三郎]	愛セシ	愛シタ	愛セシ	愛スベク	愛シタベク
	スウキントン氏英文 典直譯 [渡辺松茂]	愛セシ	愛シタ	愛シタリシ	愛スベク	愛シタベク
	スウキントン氏英文 典直譯(全) [伴野乙弥]	愛セシ	愛シタ	愛サレタ	愛スル可ク	愛シタ可ク
1889(明治 22)	獨逸文典直訳解 [田中廉二]	アリシ	アリタ	アリタリシ		

年 号	書 名	半過去 loved	過去 have loved	大過去 had loved	不定法現在 to love	不定法過去 to have loved
1889(明治 22)	須因頓氏大文典講義 [平井広五郎]	有リシ	有ツタ	有ツタリシ		
1890(明治 23)	原書全譯スウキント ン氏英文典直譯講義 [渡辺松茂]	愛セシ	愛シタ	愛シタリシ	愛スベク	愛シタベク
1891(明治 24)	斯因頓大文典講義(上 下) [山形 閑]	アリシ 愛セシ	アツタ 愛シタ	アツタリシ 愛シタリシ	アルコト 愛スルコト	アツタコト 愛シタコト
	須因頓氏小英文典講 義 [湯浅 / 閑]	愛セシ	愛シタ	愛シタリキ	愛スルコト	愛シタコト
1894(明治 27)	教科書獨修用新英語 学	有チシ	有チタ	有チタ	有ツ(コト)	有チタ(コト)
1897(明治 30)	スーイントン小文典 直譯意解[元木貞雄]	愛セリ	愛シタ	愛シタリキ	愛ス	愛シタ
1898(明治 31)	英語学大全(前後篇) [松島・星野]	有ツタ 有ツテ居ツタ	有ツタ 有ツテ居ツタ	既ニ有ツタ 既ニ有ツテ居 ツタ		
1899(明治 32)	教科摘要新式英語学 獨修(一名六ヶ月間達 成)	持チシ 有テ居タ アリシ	有テ居タ アツタ	持タタリキ 有テ居タコトガアツ タ アツタリキ 既ニアツタ 愛シタリキ	アルコト 愛スルコト	アリタルコト 愛シタコト
1900(明治 33)	子スフィールド氏第 三英文典講義録 [奈倉次郎]	愛セシ	愛シタ	愛シタリキ	送ル	送れる
	子スフィールド氏第 二英文典講義 [鶴田久作]	愛セリ	愛シタリ	愛シタリキ		
1900(明治 33)	意解挿入ねすふいー ると英文典第二獨案 内 [栗野忠雄]	愛セシ	愛シタ	愛シタリシ	送ル	送ツタ
1901(明治 34)	文法大意(全)	讀んだ	讀み了はった	讀んでしまった		
1908(明治 41)	中学英文法講義	愛シタ アツタ 持ツタ	愛シタ アツタ 持ツタ	既ニ愛シタ 既ニアツタ 既ニ持ツタ	愛スルコト アルコト	愛シタコト アツタコト

文法的なのだが、しかし《附属法》から《条件法》が分離独立している点で新しさが感じられ、新旧の要素が混在しているような印象を受ける。

^(寛政7)1795年の英文典で、L. Murray は、Pot.と Subj.の相違は<condition><supposition>の有無にあり、両者の分離は<evident>であるとの見解を示している(40-41頁)。しかしこれ以後、英語の Potential Mood は消滅の路を辿り、逆に、古くは各種の従属節の中に埋もれていた Conditionalis が Subj.から一法として独立する傾向を示す。この傾向は、第二章で触れたあの“gewaltig”(劇的)な新潮流に身をさらした19世紀中盤の独逸において、特に一時期強まることになる。

27) 表 17 (195頁)によると、従来《第二未来》がほとんどであった Fut.Perf.の訳語を《未来過去》としたのも、《過去》と《半過去》の用法を逆転させたと同じ、斎藤秀三郎の『スウキントン氏英語学新式直譯』(明治⁸17)である。それ以外に《未来過去》を用いたものはわずか2例に過ぎず、どちらも同じ Swinton の直訳文典である。時制の用語に関しては、斎藤の直訳の影響は決定的と言える。彼が英語の時制の意味用法をよく咀嚼理解して訳語を選んだことは、《過去》《半過去》のみならず、この Fut. Perf.を独逸語のように《過去未来》としなかったことから窺われる。

28) 独逸文典における術語の多彩さは全く見事である。例えば<Verbum>に対し、その独逸語は、1.Zeitwort, 2.Wandelwort, 3.Aussagewort, 4.Redewort, 5.Sagewort, 6.Aussager, 7.Aussagenzeiger, 8.Zustandswort, 9.Wirkwort, 10.Handlungswort, 11.Begebenheitswort, 12.Satzwort, 13.Säger 等々という不統一振りである(Heyse第5版所収の第1版「序文」。vi頁)。

J.Grimm が *Deutsche Grammatik* 第一巻の序文において、<我々が考えるべきは、単語的にいかなる意味かということではなく、それが表わす Begriff (概念)である>として、種々の独逸語の新術語でなく、従来の羅典語の方に支持を与えているのは、前述した通りである。

29) Schäfer, E., *Leitfaden beim Unterrichte in der deutschen Sprache für die unteren Klassen höherer Lehranstalten*. Tokio, 1882. 35-36頁。

独逸語では、1830年頃から Kond.を Konj.から分離させようとする動きが起こり、その理由として、K. F. Becker——表に収載した文典を書いた Theodor Becker とは別人である——は、<独逸文法は、これまで羅典文法の前例に倣って Kond.をひとつの特別な Modus として区別せず、その語形が過去形から作られるという理由により、Konj.の過去形であると理解してきたが、語形ではなく意味を重視するならば Kond.を絶対に Konj.から区別する必要がある>と述べている (*Ausführliche deutsche Grammatik als Kommentar der Schulgrammatik*. 1.Band. §95. Prag, 1870. ; rpr.: Georg Olms Hildesheim. New York, 1969)。“hätte”が直説法過去形の“hatte”から作られるが故に Konj.における過去形であるとするのではなく、その意味を考慮するところから Kond.の独立が起こったことが分かる。この100年前、動詞の語形変化の大半を失った英語において、Pot.と Subj.の相違は

<condition><supposition>の有無にある、と言った L. Murray の言葉が思い起こされる(寛政⁷1795、40-41頁)。この Becker の考えに従うと、Konj.は接続法第一式 (daß に導かれる間接話法)、Kond.は接続法第二式 (wenn を用いて表わされる「～だったら」という非現実仮定) に区別され、Becker の挙げる後者の例は、条件節の “Wenn er *schwiege*,” “*Schwiege er doch!*” になっている。

更に Lehmen (1883)^{明治16} や Engelién (1884)^{明治17} 等の説に拠ると、接続法第二式の Konj.の中でも、特に “würde” (蘭: zoude / 英: would, should) が用いられると、単なる仮定に過ぎないことが明確になるので、これが Kond.であるとされる。

30) Heyse 第5版、1.Band. 767頁。

31) 鈴木重貞『ドイツ語の伝来——日本獨逸学史研究』教育出版センター、昭和51、68頁；宮永孝『日独文化人物交流史』三修社、1993、319-320頁。

32) 平塚定二郎『獨逸文法楷梯 前篇』「例言」、荒川邦蔵刊、明治16。

33) ブリンクリは、<事業ノ能ウカ能ハザルカヲ云ニ英語ニテハ Potential mood 可能法ヲ用フ>と言った後で、<右可能法ハ接続法ニ属ス可キモノナレドモ便利ノ為ニ別種ノ如ク作スコトヲ知ル可シ>(第三編 57頁) と注釈し、《可能法》の設置は飽くまで<便利ノ為>だとしている。だが、表26(334頁)を見ると、Webster, L. Murray, Quackenbos, Pinneo, Swinton 等、幕末～明治初年に用いられた英文典はいずれも Pot.を持っている。

《接続法》と《可能法》に関しては、<属文中接続法既然過去ヲ具エシトキハ其原文中ニ可能法連続過去ヲ用ルコト多クアリ然ルトキハ日本語ノ(斯々デ有タラス々シテ居タガ)等ノ如キ義ニ適^(たな)当リ>と説明し、

If the English had not refused us military instructors originally, when we asked them, we should not be following the French system now, I think.

元軍学ノ師匠ヲ頼ンダトキ英国デ断ワリマセヌダツタラ 当時佛式ヲ用ヒテ居リマセヌダロウガ

という例文を挙げている。<If～>が属文で、“had not refused” が《接続法既然過去》、<we～>以下が原文で、《可能法連続過去》なのは “should not be following” である。

本書は、荒木伊兵衛『日本英学書誌』(No.247)においてはわずか1頁弱のスペースしか与えられていないが、その内容は極めてユニークで、文法的内容の充実ぶりは当時の他書の追随を許さない。日本語および日本の文物習慣にも深い関心を払い、上記のごとく文法用語も他とは異なる面白いものが少なくない。加えて、訳文が当時一般の「直訳」でない。その「自序」<泰西諸国ノ人他国ノ語ヲ学ブ也皆自国ノ文字ヲ以テス故ニ学ビ易シ唯日本国ハ然ラズ英語ヲ学ブニハ初ヨリ英書ヲ用ヒザル能ハズ只其用ヒザル能ハザル而已ナラズ実ニ学ビ難シトス如何トナレバ日本語ヲ以テ其用法ヲ解明セシ良書ニ乏シケレバナリ之ヲ憂ヘ此編ヲ述テ童蒙学ビ難キノ患ヲ除^(のぞかん)却ト欲スル^(のみ)耳>は、当時の語学教育の問題点を鋭く突いた名言で、序節2.①(3頁)で寄山元吉が触れているのもこれである。

34) チャムブレンも、明治⁽¹⁸⁷⁹⁾12年の『英語変格一覧』では《許可法》であるが、⁽¹⁸⁹³⁾26年の

『英文典』と⁽¹⁸⁹⁹⁾32年の『英文典教科書』では《可成法》に変わっている。

チャムブレンの時制の術語が前二者と後二者間で<旧説>から<新説>へと劇的変化を遂げたことについては第二章第三節6. (239頁)にて述べたが、Moodの用語は前者と後二者間で、

1. 不限	2. 直説	3. 命令	4. 許可	5. 附属	(明治 ⁸ 12)
1. 不定; 不限	2. 直説; 平常	3. 命令	4. 可成	5. 接続	(明治 ⁸ 26)
	1. 直説; 直接	2. 命令	3. 可成	4. 接続	(明治 ⁸ 32)

になるという変化を見せている。

明治12年にInfがMoodの筆頭に立つのは当時の原典の新傾向である。しかし、日本語の術語を《許可法》から《可成法》へ、《附属法》から《接続法》に変えた26年では、InfがMoodから脱落したSwintonの新傾向には従っていない。また32年当時は、日本ではNesfieldの流布によりPot.が否定され始めた時に当たるが、チャムブレンの動きはこれにもまだ追いついていない(だがInfは脱落させている)。

明治⁽⁹⁰²⁾35年『英文典術語集』では《可成法》《含勢法》が採られ、《可能法》は見えない。表10(100頁)には《含勢法》は見られないが、類似の例として《威勢法》が明治⁽¹⁸⁸⁶⁾19年に現れている。蘭語学には『助字要訣』(文化11)に《威法》がある。

35)ところが、この『英文典問答』の内容は全体的に旧文法である。この時代はすでに《現在完了》と《未来完了》の時代であるのに、Pres.Perf.は《半過去》のままであり、Fut.Perf.は《大未来》になっている。MoodにはSwintonによって一時消滅したInfが含まれ、NesfieldにおいてなくなったPot.が残されている。

問(二十一)には<不定法動詞および分詞の総称>であるVerbals《動詞形》が説明されているが、Gerundが《分詞形》となっており、当時の訳語である《動名詞》にも《名動詞》にもなっていない(第一章注32 [133頁])。

これを《分詞形》とするのは一時代前のSwinton系列の翻訳書である。Swintonの<Verbals>は二種の不定詞(to-Inf.; Gerund)と分詞とからなり、例えば、渡辺松茂の直訳(明治⁽¹⁸²³⁾23)はGerundを実際《分詞形》と訳出している。

36) 日本独文学会編『ドイツ語文法用語』(1955)^(昭和30)では、《接続法》を正式とし、《可能法》は<用語使用の必要上なるべく使用をさけたいもの>としてC欄に分類されている(7頁)。そこには《可能法現在団(群)》《可能法の現在[形]》という言い方が載せられている。後者はともかく、前者の《~現在団(群)》という風変わりな用語は全くの未見である。

この時点ではKonj. IおよびIIに対する正式用語は《現在形の接続法》《過去形の接続法》とされ、《接続法第一式》《接続法第二式》は次点である。ところが、『ドイツ語教育の諸問題』(昭和⁽¹⁹⁴⁶⁾46)においてはこれらの言い方は消滅し、《接続法I》《接続法II》のみの記載となっている(577頁)。

37) この書の《許可断法》——即ちKond.は、仮定推量を表わす未来時制として扱われている。一頁を《叙事法》(一カ所《直説法》とも)[=Ind.]と《假定法》[=Konj.]に二分し、

現在・過去[Imperf.=ich hatte]・既成現在[Perf.=ich habe gehabt]・既成過去・未来・既成未来の6時制に続いて《許可断法過去》“ich würde haben”および《許可断法既成過去》“ich würde gehabt haben”の活用を挙げている。

本書が序文も例言も持たないのが残念であるが、著者は文法術語の訳にはいろいろ気を使っており、最終頁の備考にく働詞之部にて過去と云ひしは半過去；既成現在は過去；既成過去とは大過去；又 既成未来とは第二未来と他の文法家の云ふ者なり。注意迄に茲に付記す>と記している。

38) 脚注は更にく旧来仮定法、附属法、或は疑問法の譯語あり>という。蘭語学からの受け継ぎである《附属法》《疑問法》はともかく、《仮定法》もすでに明治⁽¹⁸⁹³⁾36年の時点でく旧来の訳語>なのであろうか。表 11 (107 頁) で見る限り、《仮定法》の初出はそのわずか5年前に過ぎない。英語においても、明治⁽¹⁸⁸⁸⁾21年に《仮定法》の使用例があったが、これが本格的に Subj.の訳語とされるのは明治 30 年代後半——即ち、渡辺と同時期なのである。

39) 明治⁽¹⁸⁹⁴⁾27年『シェーフェル文典解釈』(嶋約 翰訳)における正式な訳語は《接続法》であり、《条件法》はく希望法又ハ代理スル条件法…(ウエルデー)ニテ書改ムル…>(243 頁)のように説明文中で使用されているに過ぎない。

『ドイツ語文法用語』では《条件法》が正式に採られ、《約束法》は次点、《約束話法》は使用を避けるべき用語となっている。『ドイツ語教育の基本的諸問題』ではく特に用語としては設けない>として用語自体が消滅している。しかし、現代では正式用語であったはずの《条件法》も同様に消滅している。

40) 《約束法》に関して、第四十六教の寄山の言は、更に以下のように続く。

約束法トハ (甲) 事項ノ有無又ハ其成否 (乙) ノ事項ニ帰因スルコトヲ表スル語ノ用法ヲ云フナリ、凡ソ外国語ヲ学習スル者ニシテ約束法ハ困難ナリト口外セサル者少ナシ其之ヲ難ズルハ日本語ヲ顧慮セズシテ獨リ外国語ニノミ約束法ナル語ノ用法アリ我邦語ニハ其用法ナキモノト為スニ帰因スルナランカ果シテ然ラバ実ニ迂闊甚シト云ハザル可カラズ 約束法ハ世人ノ思慮スルガ如ク困難ナルモノニ非ス 今日用語ヲ以テ例スルニ (天氣ガ好ケレバ余ハ今日劇場エ行クンデスガ天氣ガ悪イカラ行キマセン) ト云フ語ノ用法ハ即チ約束法ナリ之ヲ獨逸語ニ直譯スレハ Ich würde heute in's Theater gehen, wenn es schönes Wetter sein würde ノ如シ 亦之ヲ一般ノ風ニ準ヒ直譯スレバ (天氣ガ好クデモアロウナラハ余ハ今日劇場エ行クデモアロウ) ト云フ。外国ニテハ推理的ヲ以テ其意ヲ解スルガ故 (天氣ガ悪ルイカラ行キマセン) ナル語ハ自然其文中ニ含有ス然レドモ日本語ニハ推理的ヲ以テスル語ノ用法乏シキカ故我邦語ノ約束法ト外国ノ約束法トハ自カラ語用ニ差異アル可キヲ以テ注意ス可シ

〔《約束法》というのは、「甲」という事柄〔即ち主文；結果節〕があって、それが存在するかしらないか、或いはそれが実現するかしらないかの原因が、実は「乙」の事柄〔即ち副文・従文；条件節〕の方にある、ということを書き表す用法である。大体、外国語を勉強する者で「《約束法》は難しい」と言わない人は滅多にいない。これを難しいと思うのは、恐らく、何ら日本語のことを顧みず、《約束

法》というのは外国語だけが持つ用法であって日本語にはないと考えてしまうからではなからうか。もしそうなら、こんなうっかりした話はない。《約束法》とは、普通思われているようなそんな難しいものでは全然ないのである。

例えば、日常の話し言葉で、<天気が良いければ私は今日劇場に行くんですが、天気が悪いから行きません>という言い方をするが、これこそが、即ち《約束法》である。これを獨逸語に直すと、ちょうど<Ich würde…>のような《約束法》の形になる。また、これを今の一般の風潮に従って「直譯」すれば、<天気ガ好クデモアロウナラハ余ハ今日劇場エ行クデモアロウ>となる。そもそも外国語では、ことさら口に出して言わなくてもその意味を推測して解釈するので、<天気が悪いから行きません>の部分は自然と文章中に含まれている。しかるに、日本語はこのような推理的な言い回しに乏しいので、同じ《約束法》といっても、日本語のそれと外国語のそれとではもともとその用法に違いがあるので、注意しなければならない]

寄山は、Kond.が難しいのではなく、日本人が Kond.を難しくしているのであり、その原因が<日本語ヲ顧慮セズ>という日本人自身のその態度にあると考えている。要するに、この文法書において寄山の指摘する Kond.の問題点は、ひとつには《約束法》という訳語自体の不穏当さであり、ふたつには Kond.の和訳の仕方である。

41) 幕末から明治期にかけての「直訳」は、Imperf.(ich war; hatte), Perf.(ich bin gewesen; habe gehabt), Plusquamperf.(ich war gewesen; hatte gehabt)を<アリシ><アツタ><アツタリシ>、<持チシ><持ツタ><持ツタリシ>のように定型訳するものである。よって独語では、“wollen”(=will)と“sollen”(=shall)及びすべての規則動詞の接続法第Ⅱ式が英語と同じく単独の過去形(=Imperf.)と同形になるが故に、次のような「直訳」が起こり得る。

ベズ-フテ エア ミツヒ ドッホ バルト
Besuchte er mich doch bald!
(見舞ヒシ) (彼ガ) (私ヲ) (夫レデモ) (直ニ)

夫レデモ彼カ直ニ私ヲ見舞ヒシ (§ 68)

これは、嶋約 翰訳『シェーフェル文典解釈』(明治 27)⁽¹⁸⁹⁴⁾から採ったものである。<Besuchte>は<besuchen>(=visit)という規則動詞の《半過去》(過去形=Imperf.)であると同時に接続法第Ⅱ式でもあるので、《半過去》の「直訳」<見舞ヒシ>がそのまま使われている。しかしこれは、現代文法で言う所の、条件・仮定の接続詞“wenn”(=if)が省略された反実仮想で、その文意は<あの方が今すぐ私の所にお出で下さったなら!>である。この<夫レデモ彼カ直ニ私ヲ見舞ヒシ>という「直訳」から<あの方が今すぐ私の所にお出で下さったなら!>というニュアンスをつかむのは、確かに容易なことではないであろう。

これと同主旨のことを、寄山と同じ陸軍教授の國吉直蔵もまた、明治 34年⁽¹⁹⁰¹⁾の『簡明獨逸文典』「緒言」で述べている。

…応用問題ノ和文ハ、従来多クハ直譯体ニ流ルヽヲ以テ活用ノオヲ養成スルコト能ハズ 生徒ハ同一ノ文題ニテモ之ヲ直譯体ニ課スレバ譯スルコトヲ得ルモ否ラザレバ茫然成ス所ヲ知ラザルヲ通弊トス 生徒ガ作文ニ進歩セザルハ此不完全ナル教授法ノ結

果ニ非ザルナキカ 編者ハ此見地ヨリ本書ニハ勉メテ直譯体ノ問題ヲ避ケ俗語又ハ新聞体ノ和文ニテ課題シ以テ活用ノオヲ養成センコトヲ期セリ…

42) Schäfer の<Die Vergangenheit, die Vorvergangenheit, die Zukunft, die *Vorzukunft* und die Leideform…das Perfektum, Plusquamperfektum, Futurum primum, *Futurum exactum* und das Passivum…werden gebildet mit Hülfe besondere Formwörter, die man Hülfszeitwörter (verba auxiliaria) nennt.> (§ 37) に現れる時制を、各直譯本はさまざまに訳出している。

多賀貫一郎(明治¹³)は<過去、大過去、未来、充分未来及ビ受方(即チ)過去、大過去、第一未来、綿密未来及ビ受方ガ…>、平塚定二郎(明治¹⁸)は<過去、大過去、未来、未来過去及ビ受方(即チ)過去、大過去、未来、過去未来及ビ受方カ…>、馬島珪(明治¹⁹)は<過去、大過去、未来、第二未来及ヒ受見ノ形ハ…>である。これを整理すると、

	[多賀]	[平塚]	[馬島]
Zukunft	: 未来	; 未来	; 未来
Fut.primum	: 第一未来	; 未来	; —
Vorzukunft	: 充分未来	; 未来過去	; 第二未来
Fut.exactum	: 綿密未来	; 過去未来	; —

のようになり、多賀と馬島は<Vorzukunft>が、平塚は<Fut.primum><Vorzukunft><Fut.exactum>が意識である。つまり<Vorzukunft>に関しては三者とも意識していることになる。平塚には《未来過去》《過去未来》がともに使用されているのが注目されるが、これが<Vorzukunft>と<Fut.exactum>の訳し分けのために為されたのかどうかは分からない。

<Fut. I>と<Fut. II>は、これらを正式な術語としているのは、明治期に使用された原典の中では Wilmanns(1885)くらいであるが(表 20 [212 頁])、副称としては各文法書中にて頻繁に用いられている。Schäfer(1882)の時制の正式名称は、1.Gegenw.(=Präs.), 2.Verg.(=Perf.), 3.Zuk.(=Fut.), 4.Mitverg.(=Imperf.), 5.Vorverg.(=Plusquamperf.), 6.Vorzuk.(=Fut.exactum) であるが、しかし、<Fut. I>と<Fut. II>も本書の説明文の各所に現れている。

表 19 (208 頁)を見ると、明治期の独文典ではその最初から《第一未来》《第二未来》が現れている。これは、やはり、《半過去》《過去》《大過去》同様、幕末～明治初年の蘭・英語学からの引き継ぎであろう(表 16 [161 頁]では《第二未来》は『和蘭文典字類』、《第一未来》は『洋学指針・蘭学部』以降に見られる。後者の出版は明治元年であるが、成立時期は安政⁽¹⁸⁵⁷⁾4年頃である)。

43) 表 15 (154 頁)では、Valette(1913)が唯一<Fut. II>ではなく、Kond.に関して<verleden-toekomend>[過去未来]という術語を用いている。即ち、Pres.Cond.[Ik zou(de) zijn=should be]は<Onvoltooid verl.-toekomende tijd>【未完成過去未来時】、Past Cond.[Ik zou(de) geweest zijn=I should have been]は<Voltooid verl.-toekomende

tijd>【完成過去未来時】である(43頁)。

しかし、和蘭語の<zoude+Inf.>は、過去から見て未来に起こる事柄を表わす場合と、現在における非現実を表わす場合との二種の用法を持ち、前者は文字通り「過去域における未来」、即ち《過去未来》である。『柳圃先生助詞考』には《過去未来》の例として、

D <'t> zou niet helpen, ten waane hij zelven sprak.

彼人それお言ざりせば助けられまし……俗語ニテイワゞ其時彼人がそれを言はずに居たらばどうもならぬ所でありたろう

がある(『蘭語学』I、375頁)。この<zoude+Inf.>を、柳圃は『四法諸時対譯』において《過去ノ未来》と呼び、現在における非現実を表わす場合は《未来》の<不定ニナル>としてゐる。一方《未来ノ過去》は<zal+Perf.>(=shall+Perf.)のことで、これが<Fut. II>に相当する。ここには《過去ノ未来》と《未来ノ過去》の混同は見られない。

44) この後、「余ハ正午に彼男を見たでもあらふ」という例文を挙げ、<明日ノ正午ハ一個ノ未来ナリ彼男ヲ見ル云々ハ一層ノ未来ナリ>という逆の注釈を附している。結局、澤田は、<此一章ハ到底十分翻譯ナラズ学者原文ヲ解スルノ日ニアラズンバ真味ヲ知ルベカラズ学者其レ之ヲ諒セヨ>と言って、匙を投げた格好である。

この《第二未来》の誤解については、明治¹⁸⁹⁹29年『英文典問答』にも言及がある。この書は<Fut.perf.>に《大未来》の訳語を充てる。そして曰く、<大過去トハ過去ノ以前(少クトモ同時迄ニ)ニ動作ノ完全終了スルモノ、半過去トハ現在時ニ終了スルモノ、大未来トハ未来ノ以前ニ起ルベキモノナレバ其名称穩ナラズト雖他ニ適當ナル譯語ナキヲ以テ以上ノ名称ヲ用ヒタリ学者譯語ニ拘泥シテ其真意ヲ誤ルコトナカレ(大過去ハ過去ノ前ト解スルモ大差ナケレドモ大未来ヲ未来ノ後ト解スルハ大ナル誤ナリ注意スベシ)>(94頁)。この誤解は、《過去》—《大過去》・《未来》—《大未来》の類推から生じたことは明らかであろう。無理もないことである。

45) この《過去未来》という術語は、明治期の国文典にも波紋を生じさせたようである。<見よ過去未来という不可思議なるものを作り出して自らの笑をも受けざるべからざるにいたりしを>と、岡田^{まさよし}正美は『解説批評日本文典』(明治¹⁹⁰²35)で憤っている(303頁)。この人の《過去未来》は未来完了のことであるが、一方、金沢庄三郎『日本文法論』(明治¹⁹⁰³36)のそれは<過去に遡りて動作の未来をいふ>ものだということである(793頁)。だとすると、金沢氏の《過去未来》は蘭語学における《過去ノ未来》に相当することになる。蘭語学の時代においては、岡田氏の用法は《未来ノ過去》であり、《過去ノ未来》と混用されることはなかった(現代オランダ語もまた未来・未来完了とは別に、過去未来・過去未来完了を持つ)。

《過去ノ未来》が Kond.ではなく Fut. IIの訳語になったときから、この用法的混乱は始まったように見える。平塚^{たけ}定二郎が<相反対ノ文字ヲ合併シ甚ダ解シ難キ>と言うとおり(本章第三節 3.2. [351頁])、この用語は、その背後にある洋語文法の知識がなければ、大槻文法の動詞過去の用語と同様、その意味を理解することができない類のものだと言える。

この背後知識が抜け落ちて用語だけが独り歩きすると、岡田氏のような憤懣が出てくることになる。明治⁽¹⁹⁰²⁾35年とはそういう年代であろう。「現在域における不定未来 (= 假定推量)」か、「過去域における未来」かという、その意味に基づいて術語を意識創出した江戸期～明治初年は、もはや遠くなっていたに違いない。

これについては、佐藤良雄も、「動詞の〈過去未来〉について」(『武蔵野女子大学紀要』Vol.5, 1970)において、〈もし、和蘭語が、もうすこしゆっくり、くわしく学ばれたのであったら、日本語の文典にも、もっとよい影響を与えたであろう〉と言っている(32頁)。そして結論的には、〈明治時代の国文典に過去未来、未来過去の両語が横行し、その区別に苦しんだこともある。しかし、過去の未来と、未来の過去は、はっきりちがっている。大槻文典において誇った、過去の中の未来、または未来の中の過去、これが明治の人々にじゅうぶん理解されたかどうかも疑問である〉との思いを抱かざるを得なかったのであった(34頁)。

46) Kond. を Konj. から分離するようになった理由については、本章の注 29 に挙げた K. F. Becker の言を参照。しかし、表 11 (107 頁) の日本の独文典において《約束法》が Modus として目立つ存在であるのとは対照的に、表 27 (342 頁) の独逸語原典では〈Modus Konditionalis〉は必ずしも一般的でなく、むしろ少数派である。

47) Konditional 即チ約束法トハ可能法中ニテ假定(又ハ約束即チ Bedingung ノ義ナリ。之ニ就テハ第十二節可能法ノ條ヲ見ヨ)ヲ表ス場合ニ用ヒラルヽモノナリ。而シテ之ヲ表ス特殊ノ変化ヲ指シテ約束法ノ変化ト云フ。然レドモ今日ニ於テハ多クハ別ニ斯ル區別ヲ設ケズ何トナレバ其所謂第一約束法(Konditional I)ノ代リニ Konjunktiv ノ Imperfekt ノ形ヲ用ヒ第二約束法(Konditional II)ノ代リニ Konjunktiv ノ Plusquamperfekt ノ形ヲ用フレバナリ。(第十三節)

48) 奈倉次郎『子スフィールド氏第三英文典講義録』Vol. II. §226. 上原書店、明治⁽¹⁹⁰⁰⁾33。